江島茂逸雜纂

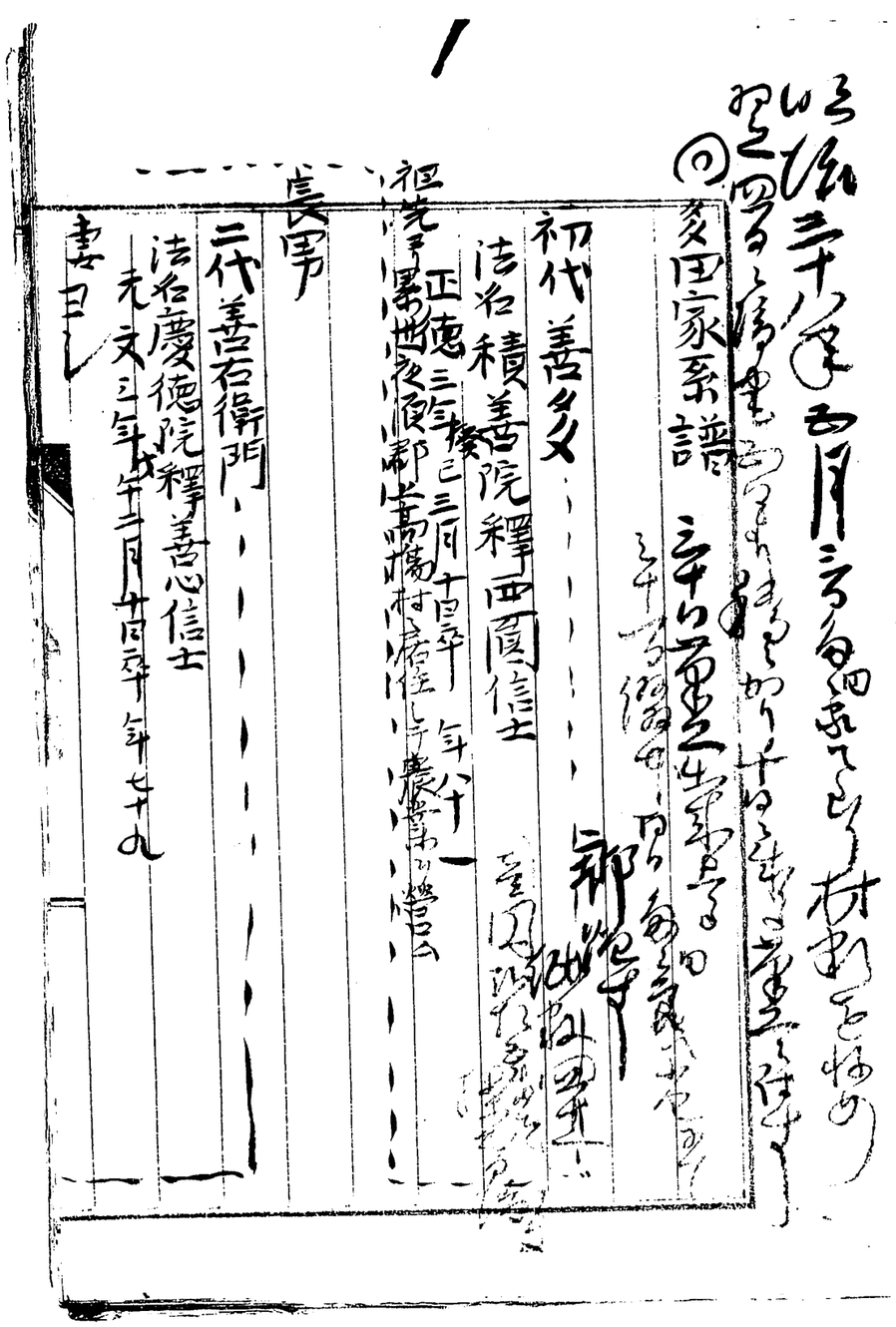
六

680
I
6

680
I
6

第六卷

多田家系譜
原田系譜
源姓黒田氏系譜
黒田一義系譜
黒田一葦遺蹟
森安平傳
新野保傳
三浦茂山傳



多田家系譜

初代 善多

法名 積善院釋西圓信士

正徳三癸巳年三月十日卒 八十一

祖先ヨリ居住シ後ハ郡山高橋村居住シテ農業ヲ營ム

長男

二代 善右衛門

法名 慶徳院釋善心信士

元文三戊午年十二月廿日卒 七十九

妻ヨシ

法名釋尋妙信女
寛保三癸亥年八月二日卒　年八十二

長男
三代善右衛門
法名釋德淨信士
天明甲申年七月十日卒　年七十七
妻
法名釋妙知信尼
明和二乙酉年四月三日卒　年七十八

次男
吉五郎
法名釋[illegible]道不退
寛政四壬子年[illegible]月四日卒　年[illegible]

長男
四代善右衛門
法名釋妙休信士
文政六癸未年[illegible]月二日卒

妻キク
法名釋妙空信女
弘化三丙午年[illegible]月[illegible]日卒　年八十一
寛政三年三月夜須郡高場村字大竹見本妻ニ来ル森山村ニ轉住ス

次男
七右衛門

同人妻子ノ
夜須郡畑島村近藤市右衛門ノ長女
嘉永七年森山村松林多田新平ヲ夫妻ニ分家財産ヲ
以テ養子トナル

三男
六右衛門
法名釋自順不退
享和三年癸亥正月十五日卒ス

長女ノブ
森山村松林多田新平妻ニ嫁ス

次女ユウ　早世

文政七年甲申正月十四日卒ス

三女ヒサ　早世
天保六年乙未七月十三日卒ス

養子
五代七三郎　初名七五郎
幾右衛門子ナリ依テ森山村多田吉次ノ三男七五郎ヲ養子ニ請ス
法名釋浄心信士
安政七年庚申七月十三日卒ス

妻ヌヒ
森山鶴田市次郎女
法名釋妙尚信尼

慶應四年戊辰三月十九日卒之年七十八

長男

六代七三　初名忠助

文化十二年乙亥三月十日誕生

法名有徳院釋諦誠居士

慶應三年丁卯五月十日卒年五十二

七三郎ヲ養子ニ致シ弘化五年ヨリ絞染業及絞職業ヲ開

初シ嘉永四年亥年ヨリ醸造業ヲ始ム後生産繁盛ニシテ

慈善心ヲ富ム藩主ヨリ度々賞詞ヲ受ク

妻ヨシ　文化十四年丑年十月十日誕生

法名釋妙清尼

明治十年丁巳九月二日卒年六十二

長女ヨシ

養子勇右衛門　妻ヨシ

養子

七三郎　初名勇右衛門

夜須郡畑島村近藤市右衛門三男

天保五年甲午七月十日誕生

明治三年庚午養父ニ代テ職ヲ継ク故ニ十歳ニシテ家政

ヲ継キ農業絞染業及醸造業ヲ営ミ益々精勤シ

テ大ニ家産ヲ増ス年五十ニシテ退隠ス藩主ヨリ賞金或ハ

町村ヨリ賞状ヲ仕組差遣サレ度々賞詞ヲ受ク

妻ヨシ

明治十年九月二日卒年六十二

天保九年戊戌七月二十日誕生
十三郎 長女ヒサ 家政 稽勝内助ノ新名ヲ
法名 令徳院釋妙靜禪尼
明治二十一年三月二十四日 享年六十一

長男
八代 孝弟
安政四年乙巳九月九日誕生
明治十九年十月家督相續 時年三十歳

次男
第七郎 安政七年六月廿日誕生
明治三年十月 夜須郡三根村大字[illegible]次郎右衛門方

三男

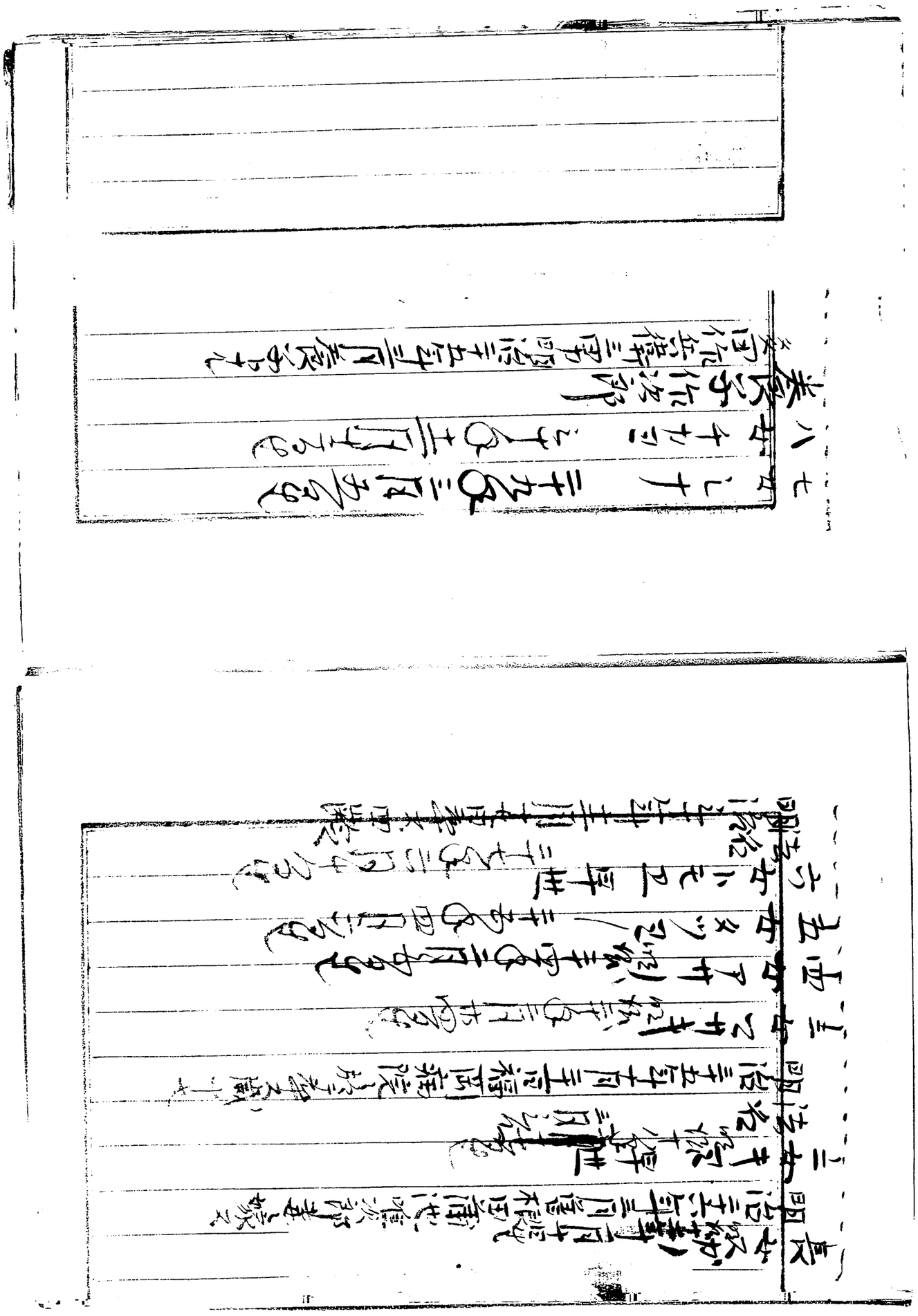
正實 明治四年五月廿七日誕生
明治二十年二月當所本宅隣地五分家ス

長女イツ子
明治二十四年十二月 畑島村近藤朝太郎妻ニ嫁ス

前妻ナミ
夜須郡當根村浦池藏ノ次女
明治九年二月離別ス 三女アサヒ出生ス
明治二十二年十月事故ニ離別ス

後妻ツギ
朝倉郡秋月町士族田代半蔵ノ妻 明治三十三年一月来嫁ス 四女アサヒ出生ス

長男
雄 明治十五年二月誕生



七代七三郎義[illegible]傳

義は天保七年丙申十七日[illegible]を以て夜浜郡畑島村近辺家に生る父を市右衛門と稱し世々長を以て業とす三男二女あり義は其第四男なり[illegible]森山村多田家に嫁せし縁を以て喜[illegible]二年迎へられ其時十四歳なりし七三郎即ち六代七三郎義[illegible]養子となる義の一女ありしかと名つく郎の義は富時[illegible]家の財なれは本家より面倒[illegible]片島氏に新たに四男を以て家業を輔く富時養家は絞油を業とす傳農作誰と共店をも営み[illegible]

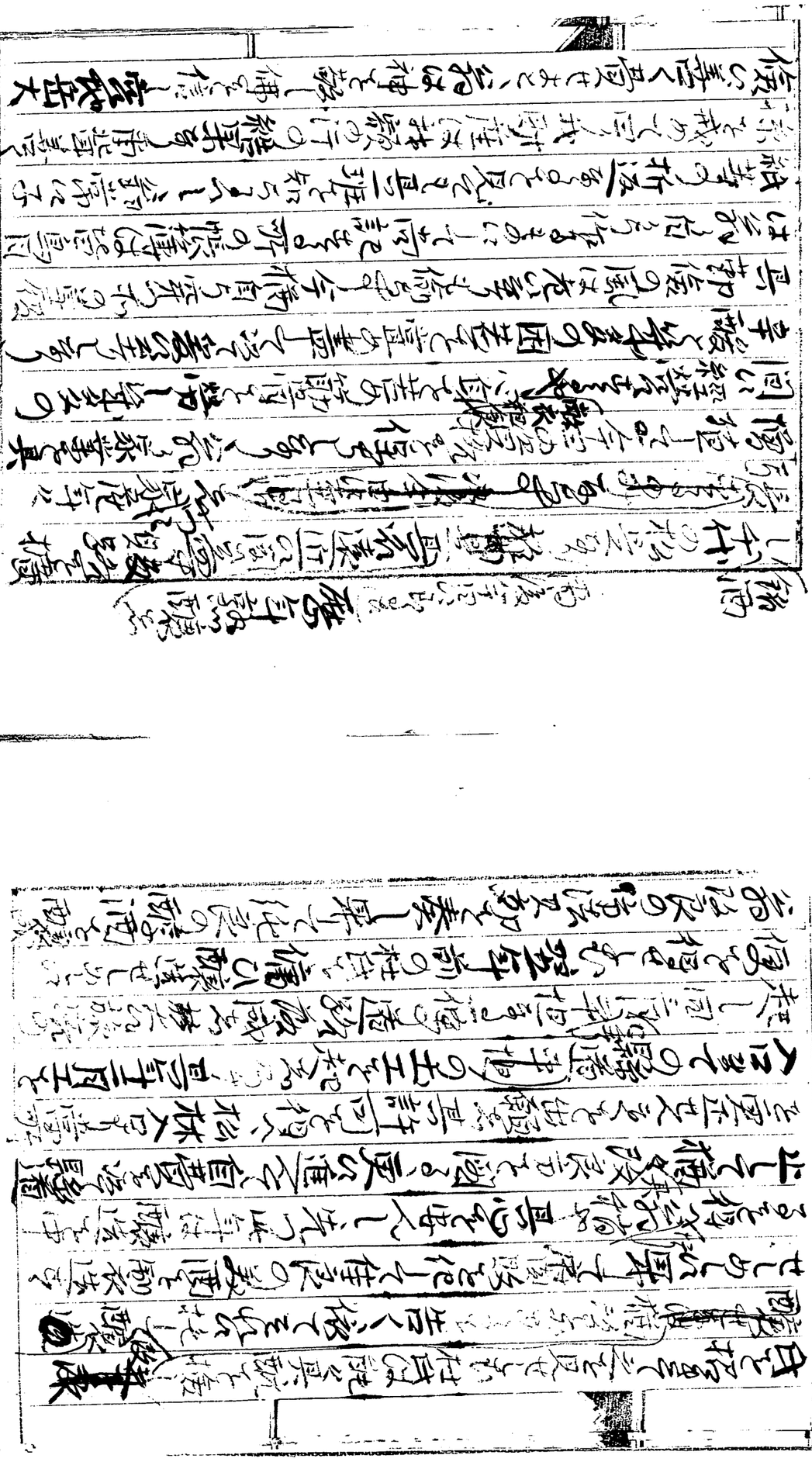
忙敏新劇の業に陰忙なれば日夜奮勵怠倦の暇なく孜々家業を勤ハ給ひ款情達觀あり年十七歳の時酒造業の嚆矢利あるを察し養父を勧めて其業を創む造醸の方針を誤まり幸運到来遠近に聞へ四方の花客僕僕絶へず年毎酒を醸造一万石を追て造石を倍すに及ぶ陰に於る義母自ら醸酌の働を為し生育を厚て慈愛を奬勵す、常に曰く人を使人と欲せハ先つ我身を使へと、又た農稼の術に熟精し自ら耜を執て耕鋤し身を時の間を倉皇中に奉食景況怠惰す、家性ハ樹を好み

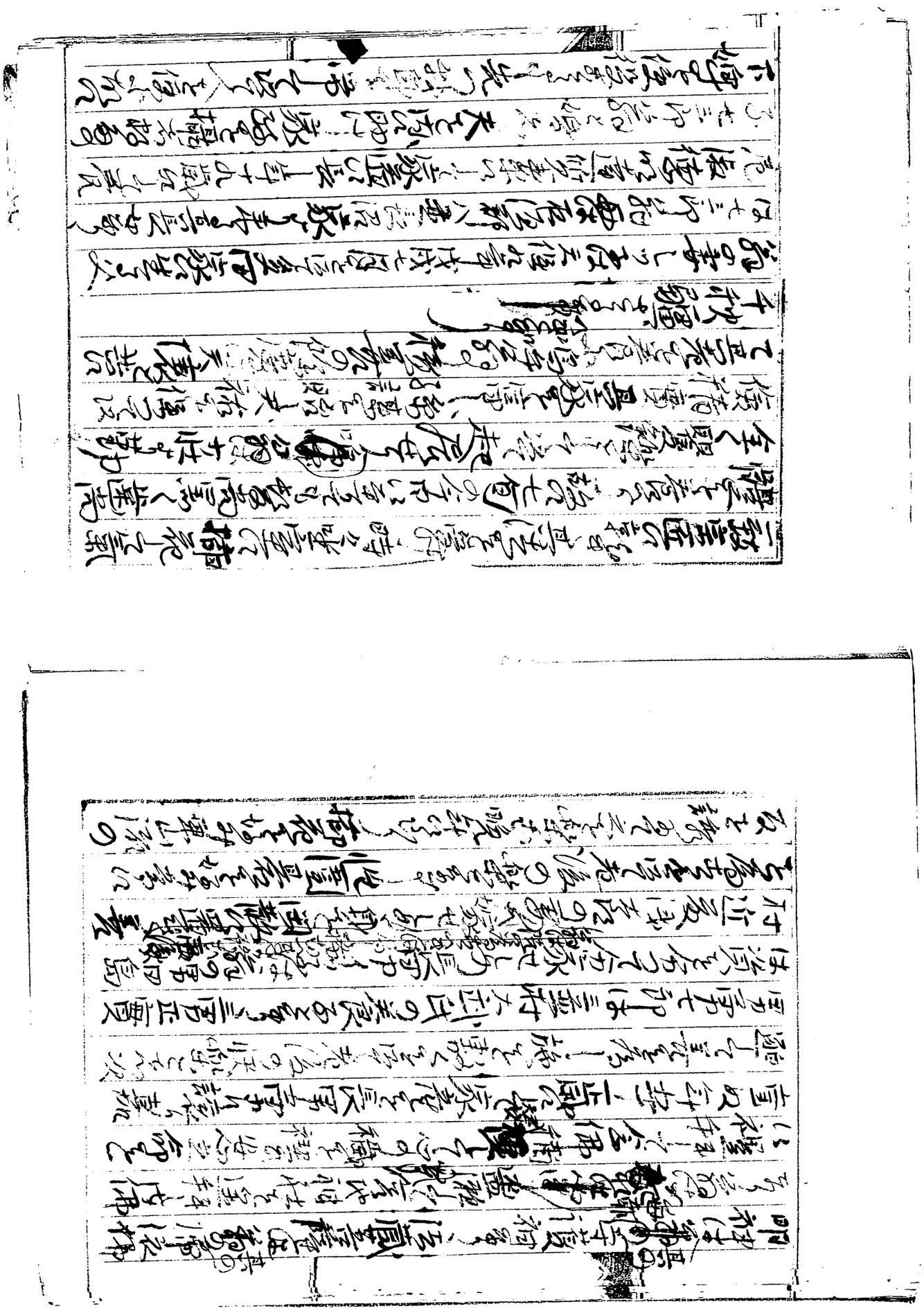
みに回り以自ら出て荒蕪を開墾し櫨樹を植立て或ハ原野山林へ分ケ松杉檜を仕立て永遠の基本財産を作ると雖ども生存中の目的を定め年毎三十一歳にして家督を譲り隠居を終ひ四年に於て長男の母力を唱ひ年毎時に年三十二歳なり書簡を送り二月二日養父七三郎翁卒去す義父妻の悲哀義人なるを喪辛り親戚協議の上家産を相続し父の名を襲ひて七三郎と改む、父の遺言に遵ひ絞油及酒造及農作の業を廃し専業を制抑も

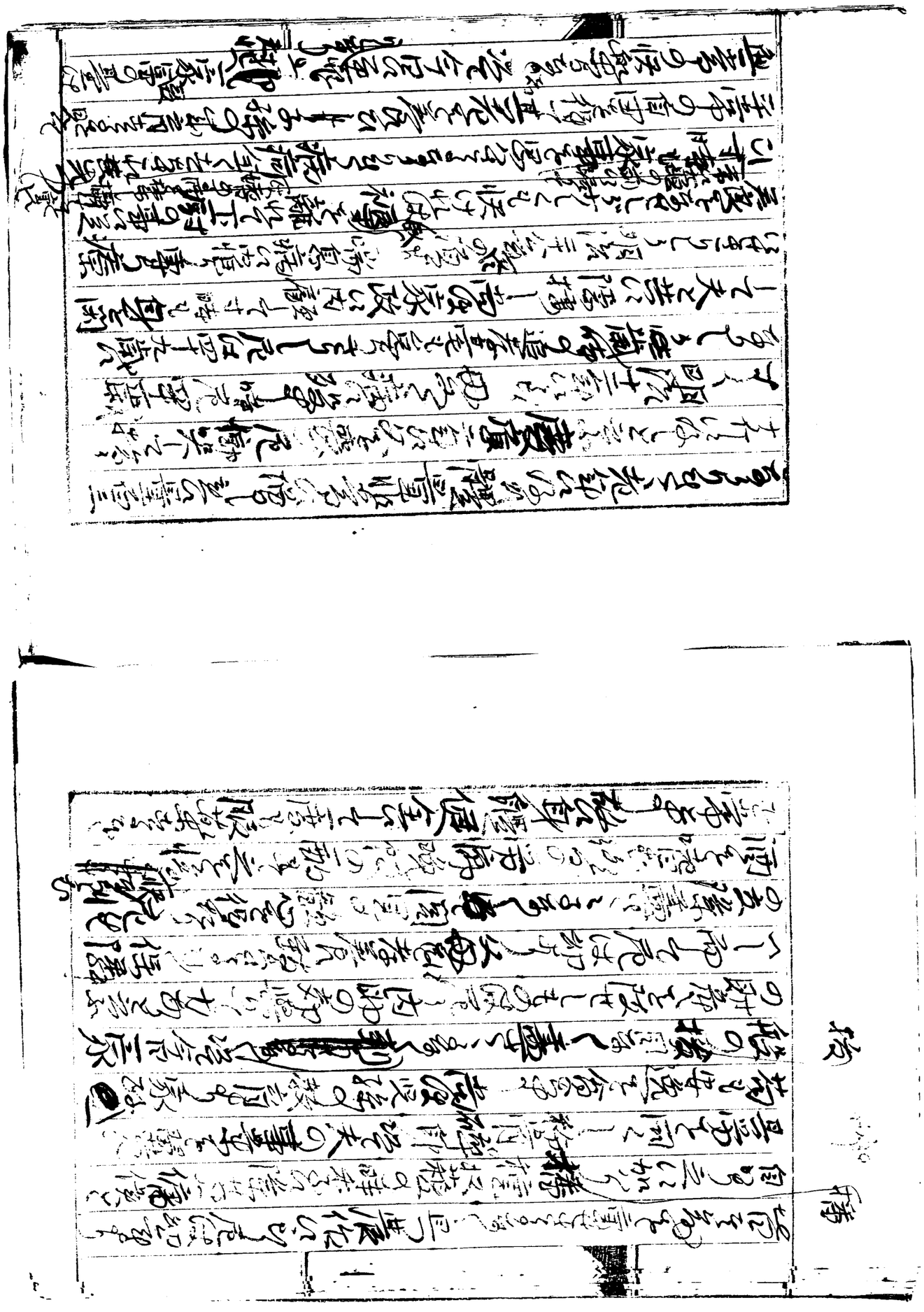
谷の性質自ら奉すること儉素にして除財あれハ必ず興隆清廉なり

之を貯蓄して以て其基礎を固めんとす殊に經
濟の道に長じ人の美良なるを以て富初數畝の田畑
と雖大に信りて仕ふ之を耕作し其所得を以て之
を貯蓄し其利益せし金員を以て春秋祭祀の費
用に供し一家殷富に赴き以動千金に上りしと云ふ其家庭
を相傳して以來倹素の方法を立て慈悲
救濟の事を施きて一家殷富の基を開けり
維新改革に際し世上何となく穏ならず為に物
價の乱高下を来すに及び其間然に諸方に致富の
機會此時にありと云ふ故に此義は新に仲間高と始む
責

時に福澤氏の事業自己に纏繞し取引賣買暗に神
妙を極め其慶屋々中皆數倍の利潤を積
さるなく且つ物價の騰貴する其に酒造の
利益は二三倍に達す加之慶応置縣に際し藩
札の變動に際し得意の經綸を其間に投じ其
三個年に於て一擧一動皆利益なるなく不世の家業
と富強するに至る
前家の釀造法は腐敗に陥り不年豊富なる
独れ其義の家業は十しくも挫折せんとす時に近郷久光野
村に杜氏北條林平なるものあり釀造法に精し義は其社







夫婦の和合あり、夫は剛厳にして外に働き、妻は柔順にして内を守り琴瑟和気して善を行ひ福を求めて子孫を成育す。唱呼尼の如きは家事経営に勤め道一人の為たり人の母たるの道を知りて之を行ふ、故に天祐を得へ夫妻相共に古稀の齢に及へて壽考健全なり。

今日に及ぶまで、妻は亡夫の遺志を継ぎ家業を営つて多年家産を増し、孫は吉屋山の前に住する如く千歳川の流れに臨みて業を起し、子孫繁昌して一族を挙げて一統に宜敷しかるべし

嘉永五年壬子七月

森山村

今般赤五拾俵致献上奇特之至依之代御上下之部

御目通被仰付候事

嘉永五年壬子七月

森山村

七三郎

御武備に手厚為す志硝石代金七兩致献上時時勢

抽遂勤弁奇特之至仍賞之御酒御吸物頂戴申附候事

子十二月

森山村

七三

為作初穂米三俵致獻上高特之至ニ候所村仕組ニも
格別之志相立旦近年御納方節致出精候段ニも相達候仍
賞之一代脇差御免申付候事

（寛延元年十二月）

木林山村　七三

御領分貧民借財之儀ニ付去冬ニ被仰出之御主意即弁
ニ付ニ貸附置候米銭差撰奇特之至ニ候依而賞
之御酒弁外被下候事

（安政五年戊午十二月）

御領分貧民借財取扱之儀ニ付去秋以来被仰出候
御主意致勘弁是迄貸附置候金子之内百五拾九兩余
差撰奇特之至ニ候仍賞之三代脇差御免三代江戸御上下之節御目通被仰付候事

（文化元年十二月）

木林山村　七三郎

當所村仕組分金拾八兩致獻上高特之至ニ候仍賞之三代
脇差御免二代江戸御上下之節御目通被仰付候事

酉十二月（文久元年辛酉）

森山村

三郎

為作初穂米三俵致獻上奇特之至候仍賞之御酒弁被下候事

子十二月（元治元年甲子）

森山村

七三郎

為作初穂米三俵獻上以ッ奇特之至候仍賞之酒弁被下候事

丑十二月（慶應元年乙丑）

森山村

七三郎

為作初穂米三俵致獻上奇特之至候仍賞之苏鎌弁被下之候事

寅二月（慶應二年丙寅）

森山村

七三郎

去年備置米拾五俵差出奇特之至候仍賞之代々賦差御免申附事

卯月（慶應三年丁卯）

森山村

七三郎

當村零落ニ付同村仕組ニ而金百兩獻上ニ付貸
附置候金子利足之内用捨をもつて彼是志ニ付立候
段奇特之至候仍而賞之詞代苗字上下御免申付候事

（明治三年巳）

所々不作ニ而度々困窮之折柄存被ニ付米拵候希栗
柄

森山村

多田七三郎

去候差出ニ付兼而窮民救之為備相立置候ニ付近
々不作ニ而社方行詰り存備相崩候難斗（計）前新ニ
致出金備相立候段相達奇特之至候仍而賞之
御料理被下候事

（明治三年庚午）

五月

（明治三年庚午）

鏡前図帯七左図三十図三森山村平民

多田七三郎

聖子枝賞ニ付金拾両寄附候段奇特之事ニ依而
為其賞木杯壱個下賜候事

（明治十三年六月手付）

福岡縣

夜須郡森山村

久田七三郎

夜須郡栗田村外三個村会員弐拾助として米四石四斗弐升

施與候段高持百石木林志個當與候事

明治十九年當月分福岡縣令後四位勲壽安博保和

明治廿年八月五日

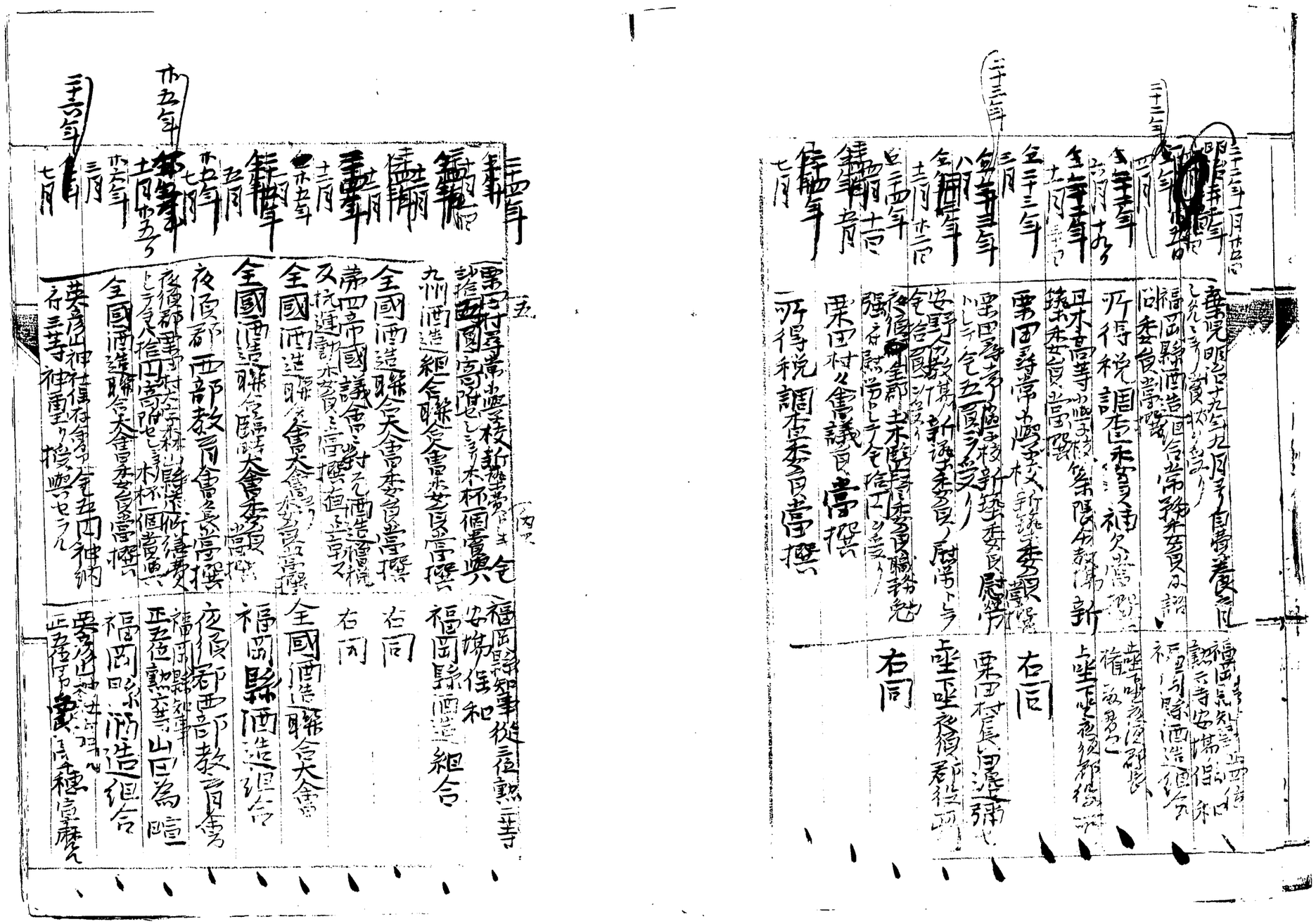
栗田村

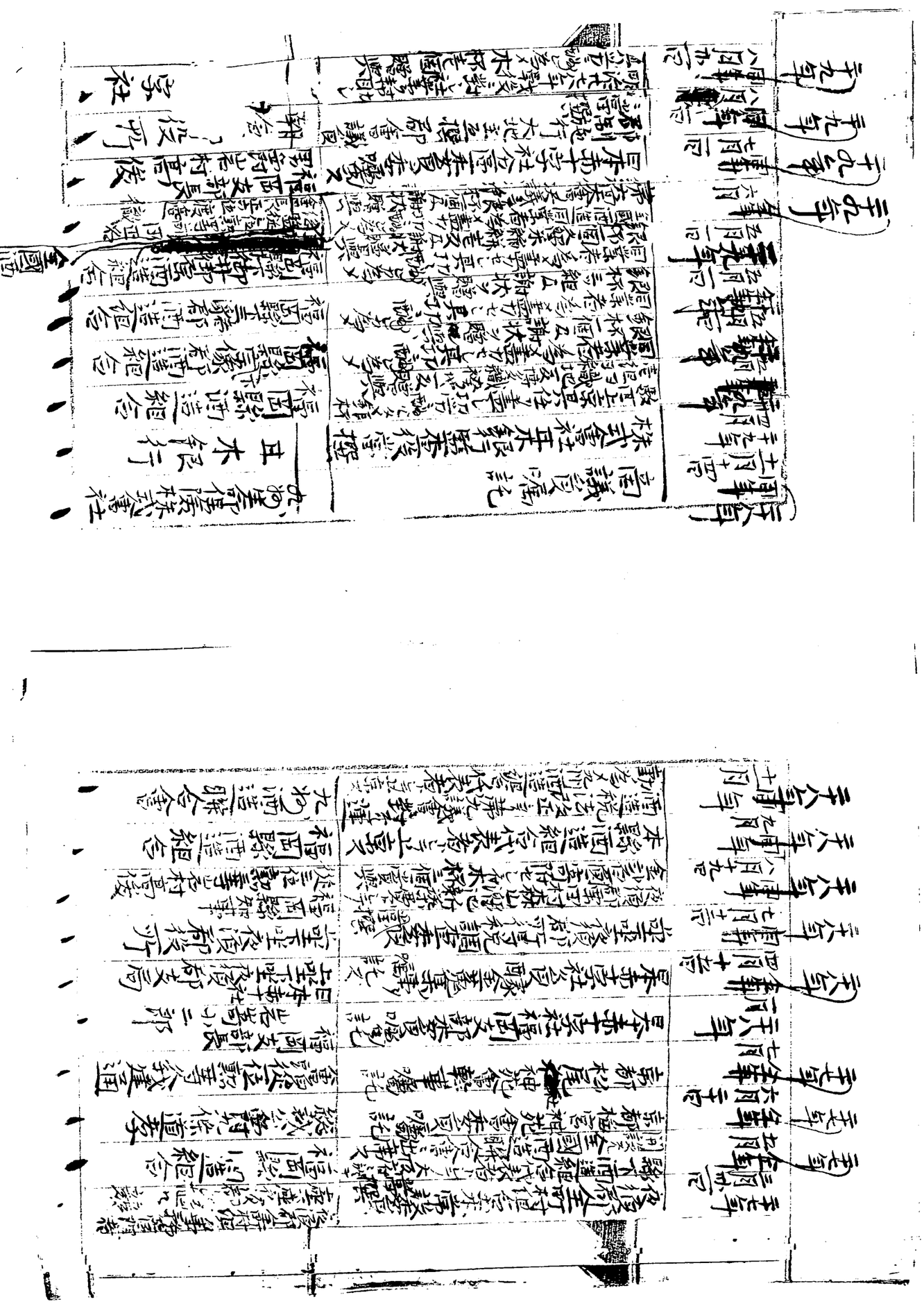
二月十五日稿了

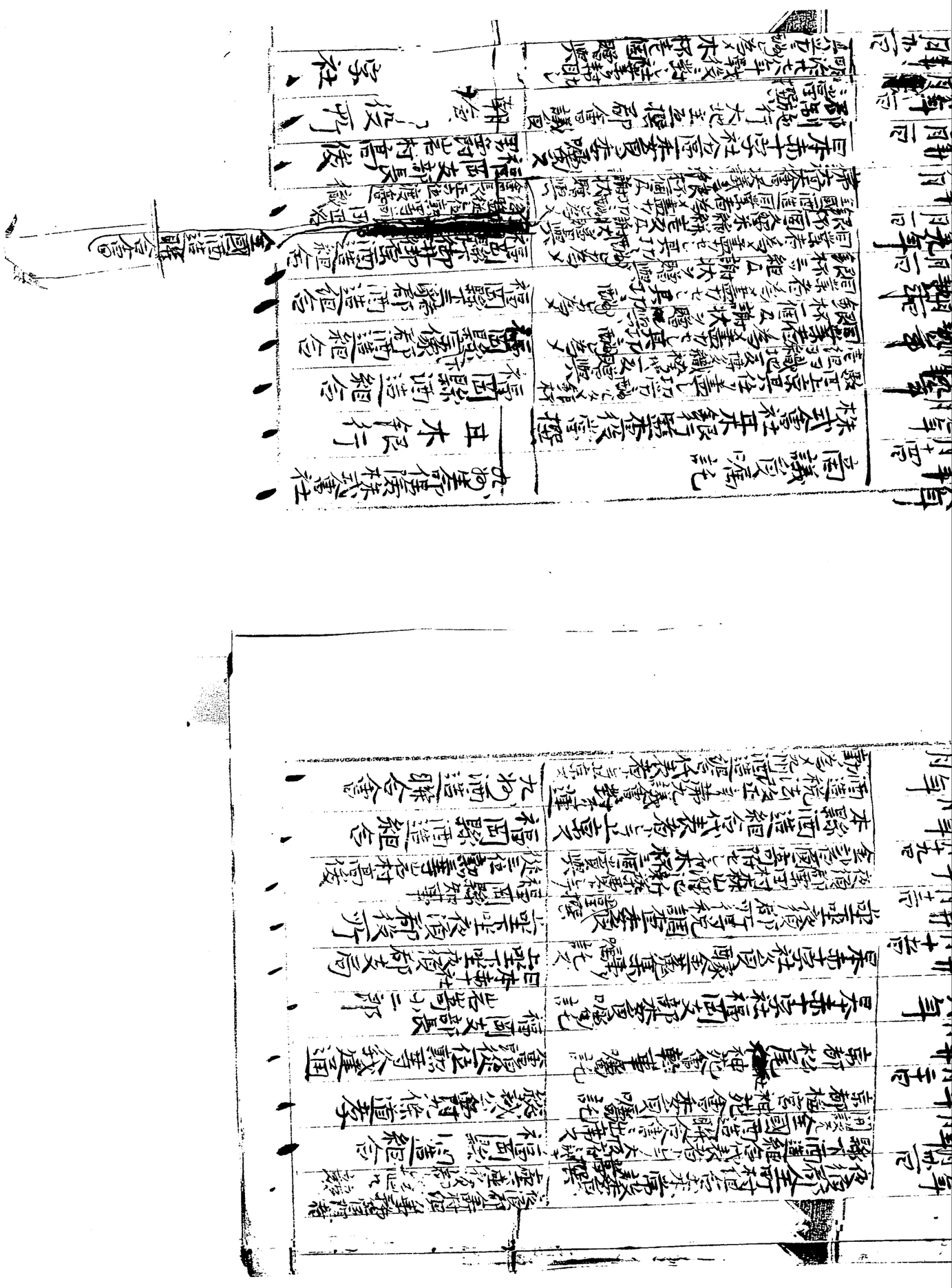
二十九枚

當代當番

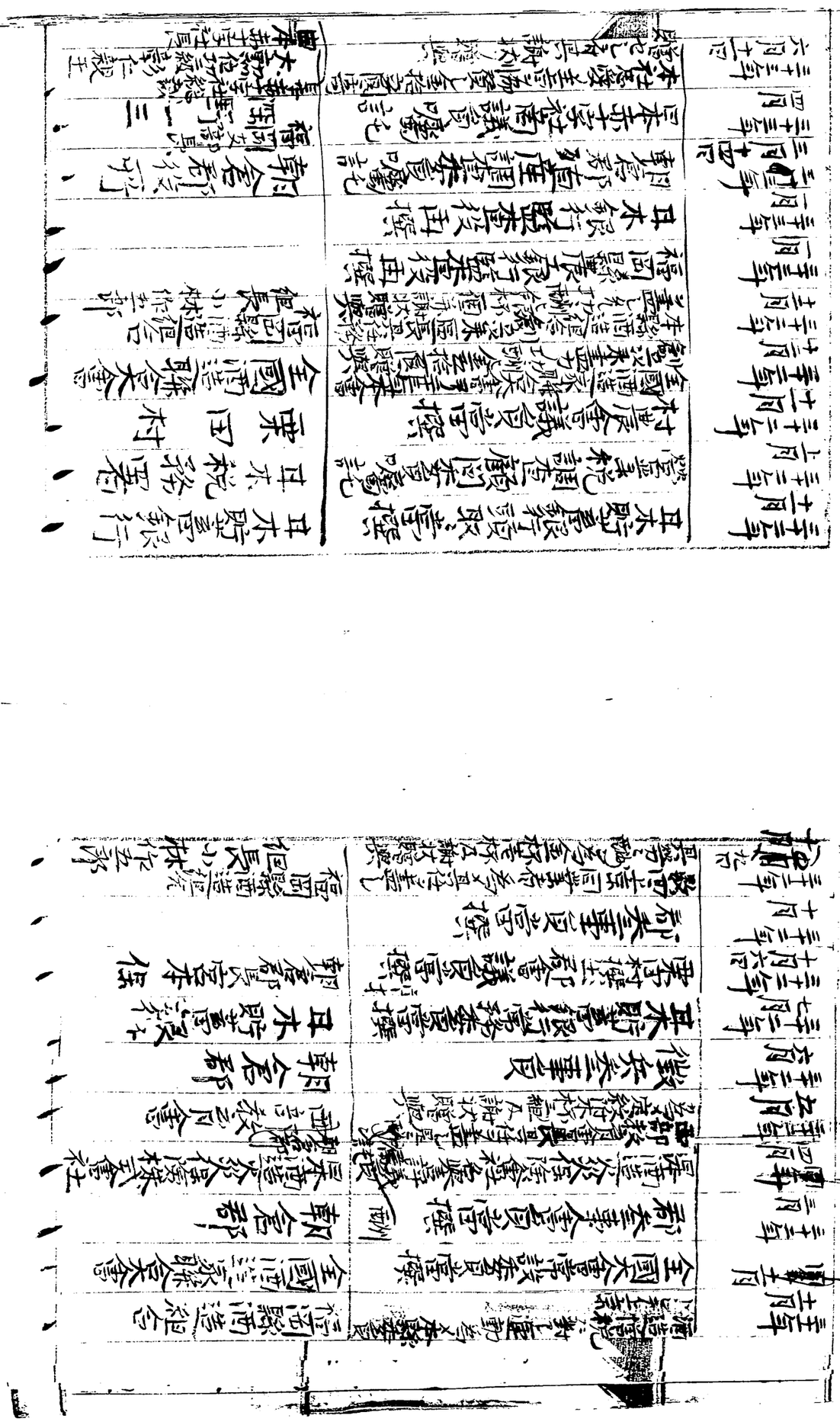
年月	事務	第七大區調所
明治四年	福岡縣第大區三區 森山當所長者一個村 保長	森山村 森山當所長者
三年四月		
十年十月	村會議員當撰	
十年十月	村會議長當撰	
十年十月	栗田村外二個村会會議員當撰	
十五年五月	栗田村外五個村会會議員當撰	
十六年五月	栗田村外五個村会會議員當撰	
十八年五月	夜須郡全部村組会議員當撰	
十八年七月	夜須郡全部村組会議員當撰	
十八年四月	夜須郡郡會議員當撰	







二十九年九月	本縣組合組織以来組合事務ニ尽力功労アルヲ以テ銀杯一組及ビ謝状ヲ贈与セラル	福岡県酒造組合
同年十一月十五日	同業者ノ為メ尽力功労アルヲ以テ謝状ヲ贈与セラル	佐賀県酒造組合 組長 北島佐八
三十年二月十五日	朝倉郡三奈木村学校建築費トシテ金八拾円寄附ニ付木杯壱個賞与	福岡県知事 従三位勲三等男爵 岩村高俊
同年四月	熊本税務管理局営業税調査諮問委員嘱託	熊本税務管理局
三十年六月一日	二十七八年戦役ノ際軍資金ヲ献納シ奇特ニ付褒状	福岡県知事 従三位勲三等男爵 岩村高俊
三十年六月	諮問委員当選	福岡県酒造組合
三十年九月	福岡県農工銀行設立委員任命	福岡県
三十年十一月	大機動演習ニ付本郡事務委員嘱託	
三十年十一月	福岡県農工銀行監査役当選	福岡県
三十年十一月二十八日	豊太閤三百年祭ニ付金五円寄附ニ付七等銀勲章ヨリ贈与セラル	豊国会長 侯爵 黒田長成
三十一年二月	第二回五二会全国品評会評議員特撰	全国品評会 会長 前田正名
三十一年三月二十一日	本縣農工銀行設立ニ際シ尽力功労アルヲ以テ設立完全ヲ告ケタルヲ以テ謝状贈与セラル	株式会社福岡県農工銀行 取締役 福岡県知事 岩村高俊
三十一年三月二十二日	第五回五二会全国品評会ニ付本組合ノ出品係監督嘱託	福岡県酒造組合 組長 小林作五郎
三十一年三月二十八日	第二回五二会全国品評会ニ付本組合出品取締長嘱託	右同
三十一年三月二十八日	監査役重任	株式会社日本銀行
三十一年四月	本縣下酒造家代表者ト定ム	福岡県酒造組合
三十一年六月		
三十一年九月一日	明治二十九年無■■■■ノ際罹災者救恤トシテ金十三円ヲ寄附シ奇特ニ付褒状	賞勲局総裁 正二位勲一等伯爵 大給恒… 賞勲局… 河野主一郎



三十三年九月一日　任朝倉郡臨時委員

三十三年十一月　朝倉郡營業稅調査顧問囑託

三十四年一月　農工銀行監査役ニ任ス

三十四年二月二十日　朝倉郡會議員辭任ス

三十四年七月一日　朝倉郡所得稅調査委員囑託

三十四年八月十日　朝倉郡營業稅調査委員囑託

三十四年九月十五日　福岡縣酒造組合ヨリ代表者ヲ出張ス

三十四年九月十六日　東京高等師範學校ニ九個ノ贈與セラル

三十五年一月十九日　福岡縣農工銀行監査役ニ任ス

三十五年四月　九州代表者

三十五年十二月一日　福岡支部長ニ福岡縣中社業擴張ノ事務ヲ委囑ス

三十六年一月十五日　福岡縣農工銀行監査役ニ任ス

三十六年七月　株式會社耳木銀行頭取ニ當選ス

三十七年二月　福岡縣農工銀行監査役ニ任ス

三十七年三月　福岡縣農工銀行監査役ニ任ス

三十七年九月分　特別社員ニ列ス

日本赤十字社福岡支部
福岡縣知事正五位勳三等
河島醇

日本赤十字社總裁
大勲位功一級侯爵
日本赤十字社長

三十七年十二月　朝倉郡栗田村字常盤五百備田に〔?〕風琴壹台を寄附し木杯壹個賞與　正三位勲一等伯爵松方正義

三十八年一月　福岡県農工銀行監査役當任　福岡県知事従四位勲三等河島醇

三十八年三月　福岡県教育會朝倉支部會評議員に當撰

後に之を[illegible]

以上八年君の履歴は[illegible]掲げしも

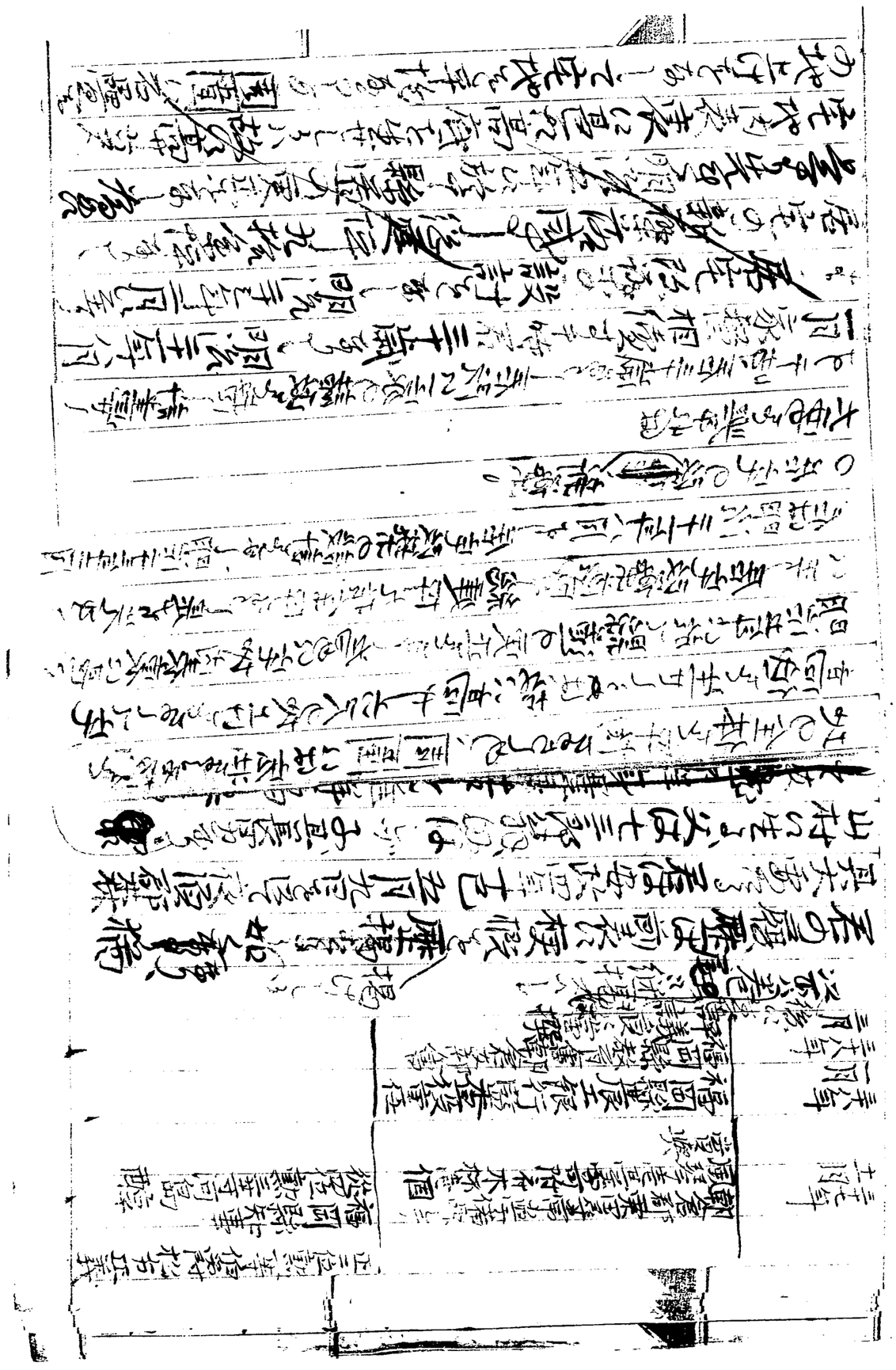
君の履歴は前表に梗概を歴揚せるが如く掲げしが如く、其大要なる　君は安政四年十二月九日を以て夜須郡栗田村に生る、父は七三郎、母は しげ 子且長男なりし

七歳[illegible]群鶴[illegible]書あり

文久三年[illegible]歳七歳にして邑の手習師匠久野亭十郎の門に入る明治元年十二歳より同村高井の塾に於て経史を学び明治三年十三歳にして[illegible]轉住[illegible]明治九年に迄専ら家事の業務に従事し明治十九年十一月家督相続す于時君三十歳なりし君既に一家の諸政を営し計画せし大要を挙ぐれば

の居宅の新築

君は明治二十一年八月より居宅改築の設計をなし明治二十三年十二月に至り居宅改築落成す総建坪九拾余坪なりし是より先き明治十五年に於て県道の改正をなし為めに宅地表裏に甚しく高低を生せしむれば、故に高サ六尺の地上げをなして宅地の全体を平坦ならしめ、周囲には宏壮なる石垣、と



[illegible]
利用す、高屋谷より、杉樽材を黒田藩山林より松材
は森山中島山より石材は菅根田より尾は筑後上島
より土方は廣島より大工は久光村和田茅吉と棟梁
[illegible]木挽左官石工六拾餘名を督勵して工事をなす
續て訓間半に四間の二階付物入、訓間三訓間半に訓間半に
四間の納屋、訓間半に六間の倉庫、五間に九間の酒造
蔵等凡て瓦葺の新築をなし備せて訓間に訓間半に
の馬屋、訓間半に四間の倉庫、訓間半に八間の納屋、三間
半に拾訓間、及三間半に九間の酒造改築あり茅は明治

三十一年八月より起工し四個年を閲し即ち明治三十八年八月に至
りて全部の建築完く落成を告るに至る其要せし費用
は實に壹万訓千餘圓なりしが降て明治三十二年一月第五
實氏の分家の新築あり訓間半に四間の母屋上棟をなす引
續き訓間半に八間の稲屋、馬屋、薪屋、訓間に六間半の
倉庫母屋外門附屬の建物をなす明治三十四年二月三十四
年に至て分家の式を擧行す 續きて明治三十四年三月
訓間半に四間の器蔵、訓間に六間の隠居家を新築あり
三十五年八月に離座敷壹棟、及廊下の新築をなす之れ
に要せる費用金四千圓なりし三十九年三月に庭園を築く

庭師は博多帽子屋の洋屋崎仙平なりしが安せし費用
金壱千三百圓なりし
○畑の変換と殖産事業
君は畑の変換と殖産事業を
なし[illegible]廣島縣人出産を補助して通して
人夫七千有餘人を安せしめ是より生つる年々の利益大
矣なり、明治二十九年二月に始て殖産主黒田家に對し
字馬屋谷へ杉苗五千本を植込ませ培養して同家の
基本金に寄附として之を献納せり 降りて明治三十六年の比より
秋月左字江川谷へ殖林事業を着手し 土地五拾餘町歩

初めて聘して其者を
[illegible]しめ

を購入し是に幾万の杉樹を植附せり 苗等の監督は
長男常雄氏として鹿児島に生つへき利益は實に測り知るへ
將来に生つへき利益は實に測り知るへ
○敬神と慈悲の業
君敬神の意厚く念仏堂に高い昌福を興せしは
明治三十七年五月旦那寺光蓮寺佛間に金参拾圓を寄
附して唐検間、櫛間を寄附し 同年七月には黒田村
祖先の墳墓を
金貳百枚助として金拾圓を投ず、同年八月には字鳥越へ墓
地を新設し、杉林字浦ノ[illegible]に改葬し、石塔の新
設及碑石の再建を[illegible]、明治三十年三月には黒田村
郷社松英八幡宮の石燈全部を設施す、其費[illegible]
を要せり、 三十六年十月には同社の傷

庭師は博多帽子屋[illegible]洋屋崎位平なり[illegible]安せし費用
金壱千三百圓なりし
○畑の開墾、殖産事業
君は畑の[illegible]殖産事業[illegible]係りて[illegible]其計畫を
なし[illegible]廣島縣人士宣吉を社長として通して
人夫七千百餘人を安せり、是より生つる年々の利益大
矣なり、明治二十九年二月に至りて舊藩主黒田家に對し
字馬屋谷へ杉苗五千本を植込ナ[illegible]培栽、為て同家の
基礎を[illegible]沼貫として之を[illegible]隆[illegible]せり、降りて明治三十六年の比より
秋月大字江川谷へ殖林事業を着手し、土地五拾餘町歩
を購入し是に幾万の杉檜を植附[illegible]等の監督は
長男常雄氏をして[illegible]ちあり年々盛に培養しつゝあり
将来に生つべき利益は實に測り知るべ[illegible]

○敬神と慈悲の業

君敬神の篤信[illegible]に富む事端を発れは
明治三十七年五月旦那寺光蓮寺佛間に全奉拝圓を喜
捨して唐秧間、櫃間を寄附し、同年七月には黒田祖先の墳墓を
金貳百圓を投じて全拵[illegible]を投ず、同年八月には字鳥越に墓
地を新設し、杉林字[illegible]浦に[illegible]石燈の新
設及び碑石の再建を[illegible]、明治三十年三月には栗田村
郷社松英八幡宮の石燈全部を設施す、其費[illegible]
を要せり、三十六年十二月には同社の傷

庭師は博多帽子屋乃洋屋崎仁平なり是れ費用
金壱千三百圓なりし
○畑の家樹は殖産事業
畑の家樹は殖産事業に係りて初めて聘して其者を
君は畑の家樹は殖産事業に係りて一意其計畫を
なし廣島縣人出産者を雇ひて通して
人夫七千有餘人を要せり是より生つる利益大
矣なり明治二十九年二月にありて舊藩主黒田家に對し
字馬屋谷へ杉苗五千本を植込ませ培養して同家の
基本に資するとして之を献納せり 降りて明治三十六年の比より
秋月左字江川谷へ殖林事業を着手し 土地拾餘町歩
を購入し是に幾万の杉檜を植付けこれ等の監督は
長男力雄氏として鹿児島ちゑ氏を盛に培養しつゝあり
将来に生つべき利益は實に測り知るべし
三十六年十月以降の殖林

五拾圓を寄附す　天文同年十月には栗田村光蓮寺へ
保存金として金參拾圓を寄附せり
○義務職の撰任

九年五月	在任日月	退任日月
明治十年十月	東栗田村外村村村會議員	三十八年七月廿三日退任
大正三年十月	四子區會議員	三十四年八月十五日辭職
大正三年十月	郡會議員	三十六年十二月退任
大正三年十月	區會議員	三十四年三月廿七日辭任
大正三年十月	郡參事會員	三十八年三月退任
大正三年七月	郡會議員	三十四年三月廿七日辭任
大正三年四月	郡會議員	三十四年三月廿七日辭任
大正三年四月	福岡縣酒造組合常務委員	同組合解散
大正三年五月	栗田村外二村會議員	三十四年三月廿七日辭任
大正三年十月	九州酒造組合常務委員	三十四年三月廿七日辭任
大正三年七月	郡酒造組合常務委員	三十四年三月廿七日辭任
大正三年三月	全國酒造組合連合會常務委員	三十四年三月廿七日辭任
大正九年十月	九州生命保險株式會社監査役	三十四年三月廿七日辭任
大正三年十月	郡會議員	三十四年三月廿七日辭任

君の家業は猶ほ君の信用負債の償却に日月を閲し滿天下指目の徒及び政黨淵源の人士の如きは則ち君を見るの意を忘れざりしの一行の表徴なり

いと寄附せり

こして金参拾圓を寄附せり 又同年十二月には粟田村光蓮寺へ

職の擔任

業の傍ら公私の職を擔任せられしは左の表の如し

職名	退任月日
東郷村外四ケ村 村會議員	三十八年七月より三十一年六月二十日退任
學區會議員	三十四年八月十五日辭職
郡會議員	三十六年十二月退任
區會議員	三十四年二月二十七日辭任
郡參事會員	三十八年三月退任
	三十四年二月二十七日辭任

職名	退任月日
夜須郡各町村聯合會議員	
夜須郡組合立[illegible]學校[illegible]委員	
福岡縣酒造組合常務委員	
同諮問委員	
栗田村人會役員	
九州酒造組合聯合會委員	
夜須郡西部教育會委員	
全國酒造組合聯合會委員	
九州生命保険株式會社取締役	
朝倉郡會議員	三十四年三月二十七日辭任

君は家業の傍ら諸般の義務に擔任せられしは左表の如し

殊に君は福岡縣酒造組合に於ては又部長に評議員に諮問委員に擔任し明治三十八年十二月より同三十九年十二月に至る迄縣酒造業の総代として數回上京し

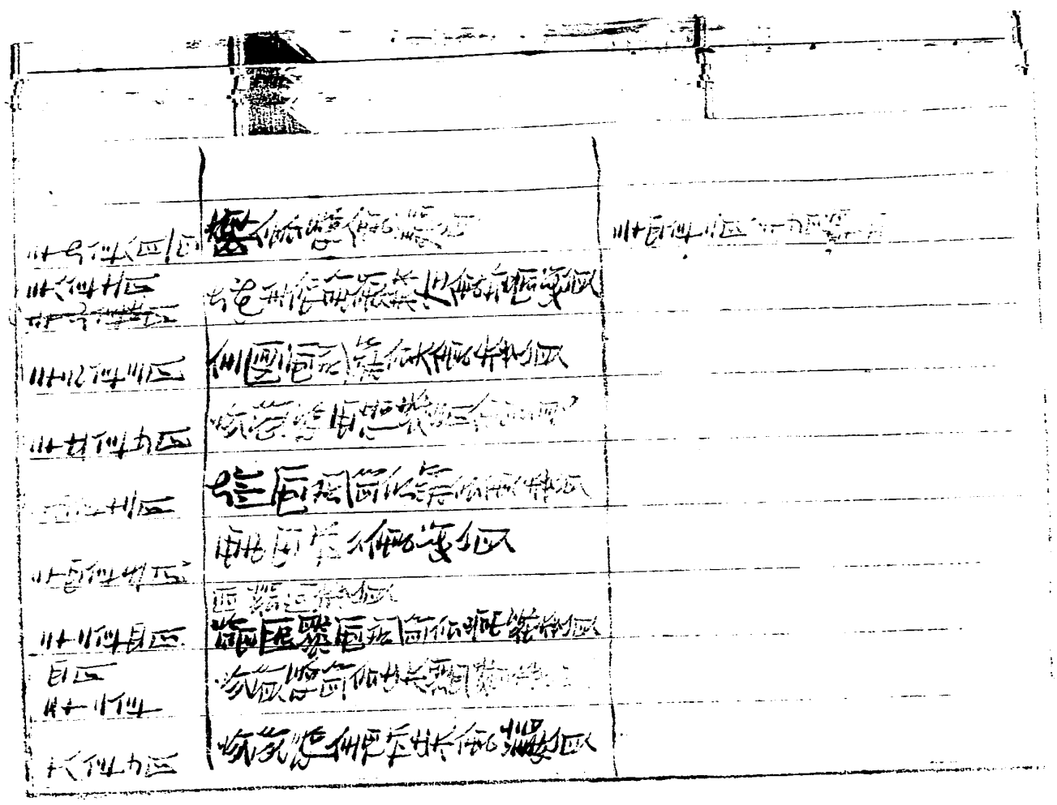
の改正に關して君は本縣酒造業者

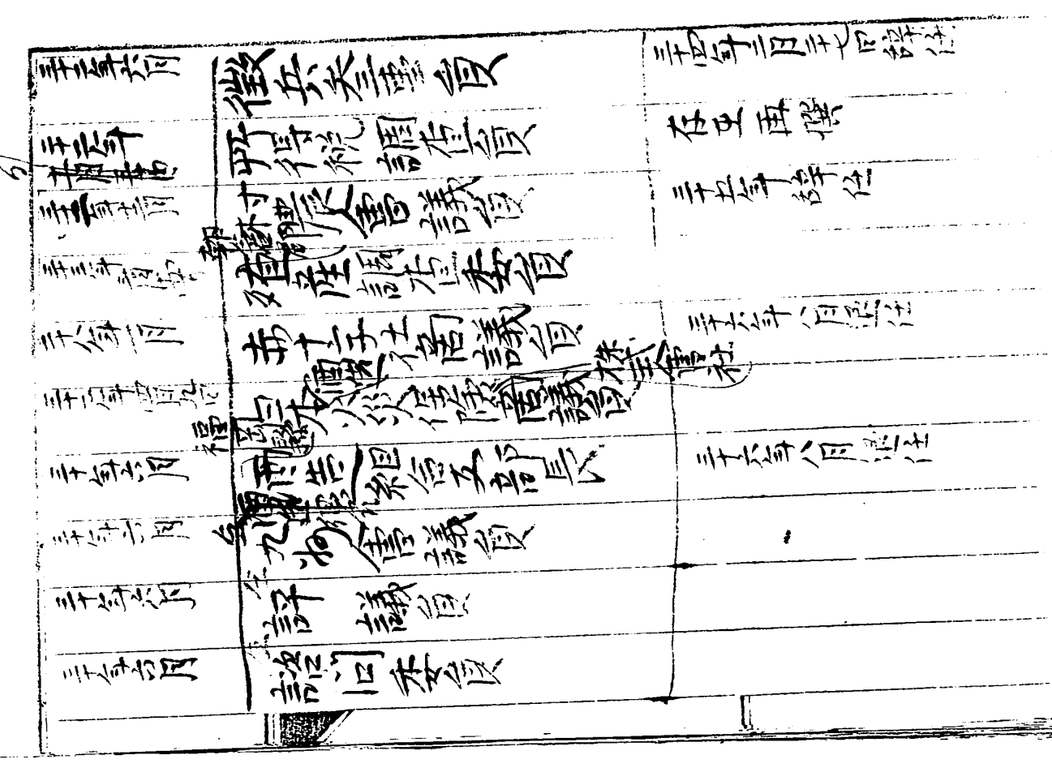
滿天下指目の衝に立ち一身に當業者の利害休戚を負ひ政府及各政黨間に奔走盡力の結果は遂に滿足なる酒造税

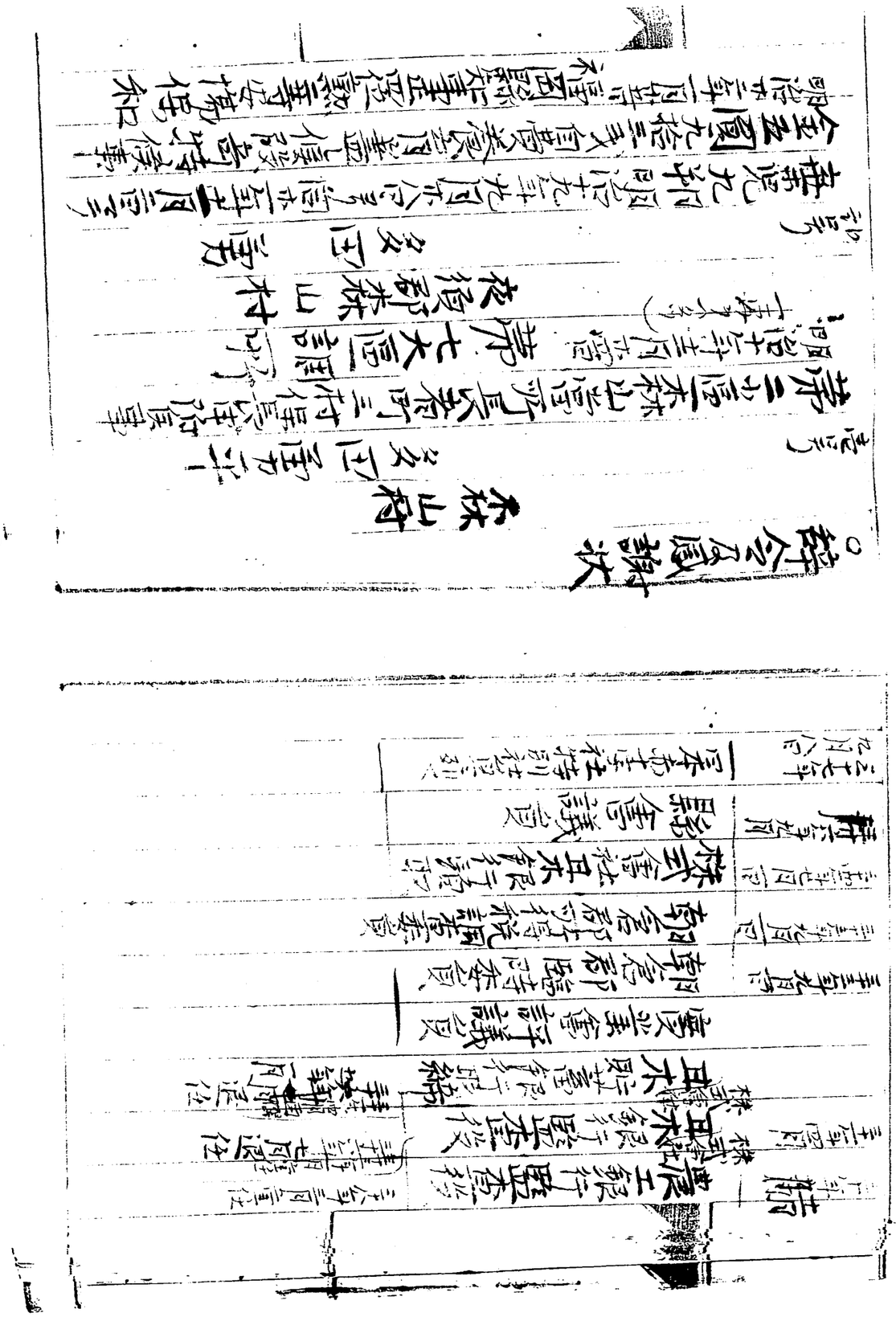
則の改正を見るに至れり 同業者は金一封を贈り以て其の誠

の意を表せり 尤も公共事業に係る[illegible]

一片の赤誠より滾出せし[illegible]を[illegible]て[illegible]其君が







第三号

一金壱圓　夜須郡栗田村

明治十二年六月十九日　上坐下坐夜須郡役所

第四号

一金壱圓　多田　三郎

明治十二年六月十九日　上坐下坐夜須郡長權藤貫

第四号

一金壱圓　多田　三郎

但手當金拾圓支給候事

明治十二年十月三十日　上坐下坐夜須郡役所

第五号

一金壱圓　多田　三郎

安野分教場新築委任ニ付全ク其功不甚候ニ付

慰勞トシテ金拾圓給與ス

明治十三年十二月二十日　上坐下坐夜須郡役所

第六号

一金壱圓　夜須郡元土木監督委員

多田　三郎

職務免除ニ依リ慰勞トシテ金拾圓支給候事

明治十四年四月十日　上坐下坐夜須郡役所

第七号

一金壱圓　夜須郡栗田村

多田　三郎

夜須郡栗田村

寄附候段高特ニ付木杯壱個賞與候事

明治三年七月十日　福岡縣知事從三位勲二等安場保和

第八号

夜須郡栗田村

多田　力

八拾六銭八厘寄附候段高特ニ付木杯壱個賞與候事

明治三年十月廿日　福岡縣知事正五位勲六等山田為暄

第九号

英彦山神社保存費ノ為ニ金五圓神納相成殊ニ盡
力被致候段感謝ニ堪ヘス時ニ依テ三等神官授與致度也

明治三年六月　英彦山神社宮司
正五位男爵高千穂宣麿

多田　力

第十号

夜須郡全町村組合常設土木委員ニ當撰相成候段
及通告候也

明治廿七年三月廿日　夜須郡全町村組合事務管理者
上座下座夜須郡長植口　競

栗田村

多田 勇力殿

第十一号

梅宮神苑會委員嘱托ス

明治十七年六月廿日 梅宮神苑會総裁公爵九條道孝

多田 勇力殿

第十二号

松尾神苑會幹事依頼致候事

明治十七年七月 會頭從一位勲一等久我建通

多田 勇力殿

第十三号

支部細則第六條ニ依リ貴君ヲ委員ヲ嘱托ス

明治十八年一月廿二日

多田 勇氏

日本赤十字社

福岡支部長山名崇小二郎

第十四号

醸金蒐集手續第二項ニ依リ社員醸金蒐集委員ヲ嘱托ス

明治十八年四月十五日 日本赤十字社

上野理事代行 郡支局

委員 多田 勇力

當選状

夜須郡栗田村　多田　勇

十五号

上坐下坐夜須郡所得税調査委員當選ノ証ス

明治廿八年十月十日　上坐下坐夜須郡役所

十六号

夜須郡栗田村　多田　勇

十六号

夜須郡栗田村陽地僧築費下ノ反金訓令訓令寄附

侯段奇特ニ付本村表組賞與候事

明治三十年八月十九日　福岡縣知事從三位勲三等岩村高俊

十七号

本社商議員嘱托候也

明治廿六年十月十日　九州生命保険株式會社

十八号

看ハ明治廿九年十月第四帝國議會ニ於テ政府提出ノ

增税法案ニ對シ排除運動ヲ為シ遂ニ衆議院ニ於テ否決

ヲ見ルニ得以来再々對税則改正運動ヲ為シ本年ヲ殊ニ

第九議會ニ於テハ酒造税則ニ對シテ當時醸造季

節ニ拘ハラス若自家業務ヲ抛チ重任ヲ帯ヒ奮然
東上シ身ヲ組合ノ犠牲ニ供シ議會開會中毎有會同
ノ久シキ昼夜間断無ク熱心以テ能ク其衝ニ當リ難
苦ヲ耐ヒ遂ニ貴衆両院ヲシテ我組合ノ勿論全
國製方ノ酒造家カ多ク斗ニ希望ニ添フ決議ヲ見シ
ニ至リ允ハ實ニ君ノ運動其宜キヲ得タル結果ナリ噫々
君ノ功績誠ニ偉大ナリト謂フ可シ茲ニ委員會ノ決
議ニヨテ銀杯三ツ組壱組、羽織地、袴地各壱反ヲ贈
呈シ聊カ其功ニ酬ヒ感謝ノ意ヲ表ス
明治九年五月　福岡縣酒造業組合

組長小林作五郎

多田學殿

明治九年
明治廿九年酒造税則改正アルニ際シ君本縣酒造
營業組合會ノ代表トシテ上京シ満腔之熱血ヲ注キ
幾多ノ辛酸ヲ排シ去リテ同業者ノ多大ノ益ヲ所リ
ケリ而シテ其目的ノ達スルヲ得同業者之ヲ喜ヒ知ルヘキナリ
本郡酒造營業組合會ハ君ノ積年奔走營慰
メシカ為メニ銀杯一箇ヲ贈ヒテ君幸ヒ受納アラ
ンヲ望ミ云フ

明治五年五月日　宗像郡酒造営業組合惣代

中村清作

多田男殿

二十号

第九議案

議事開設ヲ政府軍備擴張ヲ謀リ酒造増税ノ議ヲ出ス其議案ハ農商院ノ議ニ任セ其酒造家ノ利益ニ蒙ムルヲ以テ其造石高ヲ減縮シ遂ニ政府自的ヲ達セ能ハサルトキハ其人君奮然家業ヲ抛チ本縣委員トシテ上京シ政府ト兩院ノ間ニ立チ拮据周旋其中庸ヲ得セシメ永ク

國家隆盛ニ資スル所アリ其功績至大ナリト謂フヘシ依テ本組合中ヨリ聊カ其功勞ヲ謝セントスル為メ其微志ヲ表シ銀杯壱組ヲ贈呈ス君幸ニ笑納アラレンヲ請フ

明治五年五月日

三潴郡酒造組合中

多田男殿

二十三号

朝倉郡栗田村外五區委員ヨリ嘱ス

明治五年七月日　本籍十字社福岡支部長

男爵岩村通俊

三十三号

明治二十七八年戦役ニ対シ本社事業ヲ補助セシ篤志ハ本社深ク謝スル所ナリ仍テ戦後臨時総会ニ於テ調製シタル木杯壱個ヲ贈リ以テ此戦役ニ於テ貴下カ救護ノ要務ニ従事セラレシ紀念トス

明治二十九年八月廿五日　日本赤十字社

元老院議官多田亀殿

三十二号

謝状

明治二十三年本会創設以来全国聯盟ノ幾リ堅忍カシ会務ニ堪ヘサル今ヤ興望ノ一半ヲ達スルニ至リシ其勤労ヲ感謝スル所ナリ茲ニ第六回大会ノ決議ニ由リ銀杯一箇ヲ贈リ以テ聊カ報効ノ意ヲ表ス

明治二十九年六月　全国酒造組合聯合会

総監従三位勲四等前田正名

会長従五位　渡邊徹

多田亀殿

三十四号

郡書議員当選通知書

雲田村　多田亀

大地主互選郡會議員選擧會ニ於テ本郡ノ會議員ニ當選ニ付郡制第十九條第一項ニヨリ此旨通知ス

明治三十九年八月五日　大地主互選郡會議員選擧會長

朝倉郡長　樋口　競

郡會議員之証

福岡縣朝倉郡宝田村大字森山

四百十七番地　多田　孟力

三十九年

右成規資格ヲ有シ朝倉郡大地主互選郡會議員ニ當選シタルコトヲ証ス

明治三十九年八月五日　福岡縣朝倉郡長　樋口　競

三十九年

謝狀

君曩キニ明治三十二年本組合組織會ヲ開キ空先出席シテ創立委員ニ任シ大ニ斡旋盡力シ執ラレ爾來樞要重役ニ兼勤シ殊ニ同九年ニ降ハ稅則改正ニ對シ運動ノ為組合ノ代表シテ東上セラレタル訓後數回而シテ能ク其任務ヲ全フシテ組合ニ大ナル利益ヲ與ヘラレタル等其功績誠ニ偉大ニシテ組合員深ク感荷スル處ナリ依テ本員會決議

ヲ以テ茲ニ銀杯ヲ贈呈シ聊カ謝意ヲ表ス

明治十九年九月　福岡縣酒造業組合

組長　小林作五郎

多田　男爵殿

三十七号

近来政府酒造税ノ改正セシモノ多アリ、之カ為ニ辛酸若憂シ而者カ税則ノ改正セシモノ多アリ、之カ為ニ辛酸若憂シ而シテ世人ノ之ヲ視ルヿ泰越帝ナラス、殆ト之ヲ絶望域ニ極ツイ能ハサルトスルノ時ニ当リ貴下大ニ我同業ヲ為ニ憤慨セラレ、蹶然奮起、勇往邁進、天下ニ鼓吹シテ九州ノ酒ヲ喚起シ全國酒造業者大書リ提唱シ、一家業務ヲ擲チ幾多ノ失費ヲ顧ミス、議書ヲ政府ニ論難建議ノ勞ヲ盡サル、是ニ於テ乎政府モ議書ヲ我同業者ノ運動ヲ軽視スル能ハス、彼ノ戦後經營ノ急安要件族集累堆スルモ拘ラス遂ニ酒造税則ノ改正ヲ見ルニ至リ積年ノ素望其半リ達スル得タルハ是レ偏ニ貴下ノ國産ノ保護發達ヲ為ニ我同業者ノ困難ヲ慨キ粉骨碎身盡力セラレタルノ結果ニシテ我同業者ノ今日アルヲ致ミタルハ實ニ貴下ノ力ナリ、我佐賀縣下酒造業組合會ハ永ク貴下ノ功徳ヲ瞻仰シテ忘ルヽ能ハス、因テ斯ニ一書ヲ呈シ聊カ感謝ノ

微衷ヲ表ス敬白

明治廿九年十月十五日　佐賀縣酒造業組合

組長　北島佐八

多田男殿

二十八号

朝倉郡栗田村

多田男

朝倉郡栗田村溜池修繕費トシテ金八拾圓寄附候段

奇特ニ付木杯壱個賞與候事

明治三十年二月十五日　福岡縣知事從三位勲三等男爵山縣有朋

二十九号

福岡縣筑豊國朝倉郡栗田村

多田男

明治二十七八年戰役陸軍資内金参圓獻納候段

奇特ニ候事

明治三十年六月一日　福岡縣知事從三位勲三等男爵山縣有朋

三十号

多田男

農工銀行設立委員ニ命ス

明治三十年九月十七日　福岡縣

三十一号

謝状

貴下ハ豊太閤墳墓修理及三百年祭挙行事業賛成シ金五圓ヲ寄附セラル依テ本會規定ノ正條ニ據リ帯七等銀瓢章ヲ贈リ其厚意ヲ謝ス

明治三十年十月廿八日　豊國會長侯爵黒田長成

多田幹事殿

三十二号

第二回五二會全國品評會評議員ヲ特選候也

明治三十年二月　日　第二回五二會全國品評會

書類前田正名

三十三号

拝啓益御清適奉賀候陳ハ本縣農工銀行設立委員ノ任務ヲ煩シ候以来終始不力御盡力ヲ辱フシ為ニ何等之障碍ナク圓滑ニ設立事務ノ完結ニ告ケ候段該銀行之為及縣下公益上之為至幸之事奉存候今般事務引渡濟ニ付御任務ノ解ケタル旨一言御挨拶申述度尚将来同銀行為直接間接之御幇助被下候様希望此事ニ御座候匆々敬白

多田幹事殿

明治三十四年三月十日　福岡縣知事男爵岩村高俊

農工銀行設立委員

殿

三十四号

株式會社福岡縣農工銀行設立除し御盡力不少

依りて創業總會決議從て為尉勞金參拾圓

贈呈ス

明治三十四年三月十日　株式會社福岡縣農工銀行

頭取　緒方道平

農工銀行設立委員

殿

三十五号

第二回五二會全國品評會付本組合出品係ヘ監

督囑托候也

明治三十四年三月十八日　福岡縣酒造業組合

組長　小林作五郎

殿

三十六号

第二回五二會全國品評會付本組合出品係ヘ出品

取締長囑托候也

明治三年三月廿六日　福岡縣酒造業組合
組長　小林作五郎

多田　彦　殿

三十七号

右當銀行株式總會ニ於テ監査役ニ撰任候ニ付此ニ
撰任状ヲ贈與ス
明治三十一年四月　株式會社耳木銀行

福岡縣筑紫國朝倉郡栗田村

三十八号

金壱圓

明治三十九年六月縣下海嘯除疫災者救恤ヲ願書之
通恵與候段高特ニ候事
明治三十九年九月一日　巖手縣知事正五位勲五等末弘直方
宮城縣知事正五位　千頭清臣
青森縣知事正五位勲六等高野孟一郎

多田　彦

三十九号

本社業務之隆盛ヲ希望シ當役會之評決ニ付貴下ノ
名譽ヲ評議員ニ推選致シ候条御賛助被下度候也

明治三十二年十月分ノ日本酒造火保険株式會社

社長 渡邊 徹

多田屋殿

四十号

當選證書

福岡縣朝倉郡宇田村大字森山

四番地七番地 多田 孟力

右者栗田村選奬事區ニ於テ郡會議員ニ當選シタルヲ證明ス

明治三十年十月分日

朝倉郡長宮本保

四十一号

感謝狀

貴殿本會創設之際特ニ盡瘁セラレ南永會長ノ任ニ存シテ其効勲カラス仍而感謝ノ微意ヲ表セン爲メ木杯一組ヲ贈呈ス皆異ノ公受領セラレシ事ヲ

明治三十年十月

朝倉郡西部教育會

四十二号

感謝狀

明治三十八年十月ヨリ同三十九年十月ニ至ル交ニ於テ政府ハ戰後經營ノ費ヲ擧ル爲メ酒造稅法ヲ改正シ造石稅

法ヲ改正シ造石税ヲ増加セントスルノ内議ヲ起ス此時ニ當リ
若本縣酒造業家ノ総代トシテ數回上京シ、満天下指
目ノ衝ニ立チ一身ヲ以テ營業者ノ利害休戚ヲ負ヒ政府
及政黨ノ間ニ奔走盡力シ終ニ満足ナル結果ヲ奏セラレ
其功勞頗著ナリトス依テ組合會満場一致ノ決議
ニ基ヒ茲ニ恭シク金杯ヲ贈呈シ永ク感謝意ヲ表ス
明治三十四年十月吉日　福岡縣酒造組合
組長　小林作五郎

多田男殿

四十三号　感謝状

明治三十三年本組合創立以来第十區ニ長ノ任ニ膺リ數年
勤續事務鞅掌ノ功績サナカラズ依テ組合會満場
一致ノ決議ニ基ヒ茲ニ銀杯ヲ贈呈シ感謝意ヲ表ス
明治三十三年十二月　福岡縣酒造組合
組長　小林作五郎

多田男殿

四十四号　多田男
殖産調査員ヲ嘱託ス

明治三十三年三月十四日　朝倉郡役所

四十五号

多田房氏

爰ニ
本社慈愛ノ主旨ニ協賛シ金拾円ヲ福岡県部朝倉郡役所ニ寄贈セラル仍テ本社ニ代リ其厚志ヲ謝ス
明治三十三年六月十日　日本赤十字社総裁
大勲位功二級彰仁親王
日本赤十字社長
従二位勲一等侯爵佐野常民

四十六号

任朝倉郡臨時委員
明治三十三年九月十日　朝倉郡役所

多田房

四十七号

日本赤十字社福岡県支部商議員嘱託中社業擴張為メ壹四方セラル、所ナカラス仍テ総裁殿下ノ台聞ニ達シ以テ永ク諭意ヲ表ス
明治三十三年十一月十日　日本赤十字社長
侯爵佐野常民

四十八号

褒選證書

福岡縣朝倉郡栗田村大字秋山百姓番代

多田 宇力

右朝倉郡選擧區ニ於テ縣會議員褒選シタルコトヲ
證ス

明治三十六年十月六日 福岡縣知事 河島醇

九

四十八号

一金百七拾圓

多田栄氏

極東目下ノ時局ニ感シ日本赤十字社福岡支部救護費トシテ前記金額寄附セラレ候段特ニ感謝ノ意ヲ表ス

明治三十七年三月十四日 日本赤十字社福岡支部長 福岡縣知事正五位勲三等河島醇

九十九号

多田栄氏

多年本社忠愛ノ主旨ニ協同シ特ニ社費ノ幇助セラルヽヲ定款ニ照シ特別社員ニ列ス

明治四十七年九月八日 日本赤十字社總裁 大勲位功四級載仁親王

日本赤十字社長
正位勲一等侯爵松方正義

七十一号

朝倉郡栗田村
多田 孝

朝倉郡栗田尋常小學校備品トシテ風琴壹臺寄附候段奇特ニ付木杯壹個賞與候事
明治三七年十二月廿日 福岡縣知事從四位勲三等河島醇

（二）大蔵姓の元由

茲に中古より歴世海西の藩屏にて筑紫に在鎮する栗田家の族姓を尋ぬるに九國に多き大蔵臺の遠祖たり、此の大蔵臺なるは姓氏録の諸書に記せる坂上（大宿禰）檜臺、内蔵、山口、平田、佐太、谷、吉火、興世、忌部、（宿禰）木津、文、石白、檜前、高安、（忌寸）大撫、他邊、栗栖、（直）丹波、（史）蔵人、菩提屋漢人、等と同一なく阿智王を祖とす、柳も阿智王なるは元

来我邦の人なり、西六後漢靈帝の曾孫にして其系四表に名も高き卯金刀より出たり、倩て靈帝の子と延年とす歴王、石秋王を生む、阿智王は其子なり、彼國建安二十五年漢運終に式微にして靈帝の子獻帝は遂に魏王曹丕の為めに奪れぬ、阿智王も出て帯方郡に往り國臣を建て所在の人民王と崇りしも阿智王は東方に君子國あることを聞きく傳へ聞つは終に魏の為めに滅せられんことを虞り、其子律加使主及久尼文帝、並びに黨族七姓氏、十七縣の人民と率ゐて我日本國に帰化す

魏志に景初二年六月、倭女王の使詣る、帯方の太守劉夏其使を傳送して往来せしむ、云々、倭に帯方にて阿智王自本國に帰化せしことを聞傳へしものか、但為劉夏は即ち阿智王の同属なりしやも知るへからす、其後正始年中にも使者往来せしことあり、大守弓遵王頒をして其事に預る是歟く帯方の太守なるへし、これ等は皆本朝神功皇后御世の事なり、倭國は帯方の東南に在りとのことは往國の歴史にも見へ

（児玉孫の意田説）

此時本朝十三代應神天皇三年秋九月の事なりしは

天皇詔て大和國高市郡檜隈村を賜り居らしめ東漢直と號す、其後百濟國より博士王仁を貢す、此人も前漢の高祖の後裔なりしかば河内國に置れる、河内文首、又西文氏と稱す、三人いづれも漢人にて文才あればなり書籍の官に備らる、

同智王は頻に天寵を蒙りて同智使主を使として呉に遣し縫工女を求めしめらる、是に於て呉王兄媛、弟媛、呉織、元織、四婦女をまいらす、同智使主等是を伴ひて同四十二年二月帰朝せり、

○日本書紀、同智使主等自呉王筑紫、時自形大神、是則今在筑前國、御使君之祖也、既而率于呉三婦女以至津國及于武庫而天皇崩、之不及、即獻于大鷦鷯尊（仁徳）云々

○後中天皇の御世に成て三韓の貢物世を累ねて次第に多くなりぬ齋蔵の側に内蔵を設みて官物を分ち收めらる、同六年始て蔵職を建て因て蔵部を定めらる、同智王を王仁は横歴仕て職事を勤怠なきす、二蔵の出納を出納の吏たり、

雄略天皇の朝に至りて以来聖運彌隆にして

諸國の調貢年に齎るを彩しく齋蔵、内蔵にも
盈溢盈充るけるを、依て童て大蔵に遣りて是に充
つ、東西の文氏五に相傳へて出納の簿籍を主り錄す、
是に傍りて漢氏に内蔵大蔵の姓を賜る、云々所謂
木津忌寸、火撫直、栗柄直、高安忌寸是なり、
天武天皇十二年五月倭漢直を除て連姓を賜ふ、同
十三年十月詔して天下諸氏の族姓混雜せるを分て八色とす、真人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、
稲葉直、是なり
同十四年六月倭漢連を除て忌寸を賜ふ、即ち元明の

朝和銅六年大蔵忌寸老、文元正の朝養老元年に大
蔵忌寸國足、聖武の朝天平八年に大蔵忌寸廣足同九
年大蔵忌寸麿、桓武の朝延暦元年十月式部史生正
八位下倭漢忌寸、木津吉人等の見へたり、是皆に阿智
使主の後なり（以上續日本紀より抄出）
桓武の朝延暦四年六月忌寸を除て宿禰を賜ふ
淳和の朝天長十年三月大蔵忌寸横佩宿禰を賜ふ
仁明の朝承和六年七月大蔵忌寸雄継、大蔵宿禰
継長に等に姓内蔵宿禰を賜ふ其後朝臣の号を
賜ふ（年月歴史に詳なく、即ち清和の朝貞観六年七月

十四日、和銅、大蔵朝臣善行、奥蔵人所校定御書兼
頒五家訓を教授、嵯峨帝の九年中の始事なり至
是講竟ると見へ、神一にて大蔵朝臣
春宮に奉ふ、（但し阿知使主、春宮に至て
昌岡世系詳なり）
春宮、宮に天徳の後裔にて軍功ありて大に家名を
顕はす、西国大蔵嘗の元祖と仰がれ其子孫凡陝
連隊として強く繁栄せり、奈田、秋月、美氣、江上、
三原、高橋、田尾、波多江、小金丸、其外数氏に相分
れて各自国郡庄郷の主として所々に散住す、其本支

次第に繁殖し、天正の比まで三千餘世星霜を経る
こと、六百餘年に及ぶ、就中奈田氏は一姓の巨族にて
名聲青史に輝き、武威紫海に輝き、偉効を
天下に奏するいとまなく
（三）大蔵朝臣春實、天慶の乱に野心
人皇六十代朱雀天皇の御宇に當りて陸奥鎮守府将
軍、故子良門の子滝口に出て郎相馬将門叛逆を企
て已王孫なれ共、寶祚の尊きを憤りて朝家を倚
け非望の位に登ん事を図り、兵を起して坂東の数
国を手取り、国守を追放し、官物を奪ひ

上野國・後島郡・石井郷に拠り都を建てゝ自立して平親王と稱し百官職を備ふ、又伊豫・橡藤原純友は任元して帰京す海賊の首として所在の人衆を聚めて常に南海・山陽に出没し邑落を害とし財物を掠め館舎を焼き遂に将門に誅殺に聲接す、依て證跡を藤原國風に計て充たす、飛騨・左近・朝廷たに驚き東西へ向け追捕の状を奏問す、東へは藤原忠文大将軍なり、使を差向らる、坂東は多く官軍まゝ到ちさるに憚み下野・押領使藤原秀郷、及常陸・掾平貞盛等将門と合戦に及び賊軍敗北して将門遂に自盛・秀郷為に誅せられ、坂東平定す、南海は左近衛少将小野好古を追討長官とし源經基次官となり、右衛門尉藤原慶幸を判官とし右衛門志春實をして主典となし追討せらる、

抑も此春實らいにしへは住吉應神天皇の朝に帰化せし阿智王の裔孫なり、世々文官なりし其家業にて武事をも忘れさりしは、今度純友の誅殺によりて朝廷より錦御旗・黄金軍配を賜り討手に下され殊に朝廷より錦御旗・黄金軍配・軍扇を賜りなる、即ち天慶三年五月三日従五位下

以和を難易事に任すべし（菊田系譜）

斯て官軍の大勢都督を立て南海に出でしむ先播磨讃岐の二國に於て戰艦二百餘艘を作り直に賊地に向へんとす、かゝる所に紀友り数將恒利多勇心變して藉に賊陣を脫出て讃岐の國風に附けり、此國風は元来賊徒の官所隱家、偖は海陸兩道の通塞をも能く知る者なれは恒利を安内者として多く勇悍の士を添へ働きそれは、賊徒は大に敗北して紀友は行方知らす亡失たる討手は彼り踪跡を尋ねるに、賊徒は筑前に到り太宰府を攻敗り累代の財物を奪取り刹へ府を放火して管内を劫すすめ同年六月は陸地を押行き慶幸、春實は海路を進て西海へと追蹤なしぬ、紀友は所々の要所に西賊逆徒を殺し官軍を遮りしかれ、春實は毎度先鋒をなして散々に破りしかは官軍事敗なく山陽道を上り過ぎ海陸兩道より筑前國博多津に攻合せんとす、賊の張本紀友は是を聞き官軍を太宰府に入れ立ておとて（神社の北中高き所に伊豫様の城跡あり）博多津に出て陣を列ぬ、海を抑あて雄雄と一撃に決せんと待かけり、慶幸春實は各棹を敲て海上より押寄て合戦

戰數度に及けるに、春實諸軍に先だち大ようはの海を渡りて呼き叫んで賊中に衝て入り、四方に相當り短兵急に挫く春實の猛威は賊徒辟易して散に遁さりぬ、此時春實の手に討取たる生擒最も多かりける、爰に於て純友の行方あらずなりしかば、官軍やうて博多津に陣取りて士卒の勞を休め、日夜賊徒の所在を捜覓する程に官軍は博多にありて日夜賊徒の所在を捜覓め、其根を断ち葉を枯すの謀を廻しける処に天慶四年十月純友数千艘の船を備へ突然海上より博多津へ押寄せり、官軍は渚に陣取て戰既に数合に及ぶけるに賊徒叶はずとや思ひけん引退きて船に乘こむる処に春實等勝に乘じて急に進み身命を惜まず士卒と下知して船を奪ひ火を放て焼立しかば折しも風さへ烈しければ炎焔十方に飛散ち賊徒此下以の外に騒きたち是を防ぐに術なくして或は焼死或に溺死数を盡くして亡びぬ、此時賊船八百餘艘を乘かりたる、純友は何しかりけん、純友は命からく伊豫國に遁去りたりとも豊國の警固橘遠保に為めに擒にせられ遂に獄中に死ぬ、其他の殘黨等皆國々所々にて捕れぬ、

参照 大日本史、

参議右衛門督藤原忠文、為征西将軍討之、小野好古由陸路、藤原慶幸、大蔵春實、浮海趨筑前博多、攻之、純友衆潰、擒獲斬之云々、

藤原純友反、好古為山陽道追捕使、太宰少貳藤原慶幸、右衛門志大蔵春実、右衛門尉藤原基経、右衛門大尉藤原忠文、天慶三年、以左近衛少将小野好古、為追捕使長官、武蔵介藤原経基為次官、右衛門尉藤原慶幸為判官、大蔵春實為主典云々

（以上大日本史）

今昔物語、

天慶三年、純友ノ討手トシテハ野ノ好古、藤原慶幸、大蔵春実等ヲ将軍トシテ兵船二百餘艘ヲ引テ云々

天慶四年ニ月、彼賊等ヲ追テ太宰府ニ向ヒテ累代の財物ヲ奪ヒ、民ヲ放テ府ヲ焼拂フ、其後官使好古陸路ヨリ行向ヒ、慶幸春実ハ海上ヨリ起リテ筑前博多津ニ向ヒテ合戦ス云々（以下今昔物語）

王代一覧、好古慶幸春實此三人のみと載たり

扶桑略記、純友追討記の説に従ふのみ

大和物語、純友ノ討手の使に大貳小野好古下りて檜垣ノ家のありしわたりを尋ねば、いみじう良くうて

呼されて恥てぬて玉よ我皇髪は白川のくみつよもあて老ぬるかな」此初句家集には老てとあり

後撰集には紫の白川といふ所に住みけりなるに

大貳藤原興範朝臣のまうでたるを序に水飲へとて立寄こひ侍りければ、水をもて出てよみけり

なる檜垣　年ふれは我黒髪も白川に　　とあり、

斯て西國の兵乱静まりて藤原慶幸、

は都に帰り上りなる大蔵春實は今度の軍功抜群

にて此名西國に響くにより朝廷より官位を進められ

征西將軍に任ぜられ前豊前肥前壱岐對馬の三前三島を

管領せらるゝに及ぶ（筑紫の豪族説なり）而して其身は筑前に住り椽城とて太宰府要害の為め古代より築きし城に居りて九州の兵馬を司り治て鎮西府を警守する異賊敵来の不虞に備へたるとて間へし

参照

椽城は天智天皇四年八月築かせるひしものにして其趾

筑前國御笠郡肥前國基肄郡の堺山上にあり、

前大平記、　天慶四年七月官軍凱陣を朝廷功を賞

し、封を行ひ給ふに参議あり、慶幸、春實、備前播

磨に守となる、是小慶幸は備前守に春實は播磨守

守に任せしなり、

藩翰譜、秋月條下には春實此時對馬守に任ずとあり、

筑前要略、秋八月好右帰京、春實補太宰少貳、慶幸任肥前守、春實之亂衍筑前、慶幸之亂蔓肥前國、而國之事家家也、

三重田の家號岩門の移住

再後春實は太宰府の警備として長く筑前に留るべし、

扨あるべき妻子家族を引き連れ常國に招下る樣城の麓重田とぞいふ地に新しく館を構へ居住となせり、春實後に春種と改名し男子數多あれば

各采地を配分あり郡郷の主となし子孫繁延す

柳も太藏氏の嗣家を後世重田と稱せし謂は春種の長男なりと泰種と云ひ、泰種、種光を生む、種光の子種村、種弘兄弟家督を承継き、種弘の子種資に傳ふ、種資倩ら思ふ、樣城は國の南部にして博多津に隣り、邊要防守の便あしく機急倉卒の時に臨みて不自由なりとて筑前國那珂郡岩門の要害を卜ふ紙幣一て別館を構へ始て此所に住居なし依て種資を岩門權頭と稱す

参照

鎮要害、長徳四年異賊船来筑前海辺我国
年八月勅太宰府、討南蛮海賊、府将軍大蔵春
實撃得賊船、賞封対馬邦、及筑前国嘉麻郡
相城于岩門、と記す、天慶より長徳迄六十年以後
春實存命して軍事に任せしこと、いうべあらん、或は岩
門城の經營にも春實関係め其議を起せしらばふ深
の世にありしことを新く記せしやも知るべかず
又曰、嘉承元年大江匡房卿、国任太宰帥、大蔵朝
臣種納、為太宰大監、永久元年岩門権頭大蔵種
資、為大監云々是又父子の先後あり、

種納男子あるも家を嗣へき器量にあらず故に種
納死年に及ひ弟種成を養子として其家を嗣しめ、
種成後に種衡と改名す、此人、上下の橋の協と物情
を辨知し、民を愛し衆を撫せしかば人皆其徳に
服し、尊敬して其言を停り宮殿と稱すること長
種成の本館宮田に在るを故り是より地名を以て
家號とし、大蔵を本姓として宮田氏とす
附記
筑前國怡土郡東村（酷似村今は東本）に宮田八幡の祠
あり九月十三日の例祭にて神輿行幸あり其儀式九月廿

室なり、村上天皇應和年中宮田氏の祖先長門守大蔵
春種城、初男山八幡宮を勸請して祖先春實
を祀りしなり、此社鐘銘は貞京篤信の撰文なり
八幡本紀、朱雀院の御宇承平より天慶に及び関原
には平将門乱を起し、南海には藤原純友、瀬戸
於是官軍を東南に遣わし追討せらるゝに臨み朝廷
より諸社へ奉幣して戦勝を祈りなふ、神託の歌に「春
殿芸に立いつる櫻花、こしふる雨も去や降るべし」将
門は其年二月十四日下總國辛島にて平貞盛、藤原
秀郷の為めに亡され、純友は同四年六月に追討使小野
好古、藤原慶幸大蔵春實等の為に攻落され船に乗て
伊豫國に逃帰るを當國の警固橘遠保なるものゝ
純友及其子童丸を討取り首を都に送り此時の
報賞として遠保に伊予守を任ぜらるゝ
いも見え

此時男山八幡大神の霊験殊に新なりしかば春實七神
徳を崇仰し其子孫春種此所に鎮座する後に宮
田八幡宮の號ありて此所を宮田庄といふ古文書にも宮田庄と多く見なれば此時の事なるべし春實の
時より此宮は其家臣なりし宮田氏の出しなり

釋迦堂の海陸吟に博多より生の松原を過ぎ唐津に向ふ所に唐津浦の代に湧くとある（迷信は文明年中の傳なり）

(四)種村刀伊賊を却く

朝野群載、前大宰大監大蔵朝臣種村在世の時に當て刀伊國の賊徒来て當國を侵さんとす、種村等大宰府の官兵を以て撃て之を却け、首虜を戎奚を獲たり、其勲功を考るに

後條院寛仁三年三月に有て彼國の海賊五十餘艘對馬に来り又壱岐島を侵して島司藤原理忠を害す多く島内の人民を虜り去る、楯橹、同四月七日當國壱岐郡に襲来すと、其賊船と見るに或長サ十三尋或は八九尋なるもあり、一船に楫三十を立て各五六十人を乗せ、先つ三十人、刃を燿し奔り騰れば次に弓矢を負ひ、楯を負ひ、その人八十人計り相從ふ、新に備へ三十隊ありて忽ち山に登り野を絶て牛馬犬雞を屠り、老人女児は悉く斬殺す、男女壮強の者は追捕し連行て己が船に載せ、其外米穀の類を運取ること数を知らず、乱妨根葉言はんかたなし、都内以の外に騒動す、壱岐島司の住人文室忠光防ぎ戦ふ賊徒矢に中りて斃れしもの

数十人、時に十餘人賊に射られぬ、事太宰府に聞へ
急き兵士を招きて軍船を調へ防御をすと雖も事
不意に出しきたれば集る勢も多く多勢にて同八日に
は賊船近く詰た島へ迫り来る、郡中の人々周章頻
蹶賊の為め虜にせられしもの多りき、十時太宰府より
前ノ監大蔵朝臣種村、藤原朝臣所範、散位平
朝臣為賢、平朝臣為忠、前監藤原助高、従仗左藏
光弘、藤原友近等をして警固所に備へ守御
せしむ、同九日の朝賊押寄て警固所を焼くせし
も不叶して又た詰た嶋へ引取けり、長後言は海上風
猛く波高くして互に相攻よくなし、同十日未明に賊徒
筑紫郡より志摩郡船越津に至る是より先に精兵を分
ち方々に手配して毎て相待ち、同十二日賊徒陸に上る、爰に
大神の守官権検非違使藤原計手と出して防きければ賊
矢に中るもの多し生捕二人を得たり、十貳日朝臣致行
前監種村、大監藤原朝臣致孝、散位為賢、同為忠、
等兵船三十餘艘に取乗て海上より追撃とのれば、同十
三日賊徒糸島郡に到る、種村直に彼地に越て官
國の前々保知と同じく郡内の兵士を招て合戦とのれ
は賊徒追ひ得すして散々に逃帰りぬ、此所にても矢に中るもの

数十人生捕数人あり、此度生虜の者は皆高麗人
なりしれば、通事を以て其仔細を尋ねるに、我等高麗
国にて兵を以て力仔賊の防衛の為め彼地境にやられて在り
るに、還て賊の為に襲られたる者のよし申す、此趣
に付て同十六日に太宰府の官人正五位下大蔵兼筑前守
原朝臣直廉より奏聞に及ぶ、其解状に曰く、新羅野群島
在し事大臣本史、後一條天皇の御宇に壬子太宰府言、力仔賊
寛仁三年後四月十日壬子太宰府言、力仔賊
撃破之云々。
大臣本史、寛仁三年後四月十日壬子太宰府言、力仔
賊襲筑前国那珂郡、肥前国松浦郡、遣前少監大蔵種村、

藤原明範等撃破之云々
朝野群載に此の解あり、那珂郡能古島の字脱る誤なり、全く記しかた
を故に著には昌天皇を若す、他日好学と兆して考定をへし
同書に那珂郡能古島とあり、此島今は早良郡に属せり、
又種村を種材に作る、帝王紀記に同し、今大宰本史な
秋月系図に種村とあるに従ふ、他れも孰れ是なるかを学
識者の校正を待のみ、又従仗大蔵光弘は系譜に大監種
弘ありて是種村の父なり、若しは此人の初の名なるか、今
太宰府観世音寺に蔵る治暦三年造営記府中群官
の内に大蔵種弘あり是なり、又大蔵助信大蔵尉光あり、一

族なるべし、但し系図にはなし、

○帝王秘記に曰く、寛弘四年十七月廿乙酉大隅守菅野重忠、於太宰府為大蔵満高被射殺、又曰、長元元年四年正月十七日乙巳五人宇佐外記遣式部卿敦平親王家、去五日叙位良国王叙四位、件人有切害杞之上已非王氏、今被叙位記被問根元、二月廿日辛酉、今日云々式部卿敦平親王停聟務、源良国者大宰大監大蔵種材男也、先年射殺大隅守菅野重忠杞人也、忽改姓名謀計也、前大宰大弐惟憲卿此事尚尚詳、事、この始末詳なすべし、

○又按に六位判官為義の子鎮西八郎為朝幼より剛力にして

兄に心を置き手に倍若無人なりしかば、身に添て都に置ては悪りなんとて父不孝にて十三の年より鎮西の方へ追下すに、最後国に居住して尾張権家遠をめのこし肥後国阿蘇平四郎忠景が子三郎忠国が婿となりて若より賜はられし御の総追捕使と号して筑紫を従へとしければ菊池隈部を初として所々に城を構へて楯篭れども儀なりばいて落して見むとていろく勢ありしかども忠国はかりを安事内者とせしかば三月の末より十五の年の十月まで大事の事をすること、手錦度城を落さること十個所なり、城を攻る謀、敵を討術、人に勝れて三年内に九州皆攻落して自ら総追捕使に任じて悪行多くなりぬるにや

香椎宮の神人等都に上り訴申間、古へ久壽元年十月ハ
六日宣旨を下さる然れとも為朝横参沿せさりけれは同三
年四月三日又為義を下官せられて前後非違使いきをれ
ぬ為朝是を聞きて上洛を企元物語に載る右の如し
是草田家号の決類に見へたる不審なり、久壽は人皇
七十六代の年号なり、

㊐種直平家へ結び

岩門に移住して

草田次郎大夫従五位下大宰貳筑前守種直は大蔵春實よ
り九代権頭種雄の嫡男なり　種雄の父は則ち種成にして岩
門

門権頭種資より種雄まて四代は折々岩門にありと雖も草田
とは名のみなせしゆえ種直に至りて為らく岩門は博多警
固所に接近し異敵の押へ非常の備に外なるのみならず太
宰府へも程遠からねは國の為め身の為め甚だ以て便利な
りとて專ら岩門に移住せり　種直はれあの遠
所にあると雖も異名隠れなしかれ内左臣音成四は又拡文
右馬頭家盛のかを養ひ女せしてて種直に嫁せしめらる
家盛、大宰少弐平忠盛子清盛家盛（従四位下右馬頭先）種盛
忠度、大系図には忠盛の子清盛家盛（第六左馬頭従四位下卒世二十三歳）
頼盛經盛、一本系図には清盛、家盛經盛、平治物語には

右馬助家盛ト書ケリ

故ニ種直ハ平家ニ親ミ浅ク、重盛ノ吹擧ヲ以テ従五位ノ下ニ叙シ太宰少弐ニ任ス、岩川十郎ト稱シテ其威ヲ振フ、

治承四年六月ニ後白川法皇、清盛ノ為メニ福原御所ヘ押籠ラレサセ給フヤウ、此時盤固トシテ種直・佐原三郎義澄・同四郎義連・同五郎義季・兵衛種國、石弟美氣三郎敦種、家子山崎平次宣秋等ト隨兵三十餘騎ニテ参ジ、盛衰記ニハ法皇ヲハ福原ニ三間ナル板屋ヲ作リ押籠メ奉ラセ置テ、源氏ノ武士石戸諸卿・種直・子佐原太夫種益・守護

ヲ奉リ付ルトアリ、

安徳天皇養和元年二月肥後國菊池次郎隆直、緒方三郎惟義等乱ヲ起セリ、種直九國ノ軍兵ヲ催シ菊池・緒方ト相戰ヒテ悉ク勝利ヲ得タリ、

東鑑曰ク、治承五年（養和）二月廿九日丙午、於鎮西有兵革、是肥後國住人菊池次郎隆直・豊後國住人緒方三郎惟能等及平家之故也、同意隆直之輩、木部次郎盛實・法師南郷大宮司惟安・相模惟義・大野六郎泰基・高田次郎萬澄等也、此外長野太郎・山崎六郎・同次郎・野中次郎・合太郎・義太郎・後藤次郎・糟屋・同次郎・海

陸往還、仍平家方人保田天太種直相催九國軍士三千
餘騎、遂合戦、隆直等部從多以被疵、云々、
鎮西豪族に種直乗勝、筑後肥後、對陣、冬月、詔勅を
師とあり、菊池家記には菊池方勝利を得たる由言
同年七月平宗盛の家臣肥後守貞能子孫
に遣る菊池緒方を追討せしむ、保田種直も出勢して
貞能に力を戮せ肥後に合ひし菊池忽降参無二の
平家方として成に成る
盛衰記に保田太夫種直と菊池緒方と同心して西府の
命を用ひざる由今年三月宇佐大宮司使と云ふ宇佐遣

して言上すべしとあくされと種直謀反の輩に與同せざるを
東鑑を以て知べし、
東鑑文治二年四月十日辛亥貞能為平家使者、尚
在鎮西帥中下官使、相副殺害私使、稱兵粮、廻國都成
水火之責、廣民悉以為之費、仍肥後國住人菊池次郎隆
直為遮當時之難、令帰伏之由申之、云々
壽永三年七月肥後守貞能隆人と称して帰治しけれは種
直も同上洛す、同月平家は本宮義仲に都を破られ宗
盛を始め西の月卿西国の諸国執ヤ安徳天皇の供奉
して都を出奔し西国に落下りぬ、種直も平能忠

幸して乗輿を警固したてまつる、八月十三日主上を初めまゐ平
家の人々皆太宰府にそつられゝる、同十八日平家の人々大臣殿
を初め安楽寺に参り給ひ夜歌をあゝみ連歌して宴仕すれ
いも本三位中将宣衛盛俊ばかりは淀にあるべき今生無事家
物語新々言衛と云ふ物語
住なれしふるさと都ゝ恋しさは神も昔を思ひ知らん
平家は筑紫に都を定て内裏造らるべしと公卿詮議あり
しかれ共都はまゝ定まらざりければ主上をは種直が宿
所岩門の館に入れ奉り安ひて暫時長途の煩を休めさ
せ給ひける
今岩門の安徳村御所跡は其基址あり又訖神山の麓あり

是豊時警固の武士を置し所なりといひ傳ふ其跡今安
徳村山田、椎原、村の界にあり御所臺を里人は安徳臺
と云ふ高千尋四方上廣二千の地圍数八町あり世の隅
に道成寺と云ふ堂あり是は豊田家菩提寺の跡なり又た
其西岩門川の向別所村の内に御迎と云ふ所あり種直出
て〻帝を迎奉し遺名なりと云ふ又た安徳村一石寺に傳
説あれと所書にて取るに足らず或俗説に此時恰も都上
原村に内裏を作り要害を構へられしなり今其地を也上
又京原と云ふ也いへるはひゝなり
種直は主上の勅を奉りて九國二島に觸を廻し軍勢を催

集め海陸より上方への通路を塞ぎ非常を戒め野心の者をば聞付て時日を移さず誅戮すべし或は國中を逐出しければ九國より兼て源氏に志を通せし輩追退極りて外域高麗に遁るゝ者頗る多かりき

東鑑いも元暦二年六月廿四日乙丑參河守範頼弟河内五郎義長等受一品命渡使者於高麗國之間、對馬守親光、歸着彼國島、云々、是去々年自當島欲上洛之折節、平家悉落于鎮西之間、路次依不通、不能解纜猶以在國處、為中納言知盛并女貳禮直等奉行、可令參屋島之由、及其催、九州高麗國等皆雖從于平家方、親光

光猶遲志源家之間、不行合、仍三箇度被遣追討使、所謂高次郎夫經直禮直家子一箇度也、此輩頻下國、或知行國務或及合戦難存命之間、遂風波去三月廿四日令越渡高麗國、なと良なり

かくて西海道は禮直ど威風に靡き、平家に叛くものなくなり

去る同九月、主上太宰府へ參幸し給ひける（一說に平家は太宰府に住居形の如く人々宮殿造りなるべし）

左木の御所と作り直られしかは実や朝倉や木丸殿ともやゆしと斯りける所に豊後國の住人緒方三郎惟義名に源氏に屬

去る日、行前次等是に同心して太宰府を攻んとする由聞へ

ければ、三位中将惟盛兄弟、緒方次郎隆直以下の官軍

に防ぐせられけるも多勢ひしてかなわず主上太宰府と
落させ給ひ箱崎を過ぎ香椎潟、垂水山、内浦濱藍
屋などゝ云ふ所を經て山鹿兵藤次秀乃遠を頼み山鹿
城に入せ給ひしを種直は富て秀遠を不和なりしかは山
鹿城に入り秀遠を下知に附もゝ子孫に傳へて只惜かるへ
しとそ引退き又た菊池次郎隆直は宗盛の下知を受
て肥後國大津山の関南を結ひ寒さ防しを切開き
主上を奉れ奉らむとそ道より立帰る、同杵戸次松浦
黨は疾に平家を背き源氏に降参をなせは平家は
西國にも落着せず逆旅の中に漂ひける、

宗はわれ重盛の病氣の折節唐土の醫師銑剛今津に
参り居たりしに療治いたさしめんと真人清盛よりいひおこ
さしのしをくられ哀記に見へたり右等のをは種直より申通せ
しなるちん重盛は治承三年八月に卒す、
豊西記に昌次郎永秀乃、須今子家時方に高原田種直
再三雇誘語、永秀乃敢以不承引、奉屬源氏侍鎌倉
之下知、依之種直可追討由有其聞之間、先引篭梯崎
城、官軍三度雇押寄、無度令防戦、其後平家
御在於太宰府之時、永秀乃最初押寄於三笠原、遂合
戦之忠、終奉追落平家也、此時永秀乃之第三郎永

隆が嫡男四郎永後ゟ母は原田種直の妹也、平家逆乱
以前捨別之他界也、此原田氏は日田危大夫として元暦元年
第三の子紀州熊野山大蔵谷に在因て大蔵を以本姓とす其
祖慶西公のとき九州に下り文徳天皇仁壽元年始て日田郡
司職たりしと言せり、母に具家卿の事はとゝ大蔵也
は春屋の嘉に縁説を[illegible]後人の考定を待のみ

平家没落種直囚いらる

主上は左京者より山鹿の使へ行幸いたゝく御安堵あらる
處に緒方惟義十方除騎にて押寄と聞へけれは、又もや取物
とも取あへす高瀬船に乗移て豊前國柳浦へ渡りぬ
せ給ふ、其後平家は四國に渡り讃岐國屋島の磯に内裏
を造り主上を入れ奉る、種直又々参上して守護奉りぬ
るゝ、文治元年二月源義經風波を凌ぎて不意に渡海して
屋島に押寄せたり種直も平家の先陣に加り源氏の
兵を防きけれとも平家終に討負て三月廿四日長門國檀浦
に落行主上入水し給ひ平家の所為く海底に沈没す
扨も大日本史義經傳に三月廿四日黎明義經次戦艦八百餘艘
進攻平族於海上、山鹿秀遠反菊池高直、原田種直連矢射
之、我兵少但、又曰平軍大敗、菊池高直原田種直皆降、[illegible]

此時種直家族多くは九國に在り源氏擬手の大將參河守範頼の勢を拒ぎ、二月一日豐後國葦屋浦にて合戰せしが叶はずして種直子三男嘉摩兵衛尉種國、併に叔父美氣三郎敦種等討死して無二の志を表顯しける

東鑑に曰、元暦元年（文治元年）二月一日乙卯參州渡豐後國、北條四郎、下河邊庄司、波多野庄司、品川三郎等令先登、而今日於葦屋浦、大庭平太貳種直子息賀摩兵衛尉等引隨兵相逢之挑戰、行平宣國等縣廻射之、彼輩雖攻戰、爲宣國被射、行平誅美氣三郎敦種云々、又大日本史範頼傳、二月與奈田種直戰葦屋浦、種又其子嘉摩兵衛、敵兵敗走、又北條義時傳、義時隷源範頼、擊奈田種直於豐後、又下河原行平傳、行平斬美氣敦種時云々とあり、又波多江家系図には敦種後に種貞と改め、嘉祿三年に死す、是等の諸說は異あり、又葦屋浦と筑前蘆屋の說ありしとも、今東鑑に因てこれを決む、賀摩兵衛尉東鑑後條には加摩四兵衛とあり、宜しく考定むべし

初主上筑前に御座せし時、奈田種直菊池隆直忠節群に超なりとて勲功の賞行はれて種直は筑前守に隆直は肥後守に補せらる、就中は平家の知行殊更菊池奈田の地

勢なるを積み落ちぬ[illegible]しかれども種直隆直も力あらず、主上三種の神器を帯し
て渡りたまへば、天道にも叶ひ神明も守護したまふ故
かく平家の成行けるは、日比の悪行超過して人望に背き
し故なるべし、京田舎の輩は始終平家に附属せざる
事を盡しけれども所々にての合戦に或討死し或生捕らる
者多かりけり、文治元年全く源氏一統して程朝終に
天下の権を取りしかば、是迄平家に與同せし武士共悉
く捜求めしめらるゝ、則ち東鑑元暦三年五月筑西沙
汰施行の條々の内に云く、可召上美濃大蔵太夫、遍言参州於
州者也

関東事、又京田所知者可被分宛于勲功輩之由被仰遣参州
云々、又曰可召上範頼之旨雖被仰下之云々菊池原田以下同意
平氏之輩早々彼朝臣尋究之由、三品令奏聞云々平家没官
領種直種遠等所領京田板井山鹿以下所遂事被宛神地
頭之程者差置沙汰人、心静可被帰洛之由云々、又参州言
上曰、三種直隆直種遠秀遠之所領者依為没官之所、任
先例可置沙汰人職之由、雖令存候、旦先作事之由尚輙
于今不成敗候、何況自餘之所不及成敗候、鎌倉の沙汰新
の如くなるのみならず種直所領を没収せらるゝのみなら
ず、召下され平山武者所季重に預られ扇谷に押籠られて晴ぬ

思ひに年月を空しくなす、

大昌庆頼朝傳に文治元年十二月令兼侯奉院宣按西都、如案田種直、菊池隆直等、改郡邑者、例置庆治之所尚不尊恣、知他州子、事無巨細、欲一遵院宣、以除凶兇、

種直免されて帰京す

京四次郎大夫大蔵、種直は因幡に流されて鎌倉に召され、十右之年の春秋を徒に過しけるが、建久八丁巳年（此年東鑑に院宣として考へがたし、但建久元年三月領西御家人等恪恩沒ありしに見えたり）赦免あって西國に下り舊領の内に安堵せしらは家子郎從間傳へて恰も青竜の浮木に逢しらはく

我もくと馳集りければ、前代の家臣いだもなの程の形勢いてゝ忽ちあらはる廣に筑前國怡土郡の鎮守高祖大明神の社務に京兵庫頭とて家門盛なるものあり、種直に求て深く恨みく種入りしに兵庫頭悲かこくして領掌して種直を四男種成（後野良郎、野郎大夫と云、野良郡を領ず、宣陽門に住せしに依て云傳）を婿として三男と添はれば武威又た國中に振へり是に於て怡土郡北郎地館を築きて移りけり、此所は高祖大明神の借領にて社家進止の地なれば、あり、（北郎九は今の高祖三郎等の古名なり、一説は蒼館の地三雪所藻山の邊なりと云ふ）

其後建仁中種直、偏に婿子種榮、三男種和、四子種成等に京兵庫力と称せ伊勢城戸刑法港月見山に新造の別

館を構へて居住せり、其後又本館を建て移せり、
按に宗像追考に種直初め三雲村居住、後伊勢國に遷法
美月見山に館を建て其後伊勢山に城を構へ住すとあ
り、今伊勢山の東に古館と云ふ所あり、定城とある此なり本
館の址は高祖社の上にあり今御館と云ふ、伊勢城戸等
の四名は今村南の南字に遺れり然れは所々に城館を作
りて轉移せしものなるべし

此間建久仁元年より建暦二年中年あて成就す此時博多
津佛に付津入唐船未泊し和漢の交易自由なるに依て筑前
總て鎮西宮崎、就中怡土志摩両郡頗る富榮なる故に

種直五郎丸の館を造るなり、頗すくして其功遂に成就せし
とあり、種直又其先祖泰種●領齊しを遣し向上原に
幡宮の祠を修補し
一本系譜に宮田八幡は東村に在る、往昔種直高祖に歸國な
し後に繁昌せるなり、先祖春實東村に居住せし故なれば、
八幡宮相殿天満大神なり、其代々神主として西保刑部遣
けり、其御祭の初めは種直其外家人等殺生を禁じ精直
鎮倉殿へ指内せられ十有三年にして無なく歸國あるによりて全禮
を十三日に定めらるると加布宣まて下遷宮あり、天照大神寶満大
神も鎮座坐まし、あること記せり、按に今も神輿三体神寶あり八幡

天満社殿の三神なり系譜の説と異なり又た譜説にれは
春實も東村に居住せし事あるに似たり）又庄内の淀呂村に天
台宗の一寺を創建し極樂寺と號す平重盛の位牌に當
寺開基大檀那小松内大臣平重盛浮蓮大居士卒年治承
三年と誌せるは寺僧の誤なり重盛は治承三己亥年八月中旬
卒去なり）檀直は在職の時より入道せしなり故檀直入道之
時云々又當国に貳入道後宮とも云ふ（奥羽氏藏に見へたり）
為山し建保元年三月三日に記せり萬歳院殿嵩山常榮大
居士と謚して神主寺に傳へたり（以上高記の説）（扶藩地志に
檀直墓此寺にあり或云東寺にあると見る）今西所出の古墓

あれと銘字なくして定あかるし又近隣満吉村の山にい塔保
寺と云巨刹の残基あり其地に平内府宗盛息女の墓とて
あり是檀直の後世に立て女児を陪し遣しにい又本高
記に極樂寺は初り立國寺とも云ふ宗盛吉隆の
田畠五町を寄附せり豊田納宗大保るに且那に付と
いへる後天正中に在しなり詳に就國寺再興條に記
せり新出秋月系図に春實は年卒年寛慧法仁本光
院と記せり
按に檀直罪を赦免せられ筑前に下向し怡土郡高祖に来住
せるなるべし然るに高記に上保力を添てければ其

鞍に乗りて漸く近郊を押領すと記せしこと今取るべき真譜
は此時乱世の砌なりと雖も鎌倉将軍を初め北條氏執権
として富田討伐に深刻なること武田なども見て知るべし殊
に筑紫には其頃頼守護として國務を行ふ者有り罪
を糺明せずして種直に罪を赦され帰國して領地
壊を侵掠せんも其外に逃るべからず其意疑へし故に
是を制りぬ因てすべき富田の領地所々にあるも其内
にて高祖の遺にあり種直に返し與へられ一國
して爰に居住せしなるべし富田種直跡三千貫町後
頼に賜ふなど其頃譜に見へたり又富田の祖先泰種

怡土郡川上村に八幡宮を勧請せしことあり又昌遠富田主
の殿古来傳りてあるなど富田篇領此遠に有しこと謂れあり
いあらず且は本文篇領の内に安陪ありといへる語ひも能叶
へばなり又地に平家追討の時富田彌正少弼忠貞と称
せに依て文治三年頼朝卿感状を賜り筑什の旨に住て
州前三箇國の事其行正直在相違の由見たり生言今澤
本氏に蔵む昌文に詞疑あるべしと雖も是若し真書なる
らば此彌正少弼は富田氏族なり種直に引違て富田に忠
を盡せし人なるべし高祖富田氏世々彌正少弼と通稱と
されば此高祖と云ふまでもものに似たり藩翰譜秋月條の註

宇多天皇

光孝天皇第二ノ御子御諱定省仁和三戊申年十二月廿二日即位爲人皇第五十九世寶平九丁巳年七月三日禪位於太子稱亭子院後落飛號寶平法皇兼平元辛卯年七月十九日崩春秋六十五

敦實親王 仁也實ハ非也

宇多ノ天皇第八皇子一品式部卿號仁和寺宮母內大臣高藤公之女也爲延喜帝

之同母弟義平六丙申年始賜源姓

第三世
雅信
正二位左大臣號一條正暦二辛卯年薨
壽七十四贈正一位

第四世
扶義
中宮大夫右大辨正三位參議寛仁四庚申
年許牛車

第五世
成頼
從四位下任兵庫頭始任于近江國浦生
郡佐々木歸六勿之兵士歸附之始世世兵
兵器爲武將是佐々木之元祖也

第六世
章經
叙從四位下任兵部太夫改義經号國光寺

第七世
經方
從五位下号源太夫称續光寺

第八世
季定
一名爲俊從五位上式部太夫號長光寺

第九世
秀義
佐々木源三郎十三歳之時六條判官爲

義請之爲養良子分重代太刀及鎧而傳之
源平爭雄之時每顯其勇名平治之戰稱
源氏十六騎秀乃義父爲其最賴朝起兵於東
國秀義父子之戰功逾于他士叙從五位上任廷
尉元久二乙丑年四月九日卒号長命寺

第十世
定綱

號佐々木太郎任左衛門尉叙從五位下從賴
朝鄉而誅山木判官自後石橋楊山及其他
所々之戰佐々多勇功

信綱

號四郎奉鎌倉之命而所々戰場屢有功叙
從五位上任検非違使左衛門尉到近江守

第十二世
氏信

京極近江守叙從五位下永仁二乙未年卒

第十三世
滿信

佐々木三郎京極佐渡守

第十四世
宗清

正安二年庚子八月九日出家法名道法

一名宗満號黒田四郎任左衛門尉判官叙従五位下延文二丁酉年卒歳七十九黒田氏之元祖

第八十五世
高満
黒田判官代備前守

第八十六世
宗信
出羽守叙従五位下

第八十七世
高教
黒田四郎任備前守兵庫助叙従五位下

第八十八世
高宗
備前守

第八十九世
高政
號黒田右近太夫龍衣領父祖之采地爲江州佐々木大膳太夫高頼之附庸然山州丹岡山之戦俣犯軍令而與太將高頼有怨憂於是去江州往備前邑久郡福岡邑是

第九十世
重隆
高政第二子號黒田下野守永正五年戊辰生于備前邑久郡福岡邑後屬于赤松氏遷於播州姫路永禄七甲子年二月六日卒法名宗卜享年五十七

職隆

（二重隆增男ト）黑田美濃守大永四甲申年生于播州姬路城時播州小寺政職強大振威於近國職隆屬之屢有戰功小寺氏感其功忍授小寺姓與其譜字且假其五權天正十三乙酉年八月九日卒享年六十二法名心光院滿譽宗圓

高友

大永五乙酉年正月十二日生于播州館野初名千大夫爲僧号休夢後養髮爲士仕于秀吉公

友氏

天文七戊戌年生于東播州西郡初名勘七後同國高倉地頭井手左近將監養之爲子改号井手勘右衛門於播州土器坂戰ト死

第九二世

孝高

天文十五丙午年十一月九日生于播州姬路城母明石京和女也童名万吉長政官兵衛始冒於小寺政職之姓称小寺官兵衛後通志於織田信長公屬干羽柴秀吉公戰功良策（仁策）難枚舉（有之本書不詳）雖數举秀吉公封豐臣前六郡爲若高之采地到此改小寺氏復于本姓黑田叙從五位天正十四丙戌年五月壬勘解由次官同十七己丑年讓其采地於長子長政祝髮号如水居士圓清慶長五庚子年關原之役與長政共勤源大君之命長政在東國竭忠策於內若高在鎮西援兵勢於外且虜大友義統降豐筑之數城悉定九州蓋於時源大君一統於海內若高長政父子之功爲當世第一慶長九甲辰年三月十日病薨享年五十有九葬光院殿

利高

爲病氣保養至京都 九人

初名小一郎後改兵庫助仕千豊臣秀吉公後爲孝高之附庸母與孝高同廿孝高七歳米地一万二千石卜云云

三男

初名甚吉仕千秀吉公後爲孝高之附庸祝髮號養心享年五十二母播州神吉城主神吉氏之女米地一万二千石卜云云

四男

初名愢吉長號愢右衛門後改圓書助母母里氏慶長十四巳酉年三月三日卒享年四十六米地一万石卜云云

女子自幼歳爲聲瘖千播州英賀三木清閑母與孝高同

女子爲尾上安右衛門妻尾上氏戰ト死即爲尾號法與含姉圓不再嫁後任千筑前那珂郡任吉邑母與孝高元和四戊午年三月廿八日卒享年六十二昌林院

女子母與圓書助同爲一柳伊豆守室卜

其子松壽早世伊豆守戰死後嫁于伊
藤是菴
松壽慶長八癸卯三月朔日卒法号雲澤宗龍

第九三世

長政

長政母伐
寛永四丁卯
八月九六日卒
于福岡淸
照福院殿
念譽誥
榮臣

孝高男幼名松千代長政吉兵衛母播州志
方城主櫛橋豊後守女也永禄十一戊辰年
十二月三日寅刻產于播州飾東郡姫路
邑十六歲與父共從秀吉公軍于江州
淺瀨與柴田氏戰而初獲首級自後每
有兵役運智策振勇猛而無不破堅挫
鋭之功矣天正十七己丑年受父讓而領
豊前六郡六月十七日叙從五位下任甲
斐守慶長五庚子年石田氏起乱長政
竭忠於　源大君家康公屢出秘計ヲ
而降於筑前中納言秀乃秋及吉川
藏人廣家等爲援兵其良策戰
功爲諸將之最　大君大感賞之改
豊前封以筑前十五郡乃新築筑前福
岡城而居焉同八癸卯年叙四位爲

侍從政甲斐守任筑前允豊臣
源家與八替之際盧國用兵之時及朝鮮
征伐之中其戰功忠策不可勝記名聲
亦藉甚元和九癸亥年八月四日病薨
于京師報恩寺享年五十六浄屠氏
追號古心道卜與雲院
能之助　又号能松慶長二丁酉年秀吉再代
朝鮮時爲越前(一二月越)朝鮮暴風覆船而溺死
歳十六

大涼院殿德
譽榮春
大法居寛
永十二乙亥正
月十二日卒

長政之嫡子母保科弾正女爲家康公之
外姪女家康公養之爲子嫁長政慶長七
壬寅年十一月九日生干忠之於筑前福
岡城童名万德同十七壬子年二月十日經
駿府拜謁於家康公乃受釣命任右衛
門佐賜長光太刀正宗短刀及馬鹿鳥
明年正月往江戸拜謁於　大將軍
秀忠公授松平姓及尊諱忠之字且賜
太刀短刀同二月己亥朔日任諸大夫元和元乙卯
年三月大坂城兵起忠之十四歳帥兵二万

大涼院殿世俄

長源院殿清信
受法大法尼
元和四戊午年
七月七日卒
家康公御妹
保科弾正殿
室也

人自筑前到于攝州奉
源大君之命寛永三丙寅年叙從四位下
任侍從同十四丁巳年肥前嶋原凶賊搖城
起兵忠之在江戸奉台命急馳到嶋原與諸
將共屠殺之其功逾于諸將正保四丁亥年
三月九日任筑前守兼應三甲午年二
月十二日薨于福岡城享年五十三浴屠
氏追号傑春京英　高樹院

長興　童名大万長號勘解由後任甲斐
守叙從五位下諸大夫毋與忠之同元和
九癸亥年十四歳領賜筑前夜須郡下座
郡嘉摩郡三郡之内五万石居于夜須
郡秋月邑寛文五乙巳年三月九日卒于
江戸享年五十六浴屠氏追號五女京京
卯東陽院

高政　童名万吉長號官兵衛後叙從五位下
諸太夫任東市正毋與忠之同元和九癸亥
年十二歳領賜於筑前鞍手遠賀二
郡之内四万石居于鞍手郡東蓮寺（今改直方）
寛永十六己卯年十一月十三日卒于江

戸享年二十八浮屠氏追號松峯宗
丁雲心院

政冬 童名德松後號甚四郎母筑紫廣門
之女爲忠之庶兄長與之庶兄領筑
前 怡土郡内一万石仕干
（二居高祖）
秀忠公爲近臣寛永三丙寅年十
（二寛永二乙巳三月十日卒）
一月卒于福岡城下享年二十二浮
屠氏追號春峯道林見桃院

女子 諱菊子長政之長女母阿波淡路両列
華屋 大守蜂須賀彦右衛門正勝女慶長二
（秀忠公夫人）
丁酉年誕生爲井上淡路守室寛文十庚戌
年七月九日卒享年七十四稱林光院

女子 諱德子母與忠之同爲榊原式部太輔
春譽 室寛永二乙巳年正月九日卒行年二十
花慶 歳有女子八歳卒稱梅雲院
（大禪定尼）

女子 諱萬子母與忠之同爲池田右近太夫室
天譽 歳稱清光院
珠英大姉
正保二乙酉年三月十六日卒行年二十

第二十五世
少元之

兼應三甲午四月九二日薨督 彼 伊出

寛永五戊辰年五月十六日産于筑前早良郡橋本邑初名吉兵衛 寛永十二乙亥年正月五日始謁見于 江城 家光公 正保四丁亥年三月十八日叙四位任右衛門佐慶安戊子年十二月十二日賜御諱字及松平氏元禄元戊辰年十二月九日讓于 家督綱政

文勝 初名萬吉 實忠之二男也 寛永十七庚辰年三月十五日賜隆政之跡職 慶安四辛卯年十二月九日叙從五位下任右馬頭 寛文三癸卯年七月十五日卒 浮屠氏追號高峯 宗堅 乾德院殿

女子 諱筑姫 慶安二己巳年二月十一日産于爲酒井河内守忠明 任雅樂頭 室 貞享二丙寅年二月六日刻午 病疱瘡 戊子 江戸 享年三十八歲 浮屠氏追號海壽 宗鎮 宝嚴院殿

綱之 兼應四乙未年二月八日産于武陽 江戸 豐前小倉城主小笠原右近將監 姉 女 初名號 万千代 叙四位 任筑前守 依爲惱 法躰 名澄

軌後改桑雲居于筑前郡珂郡屋形原邑
從移福岡城下栗林

男子 早世 初名市之助 萬治元戊戌年卒 追號南英
亲菊 本源院殿

第二十六世
綱政

萬治二己亥年八月十日産于江戸母與綱之
同初名宮内延寶五丁巳年閏十二月九日
敕四位任肥前守賜御諱字及松平
氏長光御敕元禄元年

戊辰十二月九日繼家録
綱吉公江 大刀則重及黄金五十枚綿五
百把獻之

女子
諱
嫁于黒田甲斐守長重元禄六癸酉年
八月十四日卒 享年
浮屠氏 追號月巖宗照 勝眞院殿

長清 室小笠原修理太夫妹 寛文七丁未年 六月九日産于江戸與
同天和三癸亥年 十二月九日始拜謁

綱吉公初名平八郎貞享元甲子年十二
月十五日叙五位下諸太夫任伊勢守貞
享四丁卯年六月十二日始下筑前元禄元
戊辰年十月九日依　綱吉公命筑
前嘉摩穂波二郡之内分知賜於新
田五万石居于直方邑
男子　童名百助延寶六戊午年二月十八日卒于
筑前福岡浮屠氏追號華月幼貞　春光院
男子　童名正太郎産于筑前福岡貞享二
乙丑年九月晦日卒於同所浮屠氏追
號穐岳宗月　無量寺院
綱政嫡男天和二壬戌年六月十五日産于江
府初名左京毋筑後州柳川城主立花
飛驒守朋茂嫡女元禄四辛未年三月十
六日初拜謁　綱吉公則重賜刀賜之
同九丙子年十二月十六日叙四位任大隅守
賜御諱字

正則

綱政二男貞享二乙丑年五月九日産于

江府母與吉之同初名辨之助 稱森山氏 元禄
十三庚辰年十二月十二日初拜謁
綱吉公同十五丙午年十二月十八日叙從五
位下任和泉守

三男 早世 亀之助母與吉之同産于江府卒
於同所

四男 早世 岩之助産于江戸卒 同所母後嫁陪
臣加藤氏先

女子錄

追加

一 永禄七甲子二月六日 照岸宗卜居士 黒田下野守重隆公 五十七

一 天正十二乙酉八月十二日 心光院殿蒲輿誉宗圓大居士 黒田美濃守職隆公 六十二

一 慶長九甲辰三月十日 龍光院殿如水圓清大居士 黒田勘解由孝高公

一 寛永四丁卯八月廿二日 照福院殿念輿誉浩榮尼公大姉 孝高公室

一 元和四戊午三月十八日 昌林院殿法輿誉妙圓大姉 孝高公妹女

元和九癸亥八月四日
一興雲院殿前大中大夫筑列都皆古心道卜大居士　黒田筑前守長政公五十六
元和四戊午七月七日源家康公御妹　保科弾正室　大涼院ノ母儀
一長源院殿清信受法大尼
寛永十二乙亥正月十二日家康公御姪
一大涼院殿德與誉桀春大法尼　長政室
寛永三丙午二月十二日
一高樹院殿前筑州大守傑春宗英大禪定門　筑前守忠之公五十三
寛永六己巳七月五日　母里氏女
一長德院殿本然光貞大姉　黒田圓書助母
慶長八癸卯三月朔日
一雲澤宗龍禪定門　母圓書助同一柳伊豆守息　長政ノ上ニ
寛永五戊辰閏十月十六日
一梅溪院殿天秀劫貞大姉　忠之公柏ノ室
寛文十庚戌八月十日
一林光院殿華屋宗法大姉　長政公母井上漢路守室
延宝五丁巳七月十六日
一光長照院殿玄巖永壽寺　光之公ノ母儀　黒田市正
寛永十六己卯十一月九五日
一雲心院殿前東市令松峰宗丁大禪定門　円後市正
寛文三癸卯七月九五日
一乾德院殿前東市令高峯宗堅居士
寛文五乙巳三月六日
一東陽院殿五峰宗仰大居士　黒田甲斐守長興公
寛永二乙丑正月九日
一梅雲院殿春與誉花慶大禪尼　忠之公妹女神原式部太輔室

正保二乙酉三月十六日
一清光院殿天樂珠英大姉　忠之公ノ妹女也
寛永九壬申六月二日
一淨源院殿蓮室早歸童法尼　梅雲院殿女忠之公姪女也
寛文八戊申正月九日
一寶光院殿元壽妙長大姉　光之公ノ室
貞享三丙寅三月六日
一寶光嚴院殿海壽宗鎮大姉　光之公ノ女　酒井河内守室
萬治元戊戌十月九日
一本源院殿南英宗菊大童子　光之公ノ息　号帝之助
元禄六癸酉八月十四日
一勝眞院殿月巖宗照大姉　光之公ノ息女　黒田甲斐守長重室
一光殊院殿春遊幻夢大童子　清光院ノ息
貞享二辛丑九月晦日
一春光院殿華一月幻貞大童子　光之公ノ息
貞享二辛丑九月晦日
一無量壽院殿秋岳宗月大童子　光之公ノ息
延宝七己未六月六日
一惠照院殿天英勅高大姉　黒田甲斐守長貞公ノ女　黒田三左衛門室
一江龍院殿前筑刃大守涼山宗眞大居士

居士播刀筆飾東郡人姓源父濃刀刺吏識隆累代城千檣
刀刀姬路居士生于天文十五年丙午冬十一月九九月雲下蓋也見
者金吏曰慶雲耳露天之瑞也決是家門繁興先兆也七歲刀父
俾居士入寺學士性不愛紙筆只愛射御十四歲永祿而喪母
其慟哭者超越他人孝子十七八歲之項專愛和歌之道上自三代
集下至八代集此外更及源氏物語伊勢物語諸家歌集等有下
欲通羽翼之志傍有數僧號員滿坊謂曰今也國屬艱虞首尾比
干我邑去敵軍者不過三四里方干此時抱兵書愛歌
集孰爲之當乎若或未獲止請樂拳稱曰購鞍馬間造之
往々橫槊賦詩之例徒勒螢映雪味月吟花甚不可也先
束閤之旦待止戈之日則如何於是中道而廢矣永祿十二年己

己赤松下野前司出師圍姫路居對陣青山戰決勝敵兵
殞首者三十餘輩也居士戚名勇功自此而顯矣天正元年
癸酉贈左府織田信長以幾内五六列置毅中播州西方未屬
麻毛下居士以謂毅聞左府爲之日本果歸掌握不知先出請
禮秋七月入京左府嘉氣溢眉面語移刻及辞亲左府密謂曰
他日我伐中國必以居士爲先鋒如何居士謹聞命去訖退矣三
年乙亥中國戎卒毛陳于播之英賀居士出對陳敵兵不當
鋒而敗矣左府以年書感之羽立年丙子左府以羽柴筑前刺史
秀吉爲將欲伐播街談巷說紛紜盈耳秋九月居士密通秀吉
不堪喜躍書拙書詞報曰自今以後我乎汝爲異姓兄弟請其莫違
焉冬十一月果伐播居士爲其先鋒攻佐用城壬兄弟列首死干
居士之午者其敵不足勝記焉　秀吉獻捷於九府佐府歡
感其忠功午書羽立日圍上月城中國出撫無三年能駐府
處右金鞍之陳居士見之不獲忍干自合鋒立處列首者孔
賜矣　秀吉即賜太刀一柄馬一疋及金鞍玉勒附諸緣昊
以賞其忠古人取謂賞貴不越其時想是意在茲乎　秀吉
莞爾謂諸將曰若欲得重賞勵勇功猶如居士者羽立年丁
巳夏四月中國反紀伊淡路精兵八千余負勢力攻播之別府
城秀吉聞之余排士率援兵五百余人密入城中收焉敵兵
八千余排闥爲噲等倍其鋒不可當居士辛戰叩楯下
令曰運在天勿敢是乃是右之格言也思惟々々其聲未
絶闘戰三次全身汗流將裂口氣吐煙依稀香象王截
流行佛金獅子鼓其勢乃言以可知矣敵兵難支悉
退敗奮者七十餘人也左府及秀吉共以書感功六年戊

寅秋九月荒木攝丹刺史叛秀吉遣居士告曰勿憚改其過荒
木不及致報部留居士不放歸惟時嗣子長政爲質子在尤府
居士親族會議謂父職隆曰令子在荒木之孫在尤府棄孫子
棄子歟職隆曰孫也親族相議質于尤府也使于荒木其留
之者是荒木之非也我爭棄孫以與叛黨乎親族嘆曰是義也
翌年己卯冬十月居士棄而脫出來有岡吁職隆賢虞之
遠者可喜可尚焉十年壬午秀吉奉尤府命攻備中高
松城城堅而難攻易潰故環城皆築長堤其高者益山
城之上國中洪河細流引敏長堤雖治滿不漏池堅城皆沒
人皆成魚可憐生生々々左府命明智日波等成兩將與
先鋒秀吉相議俾中國敏吾輩握則可也明智不
能中國敏吾輩握則可也明智不
吾軍難支如之何而可平居士曰只乞和之外別有何奇策
乎秀吉以居士之言講和定界如漢楚割鴻溝而敏矣明
智屯陳於山崎待秀吉敏秀吉以居士爲先鋒面山崎金玄天
下安危只在此戰乎己卯知終敗矣十二年甲申秀吉復幾內
而中國猶有余殃居士振智力之耿乃也十四年丙戌秀吉有
欲合海西八九州之志俾居士率中國勇兵三萬余騎征海西
十月到豐前陷感之以書然後攻障子岳城圍香春岳城城
主高橋降矣案勇一敗及筑前筑後肥前肥後皆以降旗
臣服矣十五年丁亥秀吉自征薩摩分軍南北軍路
歷肥後南軍路過日向居士在南軍於日向耳河與薩兵鋒
薩兵敗不能而薩州大守嶋津降矣秀吉嘆曰今度海西

八九列敵吾一振者是出自居士方寸實其忠以豐前國某榮莫
榮焉十七年己丑居士讓國於嗣子長政而侍秀吉左右執支辭言
如韓淮陰在沛公言聽計用笑五月任勾勒是亦華也十八年庚
寅秀吉征圍小田原城數月不下居士智計北條退城伏誅
六十六州一其統生民呼萬歲又祿元年壬辰秀吉征朝鮮
國遣三將為先鋒嗣子長政亦其一負也居士亦相追超海小
西接列前司行長逢久之藏行居士指其短行長不聽居士
却回白秀吉言行長真執拗支而不從他言其軍必敗否
果如居士之言二年癸巳秀吉賜裡旗於居士命曰汝代我
列朝鮮出令於諸軍可也居士因之再超海其軍忠不可勝
數焉秀吉以博陸之職讓秀次仍稱秀吉謂大閤居士
時以諫博陸曰殿下雖有日殺千人不能盡殺人間之言果如合符也慶長三年戊戌大閤薨矣內府家康受遺
命輔幼主秀頼矣有石田礼部三成運陰謀欲奪內
府之權居士忌之通內府俾三成執居江州五年庚子
三成終叛濃州以西方五幾中國四國九國皆與三成屈次雖
勸居士於義不聽惟時內府在東武江戸長政亦從後東矣
秋九月居士率一萬騎兵赴豐後立石一戰生擒大友義統誅
戮其黨兵安喜當來兩城聞其虬髯甲弛絃以降矣居士
唱凱歌敗豐前隅小倉城又赴筑後圍柳川之城城主立花
統降矣昔以三寸舌下聚百七十城者可併按也十五日內府
家康上京於濃州一戰擒三成諸國復舊人有長政軍忠
改豐前任筑前於是築城號福岡可謂有惟父有惟子

冬十一月居士擢乃義統入京内府先問以九列戰闘次第居士遂一
答定内府不堪歎作謂曰必姜朝轉位居士跳曰我已老矣當
貴非穎不如飯去生烟疾發泉石亭月亡日陪僧話於茶竹
之隙飄茶烟於落花之風誦唐詩詠倭歌逍遥自適是亦飯
後之賜也内府家康聞此言曰處今行古者除居士外又誰乎
至矣玄奘先是教僧曰待我之旦言不浪旅希有々々六年辛丑
扣大德寺三玄院親祖師向上也鼻七年壬寅退休筑前蓋
以長政爲其太子也紫府天滿宮及觀世音寺最先覓修之
神也昌泰四年辛酉左遷太宰府都督大舊激之餘哉
疏祈天爲戚德天神戚驗日新者猶如月來花弄影楊千
歴而飛松一夜而老靈威不暇枚舉也至若托蝶魂多龍淵
里而飛來者有以哉元明師偈涉此支而天錫有觀音寺表
一聲鐘之吟洪帛有一夜飛香度海雲詠異城猶亦何如於
吾朝千児童走卒皆知可敬之居士太守共取信者非無其理
也自此資嬉千宮陽千志嶋百廢具興時哉々々以紫府宗福
寺從宮陽松間招請大德禪寺雲英大和尚開堂演法聳耳動衆
聽古人云者德者山陵則慶雲出雲英乃是居士慶雲也太守
繼創龍光禪院龍吟雲與而符千居士初生慶雲蓋屋之
懸識八年癸卯以茲嶋隘狹旅客不使繫舟是故筑石疊
土無一筆貫之止終廣洪其地者三町餘也不來官船商舶往還攘
風波之難九年甲辰春三月居士臥病命長政遺訓曰死期將
念日辰刻我沒後請撫民舉直措枉慈孤弱憐貧賤

親賢疎佞則何追福如喬哉臨期詠一首和歌其声未終端然
逝矣壽五十又九也太守知法葬送用心皆不違居士遺訓可謂孝
矣兼聞太守侍居士病床憂勞不解衣湯藥非太
守只處嘗弗進賭夫曾參以布衣猶難之今太守親以
長者脩之過曾參孝遠矣一日差使於對府高居告曰頃日
劉石爲居士碑一頒和尚書銘之賜則錄碑傳之不朽予以
謂大化吾朝豪家喪將死者必達寺度僧刻木留像爲至
孝亦今世大守能善達寺度僧銘碑以欲流其芳於百世者
惟孝者高出處聞也古曰忠臣出孝子門因是觀之太守
是吾朝忠臣而不愧漢三傑者也予結生緣於筑前藏
姓名於對府年久于茲矣而況近來病多學疲禿筆硯
[illegible]

百戰場中功第一
黒田苗裔是称首
千里疵梅真面目
曾聞累代居姫路
懷惠移家他猛士
希顏孔子世間行
造化小児俄犯枕
至誠所施孝惟孝
筆下留歌辞焰部
傳々父子不傳妙

黄金色合鑄斯人
紫府菩君即現身
三玄佳兼吏精神
何料比年隣怪濱
忘躬爲國光忠臣
墓簡麗唐虞風俗淳
本列太守泣治中
遺命勿違民我民
牌前呑乳哭蒼旻
劉石爲碑輪命輪

慶長第九曆龍集甲辰端午前一日

大明　萬曆　聖皇帝

特賜日本光禪師前聖福兼高源景徹老

納玄蘇漢書正為

有非常之人有非常之功嘗聞其語矣今見其人也筑紫太
寺源姓黒田氏長政者蓋斯人乎濃州織隆者其祖出如水居士
者其椿府也照福夫人櫛播氏者其萱砧也以永祿十年戊辰
冬十二月三日而生太寺於播之飾東姫路邑幼雄偉不常父祖異
奇之於是織田信長嘗幾内兵馬織隆屬意故遣太寺為質
信長命其戲下秀吉護焉寞之近江長濱時太寺生十歲天正五年
丁丑之秋也明年荒木氏者載於信長如水行而諫之荒木拘
之衆告織隆日棄立於子辛於孫辛同干荒木辛曰否立
孫夫豈為壯曲為老物皆然矣質吾孫者是吾志也不還我
子者幽在荒木既而如水脫歸而荒木果敗矣聞二歲太寺還
於姫路翌年太寺十四歲與如水共從秀吉軍於三木與

別所氏戰太守獲首級衆甚奇之十年夏六月信長
沒秀吉起而軍政大振人皆奉之明年夏南紀雜賀根
來賊兵攻泉之岸和田城先是秀吉使中村式部丞輔守城
於是如水急馳救之太守自斬賊二人時十六歲也太守之雄武
是赫々焉十五年丁亥博陸豐臣秀吉公西ノ方數筑紫太
守從之夏四月與薩列嶋津氏戰十日列賊部太守拔金斬
敵大破之建於九列平夷秀吉旋治而人心如水及太守治豐列
冬十月列賊覬間隙城叛太守環而攻之如法寺氏緒方氏一千
餘人爲援賊來戰太守數千之獲其兩將乃進列筑攻城
并鎮房墨鎮房懼而降又進赴廣津一首鬼木掃部祉觀音
拔大九城殺其將緒方氏伊藤田氏中尾氏等捕虜一千五百
治部大輔三成贈良馬於太守賜劍於小村氏部以豐前一
爲如水采地太守之勳名於是籍甚矣十九年冬十月秀吉諸
將築壘於肥前松浦郡名護屋太守爲之監爲我朝鮮也又祿
元年春三月遣責朝鮮上包茅不貢乃遣先登三將而征之太
守爲其一焉太守率大友左兵衛義統二萬人爲先鋒入于朝鮮
攻金海城石終日而下之殺傷一万人俘前數千破昌原城梟首
五百人自昌原至上都有數十城城門不關人皆逃散太守所到
皆穀而又使我後軍因糧於敵西數千敵潰剿殆盡三万餘口
（朝鮮王大懼出幸平壤道夏五月十三日太守入都居十日）
遂徙攻平安城下有大河阻河而陣敵夜潛渡之襲小西摂津
守太守聞之自馳半渡追擊之殺獲數百人虜放矢中太守
左腕怒手斬其虜復大戰太守家臣黑田二郎戰死詰旦

諸軍渡河屠平安城王僅得脫衆正月議令小西氏留守平
安太守別擊黃海道又入白川城居半歲明年正月敵十
余万來攻太守出戰破之儀數千人太守別使家臣小河氏守立中
山方是之時朝鮮乞救於明國恐乎乃吉并吞朝鮮而西略則
必有輔車唇齒之憂而抵觸東藩也乃發援兵數十万來侵
平安我軍雖力戰寡不能敵衆小西氏敗績而還明兵競逐
到立山不能進太谷刑部少輔自都至開城府迎太守與小早
川隆景但退入都時明兵來攻其後如林太守指麾諸軍大戰明
兵觧散既而諸軍議欲避都衆擇太守爲後拒都南有巨
川造舟維舟諸將皆渡然後太守斷其浮橋而殿矣夏六月
明將若大將李如松率數萬之盛來皆如雲蒸霞起生氣凌人神威赫赫
全羅道晋州城畢生口數万人秋八月乙巳於機長三年秋
氷瓦渡於朝鮮秋九月七日自慶尚道赴全羅道與明軍太
戰于稷山捷萬余人翌日明軍騁使价至平壤贈巨鷹於太
守蓋其意欲請和也太守進擬梁山冬十二月廿八日明軍大起圍加
藤主計頭於蔚山城事急太守以如水爲梁山留後自馳到
蔚山救之淺野左京大夫太田飛彈守亦在城中與加藤頭同出
戰太守勠力擊明兵而奔之明年冬十二月敵自海陸同來
圍小西氏所居順天城城兵漸困太守以舟師援之遂全軍
而還太守威勇播於異域者於是昭晰矣三年秋八月乙酉
薨闔國謳歌　大相國源公者多矣　相國與石田三成有隙
而與太守善三成密遣使誘上杉景勝叛于李列五年
相國東歿景勝太守從而到下野國宮都宮告暇

還過相列太磯時聞三成叛又東到下野小山謁相國
相國甚悅賜鞍馬是時如水在豐而鎮焉秋八月太寺奉公
命到尾州清須與諸軍俱經濃州改阜城直渡合河擊
三成軍破之遂前到赤坂筑前黄門與三成約居濃之
松尾城太寺以密策入之黄門應相國九月十四日　相國率軍
至赤坂時毛利氏亦約三成使發藝陽兵據南宮山聞東
軍來潛遣吉川藏人福原越後太寺告降於　相國因是
奪太寺之奇計於是居多矣三成等率幾內西國兵自
太垣城出而戍列敵明諸將與三成及備前黄門島
津兵庫頭合戰於關原太寺躬當三成陣太擊破之
即進攻佐和山城以鈎命令筑前　黄門守此城亦捕
[illegible]
舉國屬相國於是諸將各就封國乃改豐前國封太寺於
筑前國居福岡城太寺之績功於是較著矣且其家臣栗
山利安井上之房毛利友信野村勝賴黑田一成等不能於
內忘身於外者悉能委任焉可謂得人矣引有菅廟所
謂皐府天滿宮也太寺以神有傳名故殊欽崇修營之增對
戶備祭祀又補益聖福兼天崇福之諸禪刹授時務義
之暇招和尚高量話則有猛省太寺之性達於是不他矣
九年春三月二十日如水吾士指舘舍太寺哀慟異頓初其
病時太寺殆廢寢食湯藥必先嘗而進之到此行哀
尤善太寺之孝忠可謂慎終矣立螭首龜趺之石以記其
士之行業是欲久子孫見之者善繼志追遠也十一年

相國命列國修江戸城十五年又令築尾州那古城太寺皆與而有力焉十九年大坂有流言而豊臣秀頼作亂

十月　相國自駿府大將軍右衛相自江戸同發諸軍悉會圍秀頼于大坂太寺留滞江戸故令其長子忠之自紫陽來謁中　相國於軍中相國紛和於秀頼而還元和元年乙卯夏五月再攻大坂太寺亦從行焉是行也豊臣遂滅矣太寺之勤奉可謂有始有終矣明年夏四月　大相國薨遂葬于野列日光山太寺刪鉅石柱若干株於筑紫長數丈徑數圍濕自南海達于山中以爲華表立之朝前此焉巍然殆非今所能及也相公感賞之太寺之心遂於是可見矣太寺女壯好馳馬

[illegible]

一日倭歌數連每與人晤語無不欣懽其在江戸也時招西維山子聞講論孟子又請令鈔寫經語之宜使干資治者編爲二冊置諸座右太寺之氣節蘊藉於是可觀矣九年癸亥夏青油幕入洛太寺從之停五馬於報恩寺覲疾石已　相公屢使使問之遺命以奉上臨下慎而勿怠秋八月四日太寺逝年五十六矣　相公甚悼焉人皆惜焉嗚呼哀哉

十里松間横兵山万年崇福寺之後家臣咸不堪悲慕或至于有自裁以殉者嗚呼其感人蓋如此今嗣忠之龍衣封於是請碑文於羅山子以太寺之爲人也出尋常萬分而其功名不可不刊之樂

石無吟之後昆故綴之以詞旦爲之銘曰

祝戲太寺翹々士林攻城野戰桃戈社金孫吳英衛遺

鄉音餘音非常ノ功業千古今朝鮮馳喙異邦知名

開原之役去就既明食邑千筑鐵券以盟傳之亘永

爲藩屏

右壹冊 嘉加藤清正書狀 弘武

三十四ヶ条三十八ヶ条

福岡縣朝倉郡
三奈木村
士族 黒田一美系譜

福岡藩太宰黒田一世年譜

伏敵門町清建野生編述

系譜

姓加藤（相州）黒田ノ姓トス

玉松　信兵衛　三左衛門　美作

初代　只成

一成ハ伊丹左衛門大夫童徳ノ第二子ヨリ童徳ノ祖先ヲ加藤次景廉ハ加藤氏ノ第ニ世々攝州ノ地領シ伊丹邑ニ住シ其士豪ヨリ始メテ伊丹ト稱ス童徳ハ永正十七庚辰年ヨリ伊丹邑ニ生レ武ヲ以テ著レ全族伊丹安藝守親保ノ女ヲ娶リ元亀二辛未年ヨリ一成ヲ伊丹邑ニ生ム親保ハ伊丹兵庫頭親興ノ兄ニシテ永禄年中足利將軍義昭ニ從ヒ伊丹氏ノ棟梁タリ同族皆其旗下ニ屬ス天正元年將

軍義昭ハ織田信長ト隙アリ遂ニ其家ヲ亡ス依テ伊
丹ノ一族モ亦タ攝津ノ領地ヲ失ヒ所々ニ沈落ス再後
信長攝津国ヲ荒木村重ニ賜ヒ有岡城ニ居ル伊
丹一族孫子村重ニ属シ宣徳モ其属官ナリ此時
宣徳ハ姓ヲ後ヲ、加藤又兵衛門ト称ス天正六年
村重毛利輝元ニ通シ信長ニ叛ク志ヲ信長ニ告テ
藩祖孝高ヲシテ往テ村重ヲ説シム村重孝高ヲ
囚ヘテ元告ニ此ヲ宣徳亦タ村重ヲ信ハサテ之ヲ監
守ス宣徳ハ又孝高ノ智オヲ慕ヒ且其寛容ノ恩
ニ夫妻熙勤ニ接待シ陰ニ衣食ヲ給シ善ヲ之レヲ

視ル又孝高ノ家人宮山善助利安（後成ハ利安ノ女
ヲ娶ル乃チ大膳利高ノ父ナリ）ヲ其家ニ潛伏セシメ苦ヲ
孝高ニ此間ヲ保庇ス全七年冬ニ信長ノ将滝川一
益兵ヲ率ヒテ有岡城ヲ攻ム村重敗レテ遁逃シ其
妻及一族悉ク誅ニ伏ス宣徳利安ハ孝高ニ託シ
ヲ携キ孝高ヲ救ヒ出シ衛員ヲ其家ニ連帰ル孝
高ヲ介抱シテ其疲弊ヲ養フ孝高既ニ健全ニ復シ
遂ニ帰御セラル孝高ハ其帰ニ臨ミ宣徳夫妻カ
己カ艱厄ヲ保護セシ効労ヲ酬シ為メニ宣徳ノ一子
ヲ養ヒ永ク其恩ニ報セントヲ約セラル依テ宣徳ノ次

子玉松丸ヲ養子トシテ孝高ニ迎エラレ黒田氏ヲ養ハル
又玉松ハ恢モ松寿（長政ノ幼字）ト同度ナレハ孝高ハ
特ニ己ノ子トシテ之レヲ生養セシヲ一成ノ充ナリ
宣徳ハ村宣院ニ云シカハ長子九郎太郎ナリ時ニ二歳
ナルヲ携テ宗嘉多秀家ニ仕ヘ備前ニ移住ス
十九年宣徳ナリ時ニ六十歳故アリテ宗嘉多氏ヲ辞シ
伊丹ニ帰郷ス全三年小西行長肥後ヲ領シ
宇土城ニ居ル宣徳ノ名ヲ聞キテ之レヲ招ク宣徳院
ニ老シ仕ヘ難シ吉成ヲシテ仕ヘシメ已ニ吉成ニ従
ヒテ肥後ニ赴ク慶長五年行長関ヶ原ニ敗シ宇土

城ヲ攻メラル依テ宣徳父子共ニ浪流ス全三年一成ハ宣
徳父子ヲ筑前ニ迎ヒ其采邑下坐郡ニ奉来ル宣徳
セシム宣徳甫後博多聖福寺内ニ室ヲ搆ヘ閑
居シ毒ヲ以テ終ル一成兄弟其菩提ヲ寺ニ建テ
宣徳ノ弟信院即チ是ナリ
宣徳ニ男四女アリ長男吉成ト共ニ三千石ノ采
地ヲ賜フ別ニ一家ヲ立ツ此レヲ同書徳成ノ祖先ト
長女ハ黒田蔵人ニ嫁シ次男ハ即チ一成ト又二女数内
匠思個ニ嫁シ二女ハ一成ノ家人加藤忠兵衛門ニ帰シ
四女ハ全加藤将監ニ帰シ各子孫アリ吉成ハ吉松ト云フ

慶長三年再征韓ノ役ハ水軍能シ明等ト
小船ニ乗シ中洋ヲ渡リ発シ渡海スト洋中ニ於テ風ニ遇
ヒ遂ニ没ス
一説ニ幼名ヲ玉松ト呼ヒ後ニ吾作ト改メ九郎ト称シテ
孝高ニ養ハレ黒田姓ヲ賜ハリ三左衛門一成ト称スヒ
十二年一成家ヲ出テ七郎ニ従ヒ根来雑賀ノ傍輩ト
泉州岸和田ニ寄戦スヒセシ一成ヲ初陣トスヒリ
文禄元年一成十七歳ニ秀吉ニ隠岐ヲ伐ツ一成ハ七郎ニ従ヒ
日向ノ耳川ニ戦ヒ勲功ノ高カリシヲ為ス其ヒ七月孝高
封ヲ豊前国仲津川ニ受ケ一説ハ七郎ニ従ヒ馬ヶ嶽
城ニ居リ名ヲ上総ノ勲撰シ隈城井谷、廣津、
観音寺ノ先要塞ニ寄戦シテ之レヲ征服ス
文禄元年征韓ノ役ニハ一説ニ二十二歳ニ七郎ニ従ヒ出陣シ
慶尚道昌原城ヲ攻メ進ンテ平安道嘉山城ヲ破リ
白川城ニ至リテ帰ル 二年四月長政晋州城ヲ
攻ムヤ一成ハ後ヲ又兵衛基次ト共ニ先登シテ真高
名ヲ顕ス 翌三年媾和成リ軍ヲ班ス一説ニハ七郎ニ
従ヒテ帰朝ス慶長三年和議破レ再征スルヤ一説ハ
又七郎ニ従ヒテ出陣ス慶尚道ヲ全羅道ヲ経テ
全羅館ニ七郎ニ進ンテ韓ノ副将兵解生ノ軍

兵り根山水保ノ要害ニ拠し一成ハ又又法義又兵術ト苦ト
共ニ高名ノ為ス理ニ成ハ長ケ徒ト加義
清正ト甘蔚山ノ高ノ攻し西生浦ノ城ノ守ル韓兵多ノ
来リ攻ム一成ハ殊死シテ防戦撃テ之ヲ退ケ一家自
ト韓ノ鄭時ノ酬ス此年八月十日秀吉薨去ス征
韓ノ軍ノ旋ス一家モ亦ト従ヒテ帰朝ス中津川忠ト
還ル仝五年七月徳川秀忠徒ト舎津追討トシテ出野
州小山ニ至ルニ時石田三成大坂ニアリ其幕動ノ聞ア
南ル秀ハ家康秀忠ノ家ニ帰ス三年ノ冬ニ至テ高ト清ト
嗣ノ八月ニ至リ一成ハ法義又兵術ト苦ト合度川ノ先

陣シ敵ノ将村山程助ノ撃ス九月十五日関ヶ原合戦
ニハ一家ハ始終モ秀ト陣ス後シテ著シキ偉功ノ奏スモ秀
其偉功ニ依リテ旗前五拾万ノ大封ノ領スモ秀ト一家
ノ偉勲ノ賞シ壱万六千石ノ弟代ノ賜ヒ其名ノ知ル
称シ下坐郡ノ隠リ三年未已ニ居リ秀ノ其遺村ニ
隠リ住居セシメ黒田ノ家室ニテ城傷ノ傷ケリ今ナル
年十二月一家ハ思ヒ之ニテ時宜ナシ大坂ノ陣ニ赴リ
和成リ直ニ帰陣ス元和元年四月大坂再伐ノ役ニハ一
成又又思之ヲ奉シ出陣ス九月七日大坂城ノ兵庫ノ
帰陣ス仝年徳川氏大坂城ノ攻ムルニ当ルトシテ其ニ

役ノ董ス者ハ速ニ其効アリトシテ一年ノ時服ノ賞ス賞
永ニ年江戸表ニ於テ諸侯ノ帰ル藩ノ家老ヲ[illegible]其営ニ
思之ヲ者ス一年又数百人ヲ率ヒテ其工役ノ董シ後功
シテ帰ル全十四年肥前島原ノ賊蜂起ス徳川氏
其出征ノ命ス[illegible]五十五年正月二十時一年家督ヲ丸忠
之ヲ役ニ其役ニ於テ一年ノ間子一位ノ官階勅シテ[illegible]
先登ス比第シテ乱賊平キ一年女子忠之ヲ信ニ福島
凱陣ス全三千石ノ一家七十ニヲ弦仕シ刑数ヲ賜
鶴ト称シ一位家督シ先祖ノ領シ先祖ノ住ヲ[illegible]老ノ
一年栗山備後利安ノ娶リ二女ノ生ニ男子ヲシテ

二代

芳助兵衛ニ嫁シ次ヲ久野四兵衛宣綱ニ帰ス依
テ外孫宣綱ノ嫡男ノ養子ノ[illegible]ヲ之ヲ一任ト又一年ハ
明暦二年丙申十月[illegible]卒年八十二ヲ出宗福寺境
頭ニ傳庵ニ葬ル法名[illegible]齋休江宗[illegible]

○一任　玉松　三左衛門

久野四兵衛宣綱ノ嫡男ニシテ慶長十二戊申年ノ
[illegible]福岡ニ生ル一成男無シ一任ハ其外孫ノ位ニ養ハ
シテ一位ノ[illegible]ヲ寛永十九年十二年家督ヲ先祖[illegible]
老ト称リ全十八年徳川氏ハ長崎藩復ノ董任ノ宗室
[illegible]忠之ヲ命ス此ニ旧福岡藩ノ三百俵年ノ[illegible]後事任セシモ

ノミニテ一任ノ家モ無ク且其警備ノ事リ主宰シテ宮室ト
怡後セシヤリ一任ハ寛文十三年壬子四月十日致仕ス姪
復ノ別荘ニ閑居シテ其老リ養セ延宝八三年丙寅正月
十五日辛亥年七十博多東長寺ニ葬ル法名長泉
院月峯宗慶ト言フ
一任ハ河内先業之允之在ノ女聚リ子ナシ早ク卒ス依テ
京都ノ人鬼竹長三郎ヲ迎ヘ納レテ継室ト為ス
長男三三郎十五年ニシテ次男吉助家ヲ嗣リ之
ヲ[illegible]ト又長女松子早世シ四男徐助[illegible]ハ第門ト
改メ二十五歳ニシテ卒ス四男[illegible]ハ山家ヲ嗣キ
助

五郎門ト称シ千石
ノ米代リ合ツテ別家ヲ立ツ次女辰子黒田弟十郎起
門ニ嫁ス玉男一致第四男[illegible]太左衛門ト称シ博多
在町ニ住シ一任ノ財ヲ合テ高ハ十万石其子一至林兵
衛門ニ嫁ス家ヲ嗣キテ[illegible]ト称シ

○一致　吉助　隠左衛門　三左衛門

一致ハ一任ノ次男ニシテ母ハ鬼竹氏寛永二十年癸未ニ
福岡ニ生レ寛文十三年壬子四月十五日一任致仕シ家督ヲ
継ギテ先祖[illegible]ノ[illegible]ヲ[illegible]ト称シ

田代

○ 春日

[illegible]

五代

元亨元年ニ夏ノ頃ヨリ相續シ家督相續ス　因老ト十九歳ニ成リ
千代丸ト名乗リ次第ノ一利ト改メ五百石ノ主命ニ成シ
命断テ命家セシム一春元福十三年庚辰四月ニ病ヲ
発シ吉子年ニ三十四聖福寺ニ葬ル法名浄光院却
外一春院ト号ス故ニ次第一利ハ取テ真逸婿ニ迎ル
一春ニ一男アリ三左衛門ト称ス加賀三ノ女ヲ娶リ
○一利　隠左衛門ト義左衛門ト称ス
一利ハ要ノ次男ニシテ世ハ千長興ノ島女勝子ト云フ寛
文十二年壬子三月ニ死ス福岡ニ生ル家ニ一春院ニ復シ嗣キ
ニヨリ一利ハ院ニ命家セシモ取テ家ヲ嗣リ

家督相続　因老ト十九歳ニ成リ
一利　隠左衛門ト称ス
吉子保十年庚寅九月十九日致仕ス嫡子隠左衛門一体
家督ス一利ハ寛文二年庚午七月ニ死ス年七十八
正傳庵ニ葬ル法名ハ清光院孤峰性元居士ト号ス
一利ノ室ハ加賀九左衛門成武ノ長女ニシテ一男一女ヲ生ス
寛文二年ニ継室戒海氏ト云フ一利ニ三男五女アリ長男竹
壽早世次男萬次郎早世長女政子大喜彦左衛門
男子弘ニ嫁ス二男玉松隠左衛門ト称シ家ヲ嗣リ世ニ
六代義作一郎ト云フ　子立義吉左衛門時弘ニ嫁ス

三女豊子早世四女豊子郡九郎門英成ト許嫁シ
姫ヨリ風サスシテ存ス時ニ年十九五女昌子早世

○一[illegible]　誠　玉松　源九郎門　義作

一弟八十利ノ三男ニシテ母ハ継室大海氏正德ニ年癸巳
十月十三日福岡城内ニ生レ享保十九年甲寅五月廿五
日父一利致仕ニ付家督シ先例ニ因テ隠居トナリ義作
一弟ト称ス寛延四年甲戌五月十日四十三歳ニテ
致仕ス三男ノ別荘ニ隠棲ス嫡子ハ家督ス天明
七年丁未五月廿三日享年七十五ヲ傳庵ト葬ル法
名月給院圓成傳庵居士ト號ス

一弟ノ室八並氏四男一女　六
其嫡子ノ妻ニ世セリ七代美作一興ト云長女恵代子早世次女
貞子加藤正九郎門一系ト許嫁シ手ヲ婚ノ成サスシテ
天保元年時年十三歳延子同氏九郎門臣高ト
嫁ス次男ハ左文源九郎門ト称シ家元一興
ノ遺跡ヲ継リ之レハ代義作隆庸ト云四女久子早
世三男惣七郎出テ三浦門ノ養子ニ成リ嗣キ七郎九郎門
一敦ト称ス四男久門早世五女高子早世六女豊子
早世四男勝之郎早世

○一興　家満　玉松　義作

一興ハ一休ノ嬪男ニシテ母ハ並氏元文四年己未五月
十日福岡須屋敷ニ生レ寛延四年甲戌年十六歳ニテ
父一休致仕シ其家ノ嗣リ瑞雲庵ノ家督ヲ相続シ国老
トナル享年二十三年壬午八月五日寛政十年戊午三十四歳
ニ花井氏法名全昌院英巌道俊ト称ス
一興ノ室ハ加茂三郎左衛門一義ノ女子無シ故ニ次第
多吉郎ヲ養子ニ迎ヘリ
○隆庸 始一庸 多吉郎 隆庸ハ一休ノ次男ニシテ始メ一庸ト称ス母ハ並氏延享元年
甲子十二月十日一休内ノ邸ニ生レ寛政十三年辛酉九月六日実

元興ノ遺跡ヲ嗣ク安永七年九月七日失脚 年四十四歳
トナリ 養子 偏宇ヲ娶リ美作隆庸ト称ス寛政
十三年辛酉九月四日寛政十年戊午九月七日 享年五十七歳 正傳庵 法
名ヲ雲翔院設山品宗偏ト称ス
隆庸ノ室ハ伊丹九郎兵衛門一然ノ女勝子ト称ス隆庸ト
三男四女ヲ儲ク 偏男 多吉郎 一寛ハ十三歳ニテ早世ス長女
養子 市蔵 建部氏 通子 実ハ今姫 加茂三左衛門一純ノ女隆庸養母トシテ斯
為五右衛門後親ト嫁ス 次女 屋子 側室ノ女ニシテ吉武
元右衛門ニ嫁ス 次男 政信 実ハ野村太郎兵衛祐俊
ノ次男隆庸養子ニ嗣ク十二歳ニシテ早世ス 四女 里

惠[illegible]早世[illegible]女苔子世ハ例室中島吉十郎ニ嫁ス
三男勇し進一定実ハ四宮孫左門義和ノ嫡男ニ
シテ今旗伊丹[illegible]弘養子ヨリ[illegible]隆
庸養子ニ而[illegible]九代播磨ニ定ハ[illegible]
○清定 初一定勇し進 隆庸ヨリ清定ニ改ム 勇作播磨
清定実ハ四宮孫右衛門義知ノ嫡男ニ而今旗伊
丹九郎右衛門景弘養子ヨリシテ[illegible]定ハ[illegible]
テ養子ニ而[illegible]ハ文政七年戊戌十二月三日四
宮家ニ生レ寛政七乙卯十二月三日隆庸養子ト
ナリテ本家ヲ継ク[illegible]年戊申十二月ニ隆庸ノ遺跡ヲ嗣キ

家督相続[illegible]家督[illegible]四老ヨリ勇作一定ト称
ス文政十三年己卯[illegible]倫宮ヨリ賜リ播磨清定ト
称ス天保十二年辛丑[illegible]院ニ[illegible]ヨリ[illegible]ニ正倫養
子ニ成ル法名浮観[illegible]茶毘紹[illegible]ト號ス
清定ノ室ハ乃チ隆庸ノ長女ニシテ[illegible]ヨリ[illegible]長女[illegible]腰子[illegible]
養子一男[illegible]次女敬子[illegible]右衛門[illegible]倫[illegible]
野村隼人佑倫男[illegible]ハ[illegible]養ヒテ嗣トス之レ三左衛門
一新トス[illegible]年十八ニシテ[illegible]依テ久野次左衛門一篤次
男伊[illegible]印ニ養ヒ長女ヒサ[illegible]ヒサ之レ[illegible]次女之レ[illegible]
トス一男[illegible]ヨリ[illegible]孫ニ[illegible]家老ニ上ル病ヤリ

嗣コトヲ願ハズシテ清定ノ側室治氏ニ男三女アリシ女弥
姫子ヲ養子ニ取リ[illegible]ノ男門陽ヲ娶シ暁ヲモウケシ離別後
務又男女豪子度ハ男[illegible]孫左衛門ニ我知ノ女ニ[illegible]清
定ニ同シ清定[illegible]五右衛門貞明ニ嫁又
五女代勢子[illegible]左衛門尉ニ嫁又長男[illegible]位ニ即
出而久郎家ヲ嗣キ外記奉ト称又次男元八郎之族
加賀内匠徳裕ト称シ養ハシ子ニシテ徳堦ト称又天保九
年戊戌四月嗣子一郎病ヲ嗣コトヲ願フ故ニ徳堦宗家
ニ復シテ嗣子トヨリ三左衛門一郎ト称又之ヲ第十代
播磨博[illegible]ト云フ六女田鶴子初メ斎藤嘉右衛門ニ嫁又

故アリテ離別シ後[illegible]部孫左衛門(後武光)自弟ニ嫁又

十代 ○博整 初一郎 文八郎 半之丞 三左衛門 播磨九 時心 四度播磨

一世章

博整ハ清定ノ養子ニシテ母ハ側室治氏文政元年戊寅
十月五日福岡ニ生ル全三年ニ卯十二月十八日全族加賀内
匠徳裕ト養ハシ[illegible]天保八年ニ同九月七日家督ヲ継シ
ニ亟徳堦ト称シ同人ト九月全九年戊戌四月十五日家ヲ
復シ清定ノ嗣子トヨリ三左衛門一郎ト称又称十年
度十四月五日二十三歳ニシテ清定ノ遺跡ヲ相続シ家督
[illegible]国老ト称シ[illegible]ニ卯九月

[illegible]

加賀殿武の嗣き後廣之次女八重子母
同し吉成林[illegible]長州藩[illegible]
母公し四女清子母公陸軍大尉森部静之助
博[illegible]黒田物左ヱ門直倫長男益太郎義倫
長女サヨ子ヱし配ス世ヨリ十一代義作一衛ト称ス

○一美 初一武 一衛 一義
益太郎 長門大和 長門 西度大和 義作 一義
聽宣 西度一義

一義ハ黒田物左ヱ門直倫長男ニシテ母清子敬
子ト称ス文政十二年庚寅八月十三日福岡藩士弘化
十二年十月十日ニ生ル博[illegible]ノ養子トナリ三左衛門一通ト称ス

嘉永五年壬子九月十五日用勤ヨリ先格ヨリ知行八百石ヲ
給ス安政元年己未二月ヨリ家老ニ任シ長門守ト称
称ス慶應元年乙丑七月勅旨家督相續義作ト改
称ス二年丙寅七月幕府再征長ノ軍旅ヲ発シ義作
藩兵ヲ統率シテ遠賀郡底井野村ニ屯営ス幕
府総督小笠原壱岐守陣ヲ撤テ遁逃行ヲ知
ラス依テ義作モ兵ヲ撤シテ旋軍ス明治元年
戊辰十二月十五日藩主義作ノ如常ヲ養シ建山五万
石ヲ賜フ仕福岡藩大参事一義
ト称ス二年己巳十月十五日辞表ヲ呈ス四年辛

未三月免官仰付五月ホ七日迄隠し養子一雄相
續又仰付五年申ノ月舊福岡藩大参事従職し
藩政改革ノ報効トシテ紬壱反下賜ス仰付ル
次八月宗室黒田家ノ顧問トナリテ上京ス仰付ル室
黒田長溥武功ノ親書ヲ授ク
其ノ家祢之儀ハ祖先如水長政以来世々當家ノ
元老トシテノ數百年ノ間猶一日ノ如ク維新廢藩ノ
今日ニ至レト純忠ヲ以テ情交依然トシテ昔日ニ異ナラス
愛ニ黒田家柱石ノ輔翼也依之家政ニ関スル諸
今般尚又昔元ニ依頼イタシ置テ同家ノ下縣代リ

差別無ノ當家ノ為メ都合宜シキ様毎事精々心
添有度此段深ク頼存候事
八月廿日（明治八年）　長溥　印

黒田一美殿

仰付ル
一金壱千疋南騒擾ノ際書状献納金ニ付
為其賞木盃壱個下賜
仰付ル
一金八月四日西南騒擾ノ際
盃力不少為其賞太政官ヨリ白絹一疋ヲ下賜ス仰付
三十年十月七日病没官ヨリ三十八崇福寺境内ニ神
葬仰付ル
一黒田長溥ノ長女千代子ニテ三日ニ女子生ル

長女母子養柳川藩主三門立花飛騨樹ニ嫁ス長男一義
トシ一雄ニ養ハルヲ兼家ト稱シ藩主ニ仕フ次女
為子（黒田）直朗ニ嫁ス次男某早世
從室ハ野村隼人祐運ノ女トス一女リセムエトリ次女律
子トス十四歳ニ嫁ス次男七郎女ハ神屋氏早世三男
保光四男帝次郎五男近男（律）女ハ家居ス
○一雄（一蔚一秀一雄 秀然 庸之丞）三位弟門 雅楽
一雄ハ博整公第ニシテ天保十五年甲辰五月六日後
岡藩内ノ邸ニ生ル慶應三年丙寅四月五日一ヲ以隆興
子トナル文三月十九日用勅トナリ三位弟門一秀ト称シ後雅

樂ト改ム明治四年辛未五月廢藩家督相續シ一雄
ト稱ス文十年西南騒擾陸兵有リ大砲（野戰砲）
三門及洋銃三百挺ヲ献納ス為其賞銀金三千圓
下賜ス
（一雄）先室ハ黒田市兵衛ノ名ノ女ニ女ヲ生ミテ夭ス
長女静子早世次女菊子黒田峯松ニ嫁ス長男一義
從室黒田忠九郎ノ妹ニ女ヲ生ム
（一義）長男（義一）養ヲ兼家ト稱ス
○一義 通七郎 一義

一義ハ一男ノ長男ニシテ母ハ乃チ傳蔵ノモト女チヨノトス
萬延元年庚申七月九日ヲ以テ明治三年二月右家
相續ス一義ハ後ヘ

舊福岡藩
國老 黑田一葦遺蹟

若し印刷者の誤にあらざるか

○筑前福岡藩黒田重賢遺蹟

○重賢家扶藩の待遇

重賢八年姓加藤黒田に改賜されて播磨守博整と稱し一

重賢は再致仕後の寛政天保十四年庚寅五月年齢七十三にして

父清定の遺命により相續し福岡藩主となり老力六年

計四箇年にして筑前國糟屋郡に移り米邑

に居り出て福岡藩治に國老より祖先家扶保優

し藩政を主宰し福岡藩の重任なれ長崎の藩領を

於ル其警備の事を主宰し重賢の代に於て長崎

奉行視察のために出張せしこと前後十有五回に及ぶ長崎

蓋備ヲ督シ[illegible]國ノ藩政ヲ統ル、顛末ハ一其キノ
自聴ニ於テ其楨根ヲ揭ケシカ如クナリシ、又々祖先美作
一成ハ幼名ヲ王松ト呼ヒ、天正廿年中ニ於テ藩祖孝高由
縁アリテ其父加藤又左衛門重徳ト約束シ取リテ以テ己カ
子トシ、殊ニハ之ヲ養ヒ成セ、トス故ニ玉松ハ幼少ヨリ黒田
姓ヲ冒シ、子孫世々之ヲ襲ヒテ継承ス、玉松成長シ
美作一誠ト称シ、勇武絶倫[illegible]實ニ文禄慶
長ノ征韓ノ両役ニハ長政ニ従ヒ兼[illegible]長政
其衛隊[illegible]シ殊ニ[illegible]
[illegible]又々天正紀降元和ニ至ル[illegible]長政[illegible]
日向ノ耳川ニ豊後ノ合戦[illegible]関ケ原ニ合戦ハ[illegible]戦
シテ遂ニ其擾乱及正ノ勲功ヲ遂ケシ、長政説前
国ヲ領スルヤ其功ニ因テ壱万六千石余ノ知行ヲ賜リ
子孫之ヲ継襲シテ三左[?]ノ采邑ニ居リ出テ藩
関ノ藩政ヲ統轄シ、其時警備ノ事ヲ主宰シ、以テ藩
主家ト終始共ニ抑モ藩治創業ノ際老功宿臣ノ
万石以上ノ采地ヲ領シ一家ヲ係キシモノ尠カラサリシモ
其十分ノ九ハ其後ニ於テ衰廃シ、獨リ一成ノ家ノミ其系統知リ
保持シ(其家ヲ継續シ)藩主ヲ補佐シ、藩治ニテ[illegible]傳統セル
コト実ニ二百七十三年ノ久シキニ及ヒ[illegible]於テ一其キハ其十代トス
ナリ

○一其キノ才揮ヲ抱(卜懐)(及侍事ノ[illegible])

一其キ[illegible]資性及ヤ深沈豪毅、人ト交ル[illegible]ヲ設ケ久[illegible]
[illegible]能ク交リ常ニ[illegible]良リ[illegible]己カ任トシ
仰レ

概

以テ備リ習シ内福岡ノ藩政ヲ改リ統セシ顛末ハ別冊ニ

人ア事蹟ナリシ又久玉ニ祖先ヲ以テ藩ハ天正

黒田長政ヨリ以来士卒ヲ率ヰテ子

藩祖孝高由緒アリ其父加藤又右衛門ヲ重臣トシ約束ノ故ヲ以テ次テ己

カ子トシ殊ニ之ヲ養育セシモノトス故ニ成長ノ後其ノ日ニ至テ許サレ

其ノ姓ヲ許シ継レセシ

岡ノ藩政ヲ統轄シ也時警備ノ事ヲ主宰シ以テ藩

主家ト終始セリ抑モ藩治創業ノ際老功宿臣ノ

万石以上ノ采地ヲ領シ一備アリ係ケシモノ尠カラサリシモ

年ナラスシテ多ク廃シ独リ一成ノ家ニシテ其系知リ

保持シ其家ヲ継續シ藩主ヲ補佐シ藩治ニテ献替ヲ備ヘ

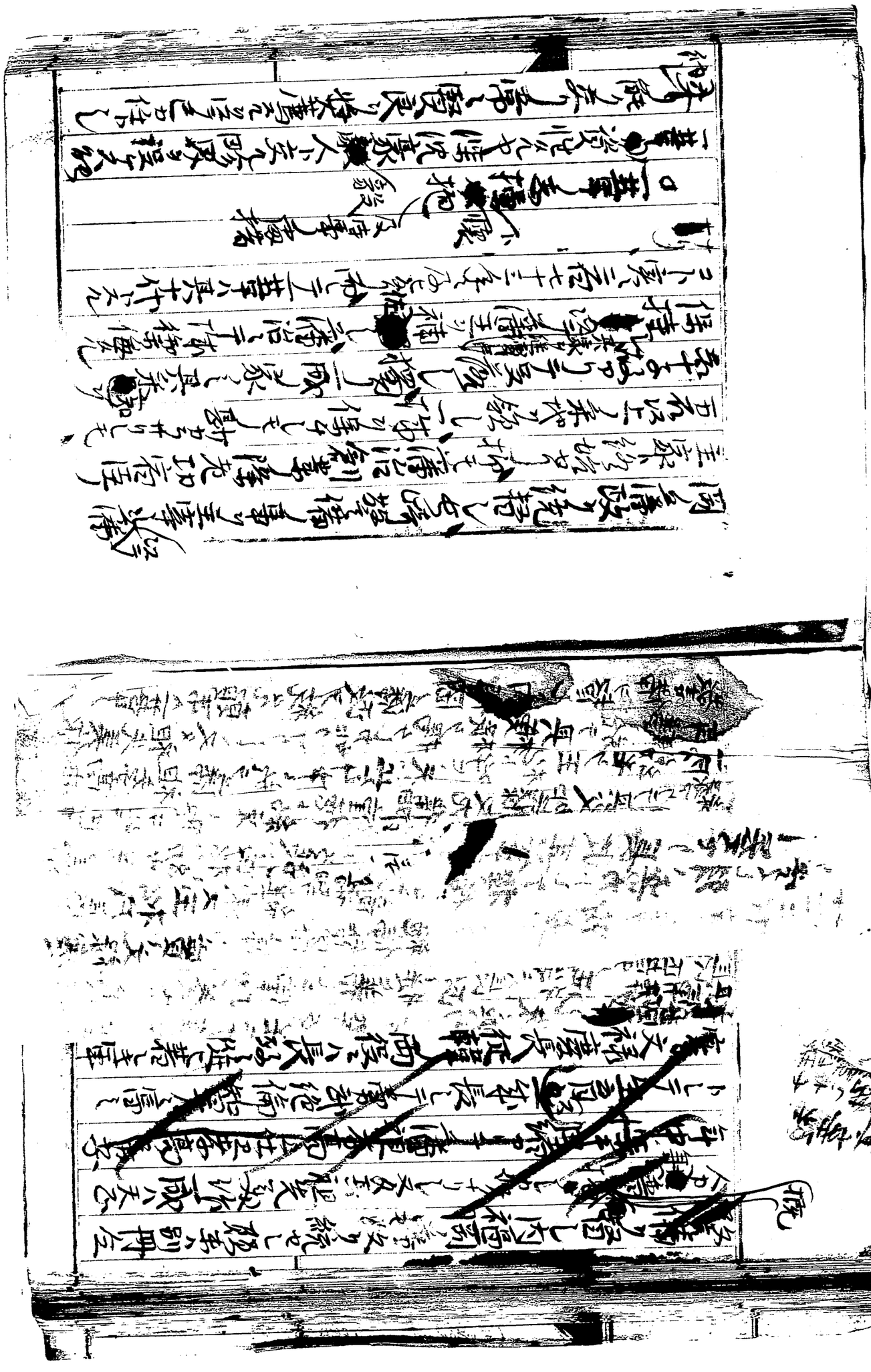
コト実ニ二百七十三年ニ及ヒ維新ニ至テ一某ハ其十代トス

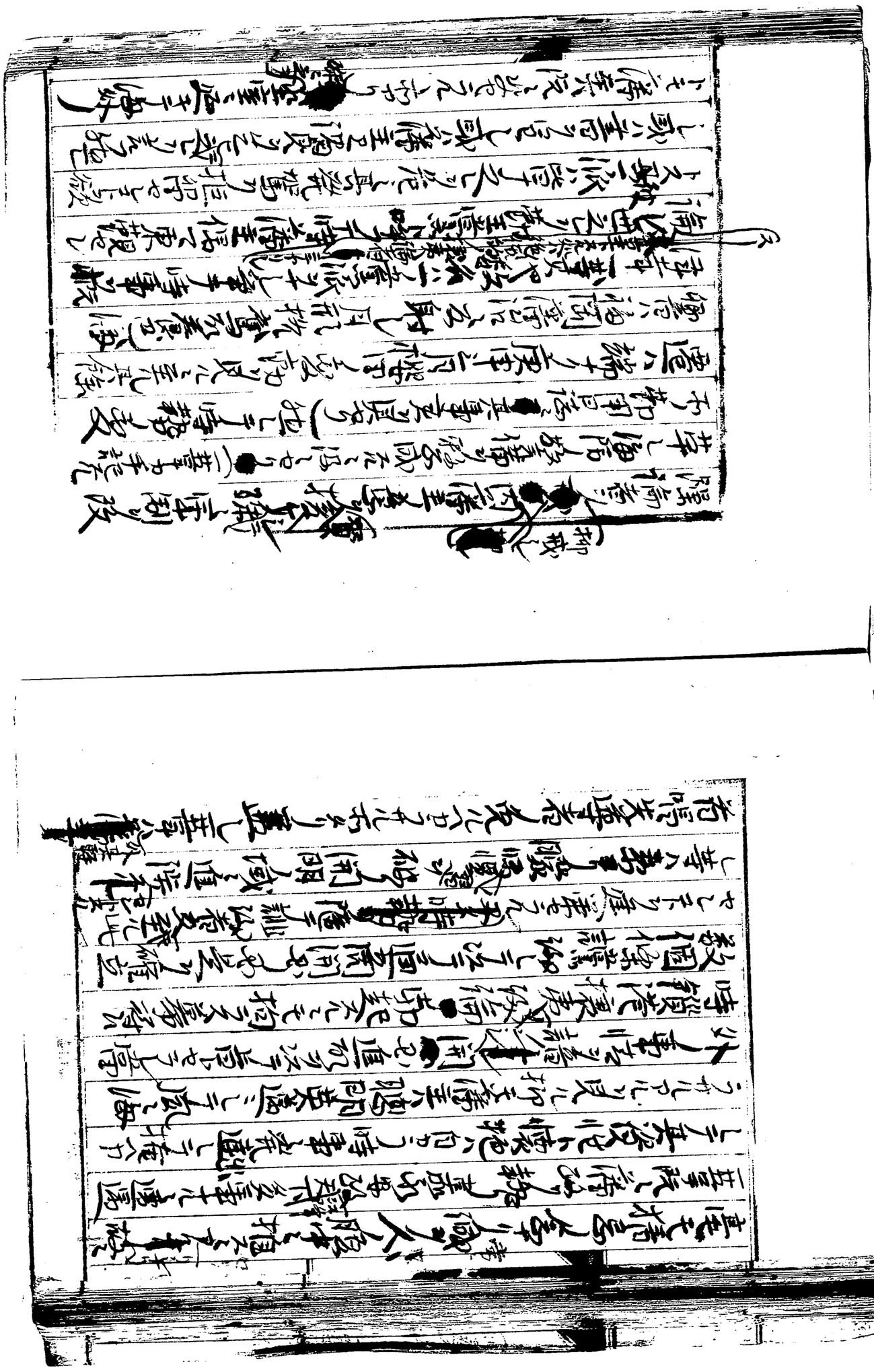
ナリ

○一某ノ遺擅抱 下懐 及事ノ審描

一某ノ資性陰沈豪毅人ト交ル眼界ヲ程ケ久絶

時事ノ能ク知リ常ニ賢良ヲ將薦スルヲ己カ任トシ

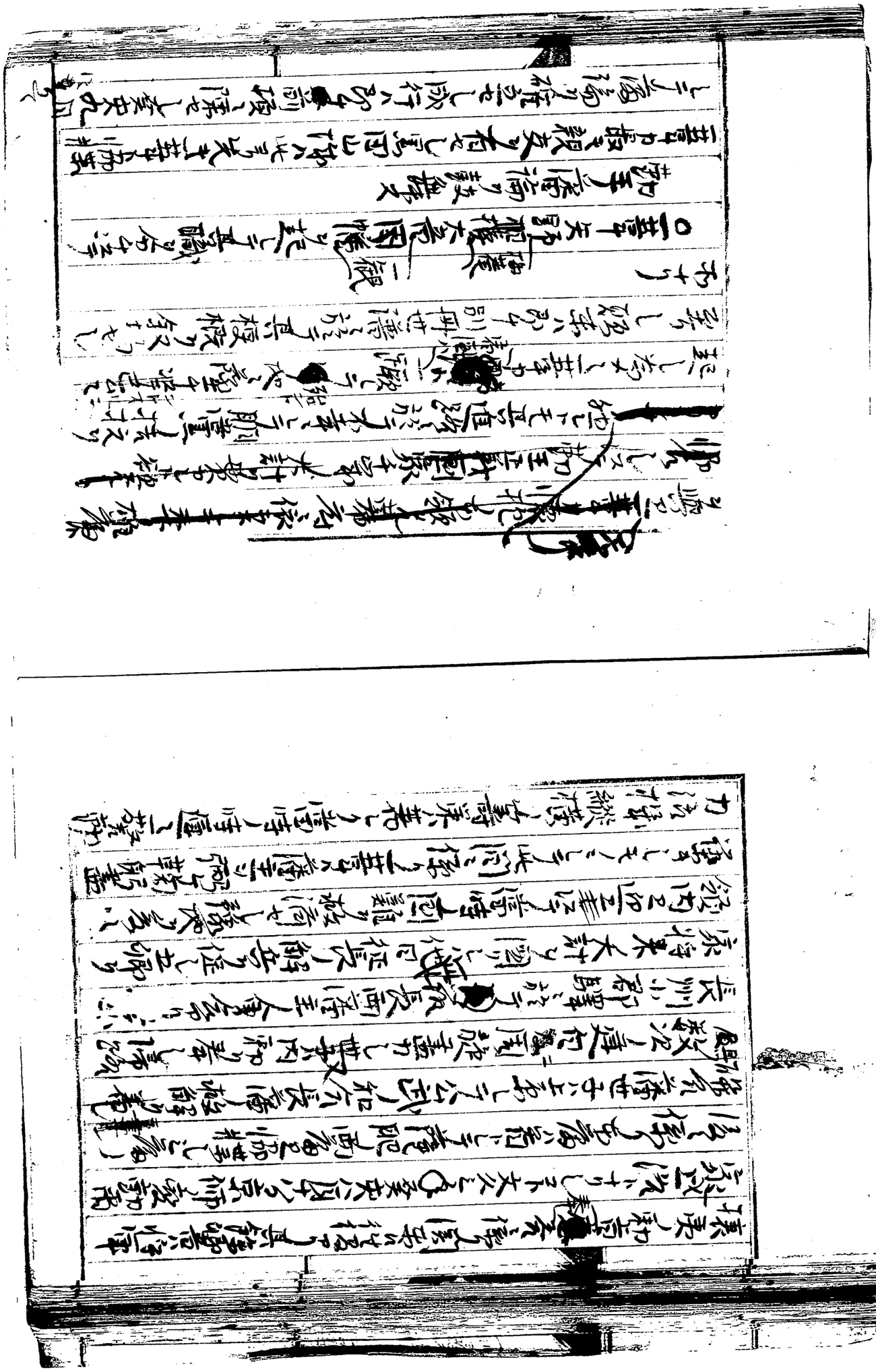




時情ヲ陳シテ之ヲ説諭シ親書ヲ発シテ之ヲ
撫セラレ遂ニ此間一藩ハ彼ノ派ニ招キテ其
志操ヲ賞シ諸藩主ノ之ヲ説キテ其軽躁ヲ戒メ
撫恤ヲ厚クセシナリ（一藩ヲ手足ト為ス）然トシテ其一
派内部ニ於テ市村閑右衛門ハ上策ヲ直ニ筑前ヲ
ノ誘ヒ藩主ノ愛家慶島義ヲ説キテ之ヲ内訌
ナセシ変事ヲ生ス而シテ其内訌ヤ藩主ノ東
覲ノ帰ルニ先ヲ十日ヲ最モ親友セシ薩摩ノ藩
邸ニ一夜留宿シ帰邸ノ途ニ就ク（ノ途ニ就ク）ノ際ニ
ノ藩主ノ意ヲ事トシテ一藩ハ陣ノ彼ノ派ヲ軽躁ヲ
情ヲ以テ其事ノ為ニ藩主ノ身ヲ危ク為ス所ノ
コトヲ恐レ藩主ノ陸路伊集院ハ内浦ヲ一藩ハ伊集
院関ハ陸路ヲ行ク（ノ）ヲ書翰数通ヲ送リ
シナリ藩主ハ藩ノ市作等ヲ藩法ニ犯セシ罪ニ問ヒテ
其一家ニモ処刑シテ東上シ豫関ノ如リ時事ニ乗
ジ藩庭ヲ改シ且ツ中将ヲ直ニ藩ノ政事ヲ持
ノ取ケ為ナリ帰城セラレ一藩ハ彼ノ派ノ時ハ
過激ニ陥ルト雖モ其志ハ大ニ為ス所アリ
主ノ庭御ニテ其ハ罪ヲ赦ス一藩ハ彼ノ派ヲ軽躁ハ
抑制スル不アリシモ代ハ後ノ藩閥ニ利用セラレ欲ス

アリシヨリ其事実ハ其手紙セシ勤王ノ活ノ振舞
[illegible]テ之ヲ[illegible]ル[illegible]蓋シ其事ヲ懷抱
[illegible]藩主ノ用ヲ進ル[illegible]ノ登擢シ全ク一致
[illegible]今内部備ノ充実ヲ整ヘ外援ノ初志ヲ奉[illegible]
幕府ノ稗政ノ匡正シ其ヲ是ヲ確立セシメ幕府内
リテ勤王ノ志ヲ欲シ[illegible]ト欲スルヲ知リシテ[illegible]
後幕政ノ失[illegible]依テ之ヲ是ヲ[illegible]可カラ
サルヲ者ハ[illegible]隆長ヲ代ル[illegible]ト[illegible]
[illegible]ノ[illegible]出ス者ハ[illegible]勤王正義ノ[illegible]
ト欲スルヲ[illegible]故ニ[illegible]幕府ノ[illegible]

藩侯ノ問答ヲ[illegible]シ隆七西国ノ[illegible]
シテ以テ其事ヲ[illegible]微セシ[illegible]故ニ彼ノ勤王[illegible]
[illegible]シテハ痛リ其過激ノ戒メ[illegible]事ヲ[illegible]
セシメ以テ復ヲ英[illegible]ヲ利用セ[illegible]
佐幕ノ派ヲ[illegible]セシメ其人ヲ[illegible]
如シ独リ西[illegible]
彼ノ過激論者ノ[illegible]
懷抱ノ如ク[illegible]
侍[illegible]



薩肥後之国ノ諸侯ヲ上京公武ノ形勢ヲ
為ノ和解仕候長州藩主ノ命令ヲ以ノ大仏ノ後軍ハ
蓋シ其年等ヲ懐抱ノ者領ヲシテ微意ヲ達セントメレト
シ其ハ山城ト共ニ倍時ノ間頃ハ米英佛蘭倍
陸ヲシテ長藩ノ義ヲ進ンテ摂海ニ迫ラシメ攻撃
報ニ接シ或ハ七藩ト諸侯ヲ国関海陸ノ狭隘
シ或ハ天幕ニ進白ヲ人主ノ一致奉和攘夷ヲ
意望シ長崎ノ警備領海ノ守衛ニ任セシ
時勢ハ端ヲ発シ元治元甲子七月十九日京師ノ騒擾ヲ
起シ陸ヲ幕府ハ征長ノ命令ヲ旅ヲ発セシ時変ニ遇

為ニ
其ハ山城等ト共ニ敵ヲ誘ヒ進行ハ名ヲ業業服
従シ傷シ豪傑ノ心ハ非常ニ激昂シ騎虎ノ勢
ハ奉シ黒田山城ト獲斗セントシ見ルニ至ル
是日ニ世ヲ奉シテ上京シ七藩ノ秘解弾
藩ノ命令ニ面接シメ市街屋々七藩ノ内使ヲ
シテ諸侯ヲ諸国ニ於市外ニ出ル狭隘
セシト対峙シ
西征長ノ幕命ニ接シ七藩ト度戦ノ
同シ藩ノ発始セシ所ハ諸侯ノ命令
及討刑殺ヲノ陸海ノ山城ハ

ト事山ヨリ先キ一芸ハ高陽ノ撫サレリ恢嘆シ大意
一敵矢野梅庵ガ[illegible]起シテ後陽セシ
メシコトヲ思ヒ高ヒ主ハ[illegible]尺ニシテ真事[illegible]一敵先ヲ
起シテ因幡ト結ビ梅庵ヲ入リテ相撲ト称シ苦正硯
ヲ命ジテ勅主ノ座陽ヲ振起セシコトニ伝ヘシ
從来全列ハ国上信濃ヲ川讃岐久野ノ介ト
因幡相撲ト其所見ヲ殊ニシ氷[illegible]ニ信濃
等ハ神ヲ拂ヒテ其ノ孫ヲ迎キ所ニ同別数名ト協議ニテ
一芸ヲ[illegible]力捷勝セシ高陽ヲ出ル不ハ高ヲ花ヲ元ノ
ヲシキモノヲ[illegible]ト見做シ之ヲ指摘シ[illegible]高市毀言[illegible]
之ヲ読ミ誤ル

陽ヲ故ニ至リ[illegible]ノ他シ芸一芸ハ毫モ挫撓セ
ヌヲ因幡相撲ト[illegible]天間[illegible]ハ征長ノ事ヲ
慮シ外蕃ヲ向ヒテハ外患ヲ防ギ[illegible]陸ヲ除ク内ニテ
ヲ動カスノ不利ヲ[illegible]内長ヲ対シテハ柔順従
慎シテ其ノ[illegible]待セテ其ノ[illegible]情ヲ物ニ[illegible]
リ[illegible]メ[illegible]ニテ[illegible]ヲ[illegible]ノ[illegible]
関ヲ其ノ端緒ヲ[illegible]ハ即チ
征長ノ解兵ヲ[illegible]ヲ[illegible]ノ大件ヲ
果行スルニ至リ其ノ[illegible]次項ニ掲ク
○征長ノ解兵ハ[illegible]及ビ宰府内[illegible]

征長ノ解兵五藩ノ西渡ノ果行シ第テ江戸ニ在セ西藩ノ執
隅ノ偶停セシ徒ノ為セシハ即チ其事ヲ提揚セシ我
福岡藩ノ往事ナリトス先ツ征長ノ解兵ニ方リ説ヘ
シ抑モ甲子七月京師騒擾突起セヤ其ハ当時
薩藩ノ江戸ニテ先ツ加賀前田書記成稜等ノ両隊ヲ
五百ノ精兵ヲ率セシ桂右衛門ヲ発出セヤ之ヲ追テ
幕府征長ノ大令ヲ発シ諸藩ニ接シ其発船ヲ
国境ニ出ヲ待ツシメ且ツ書ハ藩主ニ限リ
シテ時期ノ延滞ヲ責ノ秋船ノ遠市ニ先ツテ右等用
掛吉多国事ヲ以テ特旨ヲ会セ急ニ京摂ニ出テ

薩藩長州ノ雄藩ト協議シテ兵庫ニ入ルヲアラシメ会時ニ梯
団角右衛門建部武彦等知中兵若干ヲシテ嘗テ兵庫
ニ在セシ岩国藩ニ内使シ所ニモ藩ニ内先ニ入ルヲアラシ
メ又又国人加賀前書ハ藩主ノ特旨ヲ奉シテ
広島長ニ侍使シ尾張藩ニ説クニモ藩内ニ
異シ目下外事多端ナリシ日ニ本ノ邦内ニ於テ大ノ
動スヲ利ノ説ヲ和トリシ後ハ之ヲ素納シ生所
五帰ノ事ニ藩ニ達ノ之ヲ肥後藩ニ示ス五藩ハ
預ルコトヲ余セラル筑前ニ藩時モ藩兵隊激昂シ五帰
西渡ノ峻拒シテ拒ヲ以テ其事ハ行ヲ遂ニ

自形陸奥守り養敬に特命し長として其相迎ふ而て
陸ラレム為し月形早川ハ七番隊士内と交迫を有せし
ヲ以テなり（此ヨリ先七番隊名士高杉晋作ハ其藩勤王論ヲ唱ケテ
福岡藩ニ来奉ス月形等ハ先ツ之レヲ保庇シテ会志郡
村陽第ノ山荘ニ匿伏セシム高杉徒ノ之ヲ等ハ刑ヤラレ
ムルヲ図キ藩士ヲ帰ヘシメ敬ハ藩主
ニ復命シ手間保シテ動員ニ藩送セシ事実別ニ生リ
高杉ノ来奉ニ係リテハ実ハ等ハ相接等ハ陰ニ会志ヲ
シ舟保庇セシメタリ（此ヨリ）月形早川ハ既ニ長ニ帰
盡力シテモ藩隊士ノ激昂リ鎮キ難ク五卿モ亦タ其西

渡ノ意リ殺セラレ然リ而シテ幕吏ハ五卿西渡ノ上ハ之レヲ
出藩ニ配預シ名目ノ監視セシ為ニ在リシ等
等ハ之レヲ聞キ所ノ如キハ決シテ武門ニ忍ヒ難キコトニ
ニアラス必シモ之レヲ宮島待遇帰藩ノ手ヲ図
旅スベシト言フテ藩吏ニ依テ九月末頃再度藩邸ノ
密出ヲ計ラレ高杉ハ仕役シ五卿ノ内侍ヲ申ス
事有リ全富五藩相守衛ノ名ヲ以テ尾張徳川
又ハ之レヲ特認セラレ此ノ間旋事件ニ係リテハ等ハ
福岡藩徳川ヲ持シテ之レヲ唱ヘ故ニ藩士吉井
幸輔肥後藩長谷川仁右衛門等ハ敬ヲ図リ会津陣

より福岡に帰り子一葬寺に密葬し而して之を佛
世子は大音因幡より従世子倉に騎行し主前副將と面
会せんとせしに前副將は先り之を容し親ら薩島に
帰せり尾張藩士は前副將と薩島に依て後者に其事を
太宰府の内高り特遇せらしと云う藩士尾張
後者は所知一万石長し解兵を以て全せり此し甲子十二月九
七日ノ日トナリトス翌乙丑正月十五日五卿は太宰府より
領内筑崎宿に着せし宇佐郡赤間に館し太宰府
の旅館に僕を俟ち合三月十三日無恙太宰府に到
王院の旅館に着せしに全高アリテ次て五藩相

守衛に就トナリタリ其顛末年譜に概略せしが如し
一葬儀論を励し五卿の上坂に護送スベキ
幕命を防ク
五卿既に長藩より領内に太宰府に移轉し全寓五
藩相互に守衛を蹟て幕府に其全寓を撤回し五藩配
預スベキの命に従て張家に赤間に其全寓特認解の一葬
等に之を聞キ甚の其の幕命に無情の憤慨し且の屋張
家の指揮に反抗の意を藩論の奮と其余全を拒
却し五卿の守衛の誠を除怠を好し薩藩西郷吉之介
其藩余を以て上京の途路太宰府に過キリ葬儀一葬

八之ヒ直接ニシテ和睦ヲ上文ヘ西郷ハ藩主ヘ諸見シテ秘
密ノ議ヲ上セ且ツ月形洗蔵等ヲ同伴シ共ニ上京シテ為
スヲ以ヘキコトヲ乞フ然ルニ當時月形洗蔵(ハ上京セシ)難キ事
故アルヲ以テ一策ニ藩論ヲ以テ今義八稽九郎広川佐五右衛門淺
香市作早川養敬藤崎衛五名ヲ撰抜シ西郷ト同行シテ
上京セシメ(鄙ニ先ツ義八等ノ行程ヲ発途)五郷ヲ五藩ヘ分
ヒ幕命且ツ屋張家ノ指令前後者相セシコトヲ質サムム
然ルニ義八等ヲ屋行セシ所後水田浪士剛之部左
郎長藩四奇兵隊長。

赤稱武人(當時太宰府ニ流竄ス)大抵ニテ幕吏ハ捕
縛セラレシ事ヲ生ス(ニテ時ニ京官役大宰兵部ハ
ヤリ二隊一移(藩主ノ新風)事義家
島ヲ関ヒ一意ニ佐幕論ヲ執リテ国ヲ處ス
其等ノ藩論ヲ左ハ不ル若シ陰ニ兵部ハ其出來
事リ奇貨トシ密カニ藩主ニ建策セシ内訌ヲ起ス
為メニ義八等ハ上京ハ長州ノ為幕府ノ黄尾ヲ振シ
其等ノ執ル所ノ失処ヲ致スコトヲ待サルノミナラス兵部ハ
直ニ長ニ帰国シ義八等ハ稽ニトシテ帰国シ来
其等ハ之ヒリ間ニ支々兵部ハ安快ヲ憤リ為ニ兵部ニ

下ヨリ余[illegible]主馬[illegible]主馬[illegible]
シテ左伯ハシテ上京リ[illegible]此事ニ依リテハ代ニ不何
偶ノ内江リ[illegible]スニ至リ又頼朝次項ニ於テ述フベシ
偖テ將軍家親ウ進発シテ再伊長ノ宿旅ノ発シ
長谷主水ヨリ大ニ[illegible]ト合時ニ幕府ハ五郎[illegible]
[illegible]ケリ解キ[illegible]復逆スヘキ[illegible]
[illegible]ノ乱[illegible]ハ益シ熱烈シテ長極ニ至リ[illegible]
河上敦国等ハ内別[illegible]閑ニテ内作忙リ上セ[illegible]主上
親宇ヲ[illegible]コトヲ要ス[illegible]主ノ[illegible]論ハ[illegible]

隔リ[illegible]若シ伯幕派ノ主ヲ得ルニ至ラバ[illegible]幕
府ヲ[illegible]迎ヘ[illegible]其合ヲ[illegible]テ五郎ヲ復逆ス
ヘキハ必ス[illegible]ノ事ナルヘシ蓋シ[illegible]ノ懐抱ノ如ク
至[illegible]ノ[illegible]ハ之レ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]四面皆ナ楚
歌[illegible]佐幕論アラカルナキ[illegible]院[illegible]ノ苦境ニ
陥リ外太宰府ヲ五郎ヲ守護シテ押送ノ防御ヲ
為シ内退隠者ノ利[illegible]ヲ防キテ[illegible]陽挽回ヲ
講セシハ一[illegible]ノ手腕セシ勅用ニ法ナモノニ又[illegible]
[illegible]銀ヲ又[illegible]テ當時ノ[illegible]難苦楚ノ情状アリシコトヲ
見ルヘキナリ此陰ニ又幕府有附隊[illegible]但馬守ハ[illegible]

乗り海岸ノ祝宴ヲ催シテ鈴内又太宰府国宮ノ五郎ヲ使者トシテ太宰府ノ風浪ヲ行シメリ五郎ハ此ヲ敬ヒ聞リ間カシ且ツ進退リ安セラシ隨從諸士ハ安死防戦セントシ薩摩ハ農島後ハ伊ヒテ其ノ難リ辞セントスル間カリ隨從士ハ手荷物モ取行ヒテ其ノ人民ハ騒然トシテ奔走ス萬代十五郎ハ急ヲ告ハ騎矢野和揖ヲ知ラシメテ其ノ騎馬ヲ乗ラシメ和揖ハ直ニ其事ヲ以テ入セシ又月ホシクノコトヽ又テ侍一其ノ病ヲ引籠リシモ直ニ出館シテ藩主ヲ密侍シ痛リ其防御ヲ警ヲ加ヘ一其ノ意ヲ

（釣り義し一其ノ意ヲ）

交ヲ又シテ薩州ヲ藩シ差ヲスコトハ我藩ノ西国ヲ立又又其リモ為ノ對シ何ノ間カアル依テ他ヲ但馬守ヲ接シテ其引渡リ拒ミ事ヲ正ニ為ハ安藩ノ兵ハ防御ヲ為ヘシ為シカ一大事ヲ表危殆ハ其ノ之シリ防御ヲ為ヘシ為シカ一大事ヲ表危殆ハ其ノ

接近セル已カ未已ニ来ヲ奉迎シ一其ノ手和カリヨテ之シリ住藩シ差スヘシト云フニ生シリト依テ萬代直家ハ一其ノ和揖ヲ帰宅シテ其ノ事ヲ申ス五郎ハ隨從士ノ心リシテ安セシメシト一其ノ前後ノ藩ノ信来ヲ騎行シ一手ノ兵ヲ随伴シ其ノ矢

竹ノ要害ヲ視察シテ四囲ヲ巡リシハ蓋シ長後ヲ
備ヲ為シカ為メナリシナリ幕吏塚原ハ間諜トシテ之ヲ
ヲ知リ久モカ或ハ藩吏易セシモノカ遂ニ來タラシ依テ
太宰府衣モ布又無事ニ過シ其此等一藩ノ憂
動ハ島々幕府ノ嫌疑ヲ招ク和ナリ又対者ハ之ヲ
ニ乘シ種ニ洗シ藩ヲ放ル長浸潤ノ漸ル
一其年八月藩主ノ遣責ヲ得タ遂ニ擯斥
出国閉ル最寄ノ衆ハ之ヲ聚ルニ其年ノ五月
急難ヲ救済セントスル熱情ハ溢テ江戸幕府ノ忌
諱ニ觸レ江戸ニ召ヒ又原田ハ遣ニ叙セシ

加ク

福岡藩論頗変後シ一年擯斥出閉セラル
此ヲ先キ一年八月京畿役大意其部ヲ一変佐幕論
ヲ執リ藩論ノ一ル不ル障礙ヲ憤リ急ニ席ヲ辞シ
閉人吉田主馬ヲシテ交代トシテ上京ス主馬
出発ニ臨ミ藩論方針ヲ先ツ藩主
ノ意ヲ問ヒケ札ヲ江戸ニ指揮セシモノヤ左ニ掲ス

吉田主馬伺書

第一條　従来長州ヲ為国旅ニ来ル弟将軍家ヲ進
発ス藩人数ハ国許ヲ相揃フ事ヲ俟ヘキ為ニ

右ニ係リ當藩ヲ之シテ面スル方針如何

付札 此節御直発ノ儀ハ皇室ノ御為メ不可如此先ノ

接拒ミ申シテハ建白可相成筈ナリ

第二條 奉勅攘夷ノ件ニ係テハ先ヲ未数四建白

アラシシ玉今日ノ時勢ヲ鑑ミ攘夷ノ都合モアリ

是ニ方針如何

付札 奉勅攘夷ノ儀ハ当今ノ急務ニ付クヘキモアラス独リ共ニ藩限

リノ攘夷ハ其久不可如此絶迄モ全国一致シ内外

備ノ充実ヲ期シ以テ外国攘夷ノ挙行スヘシ

但公武ヲ建白ノ趣旨ナリ

第三條 五卿方ノ動静若シ幕吏ヨリ尋問セシ時ハ

如何ニ答フスキ是ヲ五藩ヲ配分スヘキ幕令ニ係リテハ

如何ナル方針ナルヤ

付札 若シ尋問セハ藩ニ実ニ可相成又分離ハ

初発ノ特旨ヲ踏ミ従来通リ當藩ニ

藩ニ同居アリ五藩ヲ以テ守衛ス但シ分離シ難

事快ハ五藩ヲ安員ヲ出シ上京シ実状ヲ

第四條 大坂ニ於テ開上都太政官布達式人ヲ撰セシ由

右ハ幕吏ヨリ代代藩ニ通ヲ為サハ如何ニ

付札 不知ト答フヘシ

前ニ掲ケシ吉田主馬カ上申ニ陰シ同書ノ附札指令ニ
而一藩カ捜索セシ當時藩論ノ崩壊ヲ知ルヘキ
ナリ然レトモ兵部ハ其交代ヲ行ハサルモ亦ヲ二藩
一揆又代ヲ密謀セシ事ヲ聞知シテ間諜カ如シ依テ藩ハ甫
後兵部カ下ル家ヲ兵部新帰ヲ以テ二藩一揆ヲ承等
親書ヲ齎ラシテ藩論ヲ刺撃スル迄ヲ除
卿者ハ一藩カ意ヲ体トナリ藩論全ク覆傾スル事
ナリ此ヲ以テ浦上数馬等カ毀誉褒貶ハ藩論ニ
一藩ノ人心ヲ揺動シ吉高ハ從ヒ知ラスカ偏ニ迷フモノ
ナカラサリシカハ一藩ハ大ニ之ヲ憤慨シ自カラ奇偶ノ家

老

同名ヲ以テ意見書ヲ捧テ藩主父子ニ上ル
其親書ヲ以テ吉主父子ニ書スルモノハ既ニ長文ニ亦時
事ノ至ル所ヲ論シ藩ノ明達ヲ抗ノ為ニ裁而リ
毀傷スル為ニ藩去リ藩ヲ去リテ江戸ニ回ル之
毒ハ公義ノ一和海内ノ鎮静ヲ以テ藩ハ之ヲ目
的トシテ時事ヲ変移スルハ即チ天幕ノ為メニ盡力
スルニアルハ其故無ノ意志ノ詳嫌疑ヲ拘泥セス而明正
大ノ心底ヲ以テ其思慮ヲ貫カシコトヲ欲ス依テ之
ヲ一藩ニ公布シテ其去就ヲ一定セシ[illegible]メントス
ルヲ欲スルヲ以テ此ヲ為ス藩政ノ基本ヲ一藩ニ

公布スルノ一問題ヲ割シ
府ノ嫌疑ヲ招キ藩ノ危殆ヲ
来リ孫子数回ニ渉リテ
セラレシト処トモ市後世子ノ
直ハ役々ノ内示ニ止メ藩ニ公布セサルモノト其局ヲ結ヒ
ト雖モ又対者ハ為ス激即シテ
ヤリ為メニ加茂列書ハ遂ニ退職ヲ告ルニ及ヘリ抑モ
一書ヲ同書ニ於ル義兄弟ノ誣アリ始メ一書ヲ同
書ヲ職名ニ推薦スヤ藩主ハ列書ヲ英名ヲ表
スト雖モ又其品激事ヲ損セシトシ憂フ一書ハ之等ノ

コトハ已ニ於テ病ヲ慎ミ其過激ヲ制スベシ
英名ヲ得ハ利用シテ以テ後ヲ藩用ニ供セラレト
ヲ具申セリ上一書ヲ世ル秘書ニ依テ列書ハ一書ヲ
推薦ニ入リテ上リテ職ヲ命テリ此ヲ先キ列書ハ
主ノ特旨ヲ合ニ藩島ニ数回ヲ重ネ延長ノ解兵
五個ノ相迎ヲ果行ス其事對ヲ能ヒテ
異響ヲ動ハ又対者ヲ為メニ病ヲ指摘セスト
退職シ得サルヲ知リ一書ハ易ヲ憂ヒ其殿後
ンナサレト欲セシモ已モ亦又隨テ其嫌疑ヲ系ルトシ
ヒシ格ラト行ハシ其間ニ於テ
得ヲ不得已ノ事故アリシヲ言退職ニ係リテハ

一昔年モ亦又其ノ進退ヲ伺フ独リ藩主ハ之レヲ問
ハ[illegible]前述ヘシ一昔年[illegible]ノ苟唱シテ家老一同ノ
意見書ヲ写シ出シ時事ヲ論シテ朝堂ノ言ヲ陳シ
一藩ノ人心ヲシテ帰嚮スル所アラシメントヲ企望セシハ
元来藩政ノ内事ニ渉リシ如ク能モ當時五帰ノ危
難ヲ救ヒ藩ヲ両班間ノ確執シテ以テ勤王ノ
義ノ如ク領ヲ奪カレコトヲ欲セシ精神ニ出ルモトシ記
[illegible]ルヘキナリ而シテ時勢ノ[illegible]変シ意シ両党
ノ抗抵ハ益ス激烈ニ至リ両上数馬等全別ハ藩主
シテ内訌ヲ上ヤ藩主ノ在国ヲ乞フノ大変トナリ又

也シ即チ元亜五月十四日ノ事ナリ藩主ハ大ニ之ヲ憂ヒ
一昔年其代全別及数馬等ヲ坐室ニ招キテ仲停ヲ
試ム独リ上モ一昔年等ハ殊更ニ合疏ヲ為サスシテ退席
又此ヲ以テ六月初旬ノ事トスルナリ新ル藩侯治
ニ悩ミシカハ一昔年ハ藩侯ノ手段トシテ先多ク等閑
ヲシテ秘密ノ二見書ヲ草セシメ立花静雄
黒田山内退職ノ稿ヲ再職ヲ産ハシ且ツ両
上数馬等ヲ役職セシムルノ不利ヲ説シ一昔年ハ殊ニ
藩主ノ[illegible]室ニ進シ恐怖シテ之ヲ主人ノ如シトモ反対
者ノ[illegible]毀誉ハ静軒ノ身ニ及ヒシカアラスト雖モ静軒ハ後

職ハ許ス能セラレシサリシ又教馬等数名退職ノコトニ係
リテハ初テ藩主ノ命色ヲ損スルヲ以テ折衝
大者兵部ハ帰朝シテ三藩一相家代ノ親書ヲ
齎ラシテ再聘ヲ国ヲ苦ヲ行為ハ特ニ希有ノ
始毎疑ニ触レコトヲ以言又遂ニ六月ホロ藩主親
書ヲ発シテ藩ノ勤王ノ行為ヲ信ジ之
ロニ於テ建部武兵衛記、藤田五郎、河
合藩山（藩山ハ一説ニ秋風）ハ徒自ヲ命セラレ又一説ニ
ハ殊ニ信迫シテ秋保ニ矢セシ（一説ニ九月藩主ハ自宅
ニ於テ殺害セラレシ事ヲ起ス義ニ書ヲ平ハ一説ニ藩主モ亦又信用シ難
ト云ヒ事ヲ起ス義ニ書ヲ平ハ一説ニ藩主モ亦又信用シ難

ト云ヒ事ヲ起ス義ニ書ヲ平ハ一説ニ藩主モ亦又信用シ難
反対者ノ舎弟ニ藩ニ信ジ之ヲ藩ニ信ジ之ヲ
及心シテ自殺ヲ図ルモノト見做サレ自宅ニ過激者為ニ殺
害セラレシ事ヲ平ハ藩ノ平ノ遺難ヲ惜シ我宅ノ
事已ニ失敗ヲ呼ビ嘆息セシトナリ（一説ニ平ノ手紙ニ云ヘル）嗚
呼事平ハ一説ニ四藩ノ接ケ景海ノ第宅ニテ意義持
軒ノ後嗣ヲ建セシ如キハ三藩ニ平ハ其ノ之ヲ密ニテ持軒ノ
往及シ又亦流ヲ待セシ如キ平ノ如キ
藩四位ノ事ヲモ期セラルヘキナリ而シテ其自宅ニ為メ
斎殺セラレ其性格ノ為ニ益ス藩主宅ノ嫌疑ヲ惹ク事ヲ

十月廿日[illegible]悔し[illegible]屬[illegible]ノ者セしより雷[illegible]
死ハ一華等カ下[illegible]ノ殺キしモノにしテ之ヲ橋ノ屬
全体ニ對し天不幸ノ來セしより時ニ新ノ[illegible]
一華等ニ命メ[illegible]月ノ[illegible]七月[illegible]自邸ニ復
慎しテ[illegible]ノ待ツ[illegible]ハ[illegible]ル[illegible]ニ至リ下[illegible]屋敷ニ於テ
出閉シ命セラレ[illegible]十月廿日ニ於テ一華ハ[illegible]ノ如キ[illegible]
蒙ムルニ至リ

昨年以来好曲之業ニ[illegible]ハ[illegible]後引[illegible]戻リ
不平行多リ為ニ[illegible]ハ[illegible]ニ[illegible]侵

黒田焼心

し可[illegible]別格ニ家[illegible]ニ大和忠勤ニ
[illegible]

十月廿日ニ[illegible]ニ[illegible]ニ於テ可[illegible]

嗚呼一華カ[illegible]セし勤王[illegible]ハ[illegible]
解[illegible]ニ[illegible]し又五[illegible]ノ領内ニ[illegible]
[illegible]ニ[illegible]ニ[illegible]ハ五[illegible]ニ[illegible]
[illegible]ニ[illegible]ニ拒絶し[illegible]ノ為難ノ[illegible]
セしトスルノ行為ハ反対者ニ[illegible]ニ対セラ[illegible]
又[illegible]ノ[illegible]ニ[illegible]ニ[illegible]
[illegible]

一昔ハ満月ノ如ク王ノ三子ヨリ表ヲシテ偽薬キ
モノトスルヨリ斯テ一昔ハ檻底ノ下ニ呻吟スルモノ三
年ヲ経テ月ヲ仰ヒ天下ノ形勢ハ嘆ヲ表シ旋踵シ天下
ノ同志ハ雲ノ如ク興リ一昔ノ昔ハ若シ陸地ノ保
気ノ美ハ為ニ成リ王政復古ノ基礎ハ為ニ[illegible]
新政紀綱ノ寿乗ハ多ク他ヲ等ノ出公卿ハ我
紀内大宰府ノ地ヲ興リ昔ハ度ク君帰治ノ為
就ヤシ一昔ヲ新ク更ニ同ノ解[illegible]再興シテ福ヲ慶
ムリ陽昔シ朝ヲノ先処リヲシ藩屏ノ任リ尚カレトモ汝
ヲスシテ帰ル

一昔ハ再職シ朝ヲリヲシテ藩政ヲ改革シ大変[illegible]
一昔ハ院ヲ廃シ閉ヲ解カレ藩ヲハ[illegible]黙ケ
一昔ハ多年ノ廃閉リ慰謝シ[illegible]ヲ藩ヲリ視
シコトリ偏ニ一昔ヲ注テ之ヲ[illegible]
軒ヲ起シテ復職セシム静軒ヲ又多注テ之ヲ諾シ彼
職シテ九州ト称ス[illegible]ヲ黒田近江ト改ム一昔ハ九州
門ハ院ヲ復職シ全ク廃閉リ解キ旧職ヲ復セシメ
鋭ヲ朝ヲノ先処リ使シ藩主ヲ補佐シテ藩政リ
一昔シ注テ勤王ノ素志ヲ致スヲ為ニ藩主ハ先ツ九
州門ヲシテ上京セシメ朝廷ノ向ヲ使メ一昔ハ内ヲリ

[illegible]藩主ノ憂リ給テ鞠躬盡
力事ニ從ヒ先以矢野安房守馬允両隊モシテ
大兵ヲ率ヒ上京シテ禁裏ヲ守護セシム時ニ兵ヲ
分チ矢野安房守大津ハ大津都督ノ宮ヲ江州ニ
衛送ヲ命ヲ蹤テ後州ニ[illegible]
東奥ニ赴ク軍功[illegible]
場ヲ[illegible]ヘリ戊辰九月藩主ハ[illegible]ヲ上京ス一
昔年及ヒ国内近江ハ隨行シテ[illegible]ヲ改革ス
効リ美問シ全ク藩主ト隨テ帰藩主特ニ一
昔年ノ積年勤王ノ志厚ク国事ニ勤労シ不

幸ニシテ一時シ寃ニ抱ント雖モ終ニ迷節ヲ改メ義ニ
若テノ賞禄ヲ復シ[illegible]老ヲ保チ待遇ス昔年ハ已
ニ二百十九石ニシテ昔年ノ完ヲシテ致仕ス藩主其後
ノ勤労ヲ賞シ若テノ隠居料ヲ給シ藩政顧問ノ
命シ藩ノ元老ニシテ待遇ス一昔年以来八人ニ而十二月
ヨリ病弱ス十時年六十八歳上表掲セシ故事ハ別冊
年譜ニ於テ叙項セシカ如シ

若印刷ノ部ハ廿年表ハ出ヲ待ツ

黒田一葦年譜

黒田一葦年譜

一葦清定ハ文政元年十八歳十二月為筑前福岡藩内ノ上屋敷ニ生ル母老業儒清定ノ次男ナリ生ニ同族中老加藤内匠徳祝カ家ノ嗣ト為ル羊之丞徳祝ト称ス用人トナル天保九年代成家ノ嗣子淡路一修病アリ嗣ソシテ能ハ故ニ新藩主ハ寛嫁シテ後藩ニ清定ノ嗣トセリ

三尼君門一愛ト称ス用人ト為ル先祖ヨリ知行合五ヲ得タリ又徳祝童子院長ル徳祝ノ嗣キテ中老タリ

之ヒリ加藤司書徳成ヤス故ニ藩主ト義兄弟トスルナリ

一葦 藩主ト義兄 司書

一天保九年四月藩主斉溥巡見ヲ終リ派ニ藩内ノ通覧ス一葦藩主ノ特命ヲ受ケテ諸事ヲ周旋ス 周

別隊

一文十年己亥五月　藩主長崎藩領ヲ巡視ス　扈従
し帯刀数十人ニシテ帰ル　元来長崎ノ藩領ハ度
永十八年幕命ニヨリテ筑前肥前両国ニ於テ交
番警備ヲ命ズ　一藩ノ家祖義信一任代ヲ其
教義備リ偏ニ故ニ藩主ハ毎年無論阿蘭陀船
出帆ニ毎ニ必ス視察トシテ出崎ス　一任
以来家例トシ一藩ヲ代ヲ主ヲ以テ
一文十年庚子三月ニ藩定ヲ以テ四月五日一藩ハ信
定ノ遺命ニ相違シ知行高六千三百五石有餘ノ領
し家老上席ノ西ニ下坐郡ノ領ケラル　家格ニヨリテ
長崎表ノ警備ノ終ル
一文十三年壬寅八月十六日　財政方ヲ倹約ニ郡村御備

改リ法令ヲ
一弘化元年甲辰七月　長崎表ニ阿蘭陀船金ヲ一藩ノ乃チ藩命ニヨリ
警シテ出崩シ十月下旬役ノ士ヲ引ク帰国役ヲ
一文三年己巳七月　英吉利西船渡来ノ報ヲ一藩ニ直ニ
之ヲ送キ　今年帰国ス役ヲ
一文三年八月ヨリ播磨ト防長
一文三年丙午六月七日　長崎表ニ佛蘭西渡来ノ
報アリ　今年一百一船ニ出張ス　留ルコト十日役ノ半ヘテ帰ス
役ヲ
一文四年丁未六月十ヨリ阿蘭陀船ノ一船ニ出張ス
表ニ出張十月十ヨリ帰ス役ヲ
一嘉永二年己酉三月ヨリ西米利加船渡来一船ニ出張ス

註

余リ之ヲ懸ケテ出張シ仝四月十日帰西ス
一嘉永三年庚戌七月廿三日ニアリテ薩州通士竹内伴
右衛門樹木間ニ封書ヲ隠シ…
東龍ヶ嶋ヨリ一艘ハ下坐郡中島田村十九家臣荻中幸
右衛門カ家ニ潜伏セシメ高後上野郡太庭村ヲ経シテ
之ヨリ保庇シ其追躡ヲ防キ危難ヲ免カレシム蓋シ
此時薩州表ニ内証アリ井上出雲守、木村仲之丞山花
ハ仙花ト共ニ福岡ニ来奔シテ之ヲ内訴ス薩侯ハ之ヨリ一
艘ト倒刑ニ處セ原ハ卯安氏ヲ以テ之ヲ待ス之ヲ擬ケテ之ヨリ
保護セシメラレシナリ 四月廿三日
一仝四年辛亥薩藩主[redacted]（斉彬君）入国ノ路次若嶋ニ於テ
テ藩主ト出會セラル一艘ニテモ謁リ許サレ去冬来保通士

シ保庇セシ満足セラレ特ニ一艘ヲ…授ケ之ヲ賜ハル
一仝年十九月十三日阿蘭陀船帆ニ付一艘ハ例ノ如クヨリ二十日
ヲ出張シ十月二十四日役ヲ辞シ帰西ス
一仝五年壬子七月十日藩主ノ特命ニヨリ薩州通士竹
内伴右衛門ヲ志摩郡櫻井浦…ニ一艘ハ家臣
荻中幸右衛門ヲシテ之ヲ護送セシム
一仝六年癸丑七月十九日長崎表ヨリ白帆船五艘渡来
ノ注進アル一艘直ニ出崎シテ警備ス 視察九月晦日
役ヲ辞シテ帰国ス
一仝年十二月六日仝表ヨリ魯西亜船四艘渡来飛報ニ
接シ一艘乃チ急ニシテ出崎シ警備ニ厳重シ居ル翌
年甲寅正月十四日役ヲ辞シ帰西ス

一四日ゟ元年四月寅三月廿五日ゟ長之魯西亜船渡来之儀
報有り一整乃千歳丸出張して蓋又暦備り嚴
警ス四月七日役り幸工帰西仮家ス
一仝年閏七月二日仝長之阿蘭陀船入港報有り翌
例ニ為て通ニ出張九月十五日役ニ付帰西仮家ス
一仝年九月十五日江戸表ニ於て老中阿部伊勢守ニ幕
策ヲ伺之一整御去秋以来モ度々長之魯西亜船渡
来ノ節ニ警備出張整セし勤労ニ酬ヒ銀拾枚
仮時賜ヒ之ヲ拝領ス
一仝年十月ニ日長州通土蔵置ニ係リテハ一整ニ聞リテ
力有り弾ニ長ス又り預り銀主手賜ヒ元四長通土六陸
州表之無ニ帰先ナし後主[illegible]通ニ賜ヒし

内金ヲ以テ一整ニ金五拾両家臣萩中幸衣米門之仝三
千疋ノ贈ラル方ニ傳生ス
一整ニ二年乙卯六月十五日ニ長ヒ阿蘭陀船入港報有り
一整例ニ為て出張九月十五日役ニ付帰西仮家ス
一仝年九月廿五日ニ特ニ方ヨリ藩主ヨリ備ノ字ヲ賜フ依テ
博殿ト改ム
一仝四年十月廿四日五月廿四日 此ヨリ先キ博殿ハ時勢ノ
変遷ニ応ジ藩ノ軍学者香西十郎、宮川代助、庫
田桂四郎ノ三名ヲシテ長崎ニ派シ西洋軍術講習セ
しムルニ至リ庭砲及當時鋳造懐夷銃等ヲ盛ニ
藩内ニ多ク製造セリ生ヲシモ拘ラス博殿ハ藩主ノ特
許ヲ得之ヲ以テ行しめコレニ也 長之発ス三名ハ

薩摩藩松平忠迚ハ博多港ニ於テ外国船ニ対シ博多港ノ警備ヲ厳ニシ防禦ノ準備ヲ怠ラス

一文久元年戊午十月十七日幕府ハ蒸汽船二隻ヲ博多港ニ派遣シ福岡及周防本村間ニ警戒ヲ厳ニシ諸藩ニ命シ各々警備ノ任ニ当ラシメ

一文久二年壬戌閏八月十七日

主ノ特使ヲ以テ財政ノ始末ヲ請願ス

内治秘密ニ渉リシモ博多港ハ外国人ノ出入ヲ厳禁シ長崎ノ如ク見ル能ハサル為メ之ヲ弥縫シ

且ツ長崎ノ例ニ倣ヒ外国人ニ対シ博多港ハ外国人ノ出入ヲ厳禁シ長崎ノ例ニ倣ヒ外国人ニ対シ

ハ差料ノ携帯ヲ禁シ

此ヨリ先キ家老高橋弾正藩

一萬延元年庚申八月

此ヨリ先キ幕府ハ安政五年ノ条約ニ基キ

心動キテ時薩主東帰セラルヽ期ニ臨ミ

義巳ヲ海内第一等諸侯トシテ

不利ヲ言ヒ長元ノ獄ヲ解キ

之ヲ海防鎮撫セシメ拘ラス

直中村国太郎ヲシテ長崎ニ

薩ヨリ生ス

ヲシテ海防鎮撫

一文久元年辛酉四月十五日

中将ヲ奉進シ三条道具

待遇ヲ与ヘ

公ノ怪動セシヲ鎮撫シ

藩主ハ上京セラル

此ヨリ先キ薩主ハ東帰セラル

藩主ハ大原卿ノ

帰京セラル

公ノ怪動セシヲ鎮撫シ

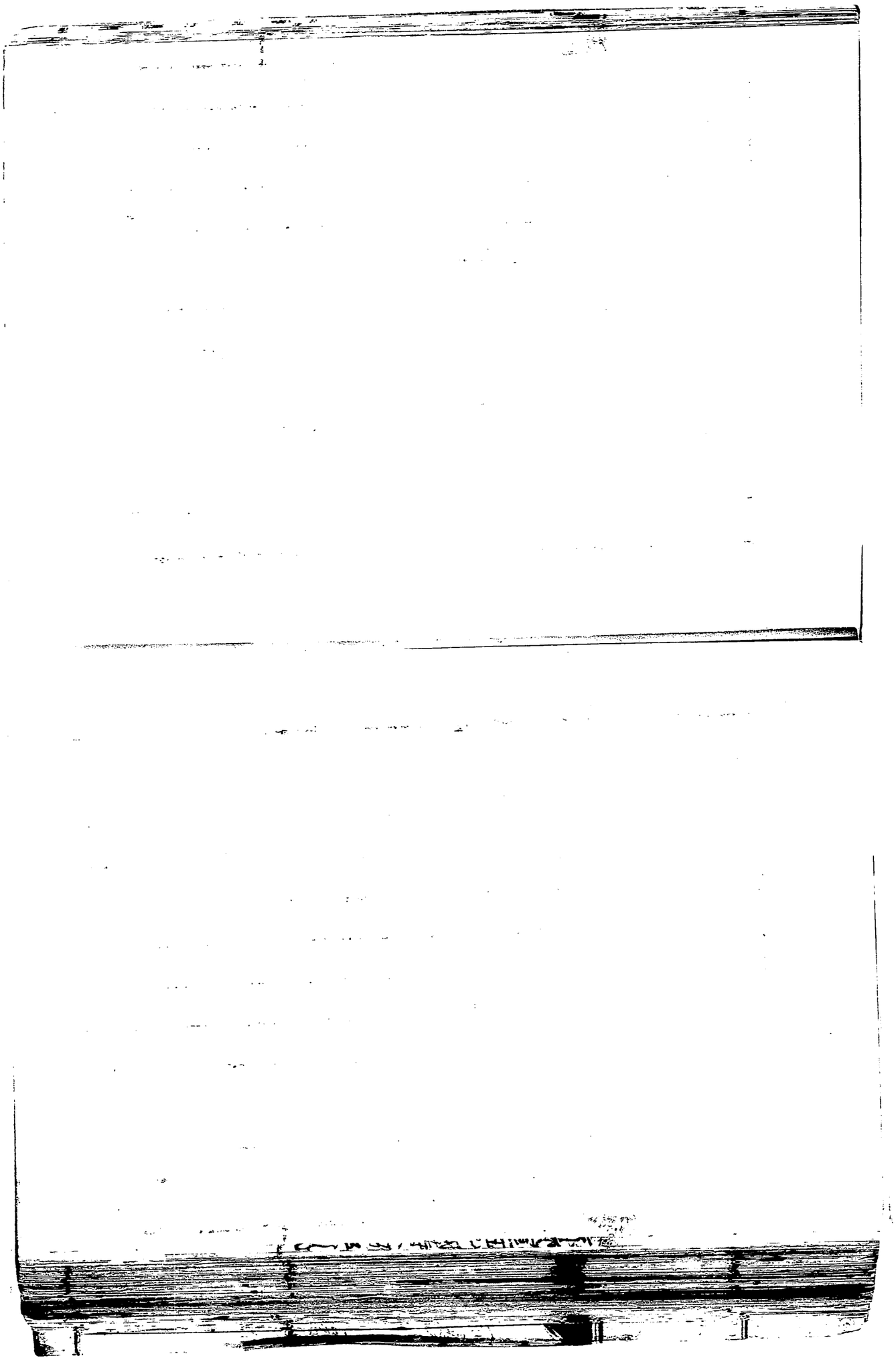
藩主六月ヨリ藩整ノ為ニ馬関ヨリ帰フ其秋初ノ大主公ノ
ヲ以テ差シ新前ノ虚易退離シ御意ヲ尽リ藩整不一応心
配シ家老中中ノ利能ヲ加神住ヲ弁差敬モ無異城ノ
備ヲ以テ備ヲ人加シ古秋ノ公敬ヲ以ハ国家ノ方ヲ
シテ藩整為ノ諸事行届キ我等差敬中心配モ
ノ殊ニ藩ノ事ニ慶事仕ヲ前所ノ事ノ心ノ配リ
家老中ノ中ノ宗粧動ノ後ノ我等シテ若尾紋右衛
門ト無事ノ帰備ヲ申シ別事ノ
如シ敬ノ主ノ事ノ

一文久三年壬戌九月十八日 藩主ハ内勅ヲ奉シ上京セラルヽ
伯ヲ殊ニ藩ノ無又世子ノ神位ノ国事ノ
カスヘキヲ以テ長防ヲ帰ハル

一文久三年壬戌四月 藩主ハ長崎ヲ経テ長崎ヲ出発
数度慶島ノ事ニ於テ藩主ハ長崎表ニ在アリシ事ヲ
セシ敬ノ藩ハ其事ニ端ヲ戦闘ノ発
生シ藩整ノ出発ノ出発ノ
発シ出崎ニテ之ヲ戒ノ慶島ノ事ニ長崎モ
ヲ以テ備セシ藩整ハ九月
全月十三日 長崎ノ敬テ備ヲ先ケシ事ノ藩整ハ
留ノ事肥ノ鵬ノ長崎ノ
事行服部長門守ト数刻ノ懇談ノ
又用ノ帰ノ
十五日主ノ長崎ノ
全年九月 出発ノ
入京ノ準ノ

藩ニ下向セラレタリ〔家老宍戸山内等ト協議シ〕ト云フ所アリ侍従ハ之レヲ聞キ玉ヒ父
憂慮シ以テ藩主ノ誤リヲ偏ヒ筑肥後ノ二藩ニ依
合上京シ公武ノ和合ヲ是為ス君兄ヲ周旋セシコトヨリ
且ツ家老兼藩主ハ之レヲ嘉ミシ山内ヲシテ廣島
鳥及ヒ鍋ニ亦以テ偵察シテ之レヲ協議シテ書シテ依テ世子
ハ藩主ノ名代トシテ山城ニ及ヒ周旋ニ従事シ上京セラレシ
数個條ノ建議ヲ呈シ世子ハ長藩ノ抗解ンナシ世子ハ
天顔ヲ拝シ大政ヲ返還シ帰陣長州小郡驛ニ
於テ長藩世子ニ会フ事アリ又父子ニ因テ両国駐在
来会セ帰国ヲ協議ス事アリ協議ニ帰陣セラル
此間山縣等数回傳聞シテ書翰ヲ往復シテ協議
ス于時外艦長州馬関ヲ襲撃スル風聞アリ海軍警衛ハ

鋭意海防ノ警備ヲ修ム
一元治元年甲子四月廿五日長藩使者佐久間佐兵衛来ル使者藩主ヘ謁シテ
村和作来ル同日藩主ヘ謁シ使者ノ趣ヲ述ヘ又
ニ陰公ノ随従士方楠本等ノ書翰ヲ携ヘ来ル
来リテ之レヲ藩主ニ呈ス其書中矢野等ニ在リ
此義ノ事ヲ登用シ士気ヲ振作スヘシトノ事アリシ
無益ノ藩主ハ傳聞等ヲ以テ之レヲ説諭スヘシ
然レトモ其事ヲ成スヲ以テ藩主ハ其事ヲ欲セシ
ト云フ事アリノ勝ヲル
一三月四日外国艦隊ハ頃日外国艦来襲ノ風聞アリ
ノ形勢稍ヤ急ナリ察シ軍事上ニ係リ意見書ヲ
藩主ニ呈ス其趣意ハ長崎表ノ警備又ハ領海ヲ守



術ヲ受ケ蒙允ニ係リ数個條ヲ割切ニシテ之ヲ論ス
一同年五月二日 此ヨリ先キ大音一観退職シテ家ニ在
リ 伝蔵一観ト智学ノ相合ハサルヨリ起レルコトヨリ致シ藩
主之ヲ聞シテ之ヲ責ム 是日一観再出テ家老職ニ
列シ名ヲ因幡ト改ム
一同年六月十七日 伝蔵近時事ニ感スル所アリ且病アリ
以テ致仕セシコトヲ欲ス 是日家老ノ里見山縣弥九郎ヲ
来ラシテ其事ヲ停ムルニ依テ暫時之ヲ見合ス
一同年七月十四日 伝蔵致仕ノ志為メニ固シ遂ニ内意ヲ伺
ヲシテ出ス為メニ是日山縣及林鐵郎両人来リ藩主ノ
使トシテ強テ其事ヲ停ム
一同七月廿六日 此ヨリ先キ伝蔵ハ矢野梅庵ト共ニ勤王正義ノ基ヲ

役職ノコトニ建議セシモ事多ク遅延ニ至ルヲ以テ伝蔵ハ
是日又々藩主ニ謁見シテ之ヲ上申シ兼ネテ又藩主之レヲ
許ス 依テ伝蔵ハ梅庵ヲ仏郷ニ招キテ其ノ事ヲ伝フ
然レトモ梅庵曽テ家老某ト意見ノ協ハス堅ク之レヲ
辞ス 伝蔵強テ勧ムルモ聴カス遂ニ八月七日ニ至リ梅庵
役職ニ就キ相模ト改ム
一同年七月廿五日 同日午九ツ長坂兵衛京師騒擾ノ
書状到着ニ接ス 藩主大ニ憂ヒ急ニ伝蔵等ヲ召
シ藩政ヲ起ス加為司書等ノ如キハ要年藩出兵シテ
以テ京師ヲ守護セシコトヲ欲ス 伝蔵等老職ハ其大兵ヲ
出シ時日ヲ費サシメンヨリハ寧ロ急速ニ出兵スルノ優ルニ若カ
ザルトス 藩政終ニ之ニ決シ先ツ司書及中老月成權

大夫畫頭久世主殿門竹田安藤進洞合新八郎篠田八
大夫齊藤五六郎田中團右衛門飯田孫右衛門等ニ命ジ
手兵ヲ以テ禁裏ヲ守護セシムル此等ノ手ハ急発シテ東
上ノ路ヲ新リ折柄幕府ハ朝旨ヲ奉シテ征長ノ準備ヲ
布ク依テ之ヲ回復シ此度ハ長州ヲ待タシメ薄稼等
ハ邦内ニ於テ動カスノ不利ヲ慮リ藩主ノ特旨ヲ領シ
急ニ毒殺閑雷等ヲシテ京師ニ潜伏シ
シテ遂ニ回籠ヲ始ヒ又外交ノ事等ノ
當ニ臨ミ内侍トシテ江戸長州ノ間ニ
苦心セシ有セシ岩倉回籠ハ内侍トシテ江戸長州ノ間ニ
苦心セシ有リシ此事ハ薄稼ハ異生心カ
盡シ藩主ニ忠天ニ密謀ヲ凝ラシ為ニ尽セリ
一八六四九月ニ日 家老黒田山城黙行セラル 山城ハ後来

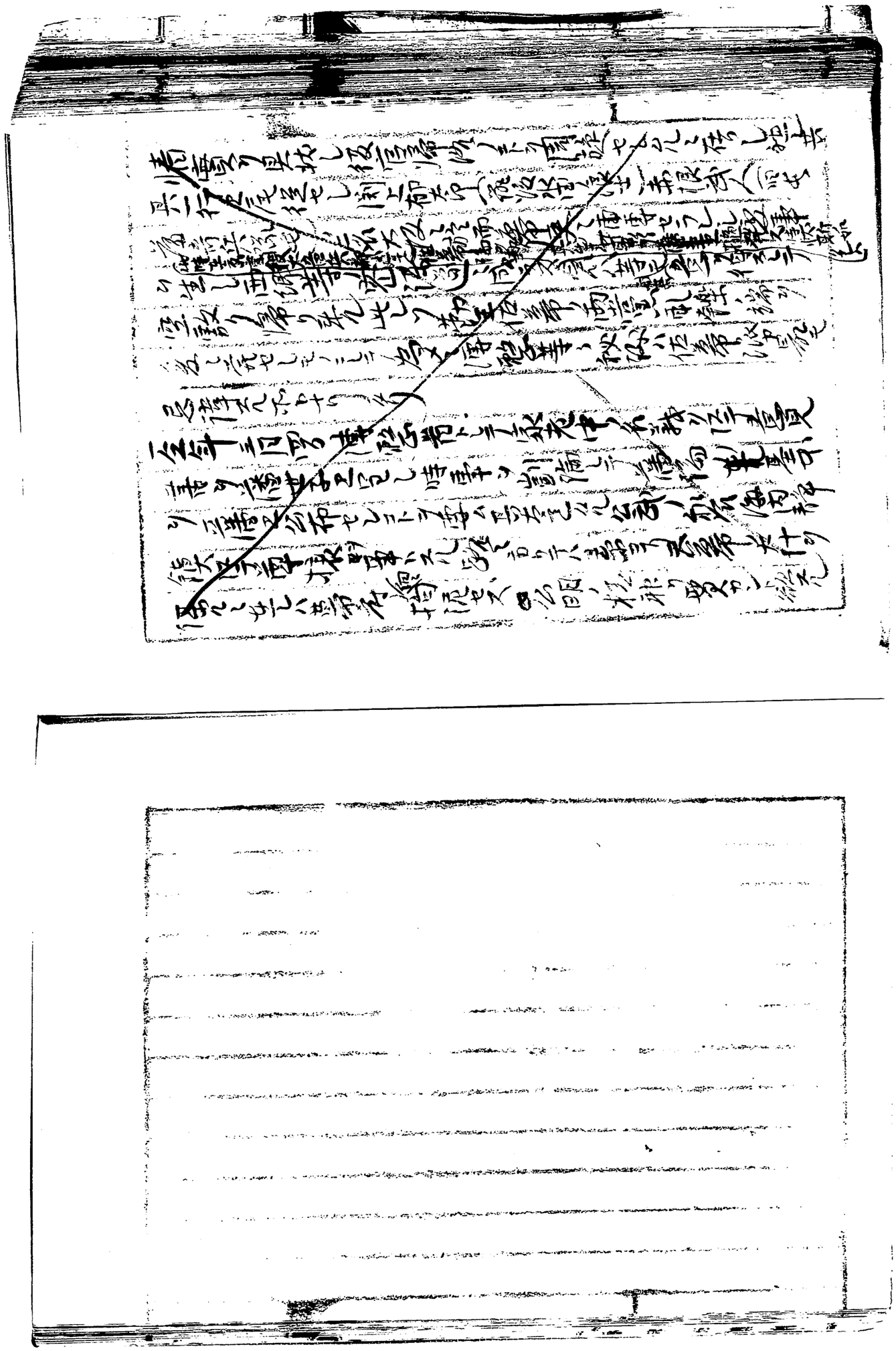
薩肥藩ノ確執

薄稼ハ最モ親昵シテ事ヲ謀リシ藩ノ論モ蓋シ同人ニ発秋
未世子ヲ奉シテ上京シ公武ノ調和ヲ図リ長州藩宥免ヲ周旋
セシ信濃ハ七月十九日京師ニ騒動ノ後ニ幕府征長
ノ命旋ヲ発シ人心激動騒動シ騎虎ノ勢ヲ逆ヒ難キ
シ薄稼ハ薄ヲ之ヲ抱セシモ及ハス又都テモ亦タ
之ヲ宗連セシトス薄稼ハ尾張ニ書ヲ送リ之ヲ上京
藩主ヲ之ヲ問ハ尾張ハ待ツ此ニ
一同年十月 加賀可書ハ藩主ノ特旨ヲ帯ヒ薩州廣
島ニ赴キ尾張藩ニ福見シテ當時天下ノ形勢ヲ陳シ
邦内ニ於テ不利ヲ説キ又タ長藩ニ向ヒテハ
其恭順待命ノ不ヲ促シ五卿ヲ領内ニ迎ヘテ江戸ノ解兵
ヲ請求セシ有リ尾張紀伊ハ克ク其論ヲ容レ五卿ヲ

就前藩ニ達シ江戸外藩肥後肥前久留米山藩ヲ
引渡スベシトノ特命ヲ奉ジ博整カ姑息藩主ヲ
啓沃シテ之ヲ科理セシ[illegible]
一同年十月五日　尾張侯勅ヲ主長五卿ヲ殺
スノ命アリ依テ博整等ハ其藩徧リ以テ熟知ヲ兵太
真義等ニ、喜多園雪平等ハ長府功山寺ノ旅館ニ遣シ
相迎ノ意ヲ表セシム
一仝年十二月四日　喜多園雪平等長藩ヲ帰着シ報
告スルヲ、五卿相迎ノ義易ニ整ハサルノ事実ヲ以テ依テ博整
ハ陸ヲ矢部相模太喜因幡ト偕ニ[illegible]月[illegible]淡路守早川
義良教等ヲシテ長ニ高ニ高ラシメ[illegible]庭都武義[illegible]
喜多園雪平等ヲシテ内侍ヲシテ慶久長藩ニ往復シテ其

相迎ノ事ヲ斡旋セシム
一仝年十二月五日　薩藩吉井幸輔ヲシテ藩主ニ偕シテ
五卿ノ相迎長藩所置ノ事ヲ陳ス博整之ニ接シ
テ協議数刻ニ及フ義ニ[illegible]ニ接シ[illegible]
以テ之ヲ監視護因殺スヲ[illegible]ヲ武門
ノ恥ヲ為シ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
恢シ之ヲ太宰府ニ回高シテ以テ寛待スベキヲ[illegible]
シ為メニ世子ハ自ラ[illegible]ニ赴キテ其事ヲ執[illegible]副将
任ヲ[illegible]ニ[illegible]ニ往復シテ尾張侯
者ニ説キ通シ後者ハ太宰府ノ回高ヲ[illegible]
[illegible]

一慶應元年乙丑正月十五日　當西丸御旧邸ニ帰り
月形洗蔵早川養敬ハ去ル日ヨリ江戸ニ御ノ出ヒテ銀内屋敷
驛ニ着ス依テ潔整等ハ国人河村主鈴庭部武兵
ヲ遣リテ相迎セシメ又中老久野四兵衛ヲシテ一隊兵ヲ
率ヒテ警衛セシメ境ニテ五郎ハ宗像郡赤間ノ假館ニ
会リ太宰府旅館ニ休憩ス後ノ後ノ二月十三日ニ於テ
五郎ハ赤間ノ假館ヨリ太宰府延寿王院ノ旅館ニ移
セラレ爾ニ同宿ヲリテ五藩共同守衛ニ当ルヲトナリ
一今年春　加賀司書家老ニ上京セシテシナリ
豚加賀ヨリ之ヲ薦ムルニ仕ヘシ
一今年閏四月　薩藩吉井幸輔来レリ　潔整ニ会シ密
談数刻ニ渉ル蓋シ此時幕府ハ五郎ヲ捕縛
セントスルヲ知リ此ノ事件ニ係リ薩藩ニ命シテ能ク其ノ初意ヲ知ラシムル
ヲ期シタリ
一今年閏四月　薩藩西郷吉之助ハ藩主ヲ尾張ト
事ヲ謀リ潔整ニ接シテ秘密ノ意ヲ
事ヲ謀リ潔整ニ接シテ秘密ノ意ヲ　西郷ハ藩命
シテ上京ノ路次ヲ事ヲ謀リテ事ヲ
薩藩ハ大坂ヨリ吉郷ヲ出シ江戸ニ長藩ノ指ヒ五郎
ノ役宅ニ帰ル途ニ出シ大ニ中宗ニ事ヲ
整ニ会スル野相模ハ前トシテ其ノ
郎（新任京都御役）ヲ川佐五郎ヲ
志早川養敬ハ西郷共ニ上京セシメ先ツ
其尾張家ノ指令前後ヲ術セシ



[illegible]
独しとも其一行ハ尾後せし刈上郡ハ[illegible]流後水田浪士
赤根武人（旧七藩斉昭陸七備し大学者と者ハ浪流せり）
ノ二名大坂ニ於テ幕吏ニ捕縛せうしし爰事り生ス依テ
西御奉行ハ密探逆ニ成ウサルニナラス至京ニ至後大者
兵部ハ一ニ伝奉行ハ帰り直ニ出京事り帰り藩主
擅命し薄醜及矢野相模ハ施砲上ニ係り
使ニ帰り賞ス故ニ負ハ[illegible]
罪サスシテ[illegible]
[illegible]ノ端り奉命し為メニ薄醜等ハ秋海ハ彼ヤ藩
主ノ命色リ投スルニ至シリ
[illegible]市ニ家老酒上[illegible]
[illegible]退後久ハ川潜岐（四月朔

日退隠聞届ル）久野一角（二月ノ退隠聞届ル）等モ病
命ト称し辞隠ノ願ヲ此し等ハ一ニ伝奉ノ命ニ帰り勅
薄醜等ト其後悔ハス逆ニ退職セシト雖モ密ニ
列リ合名し于南ニ薄醜等ハ施砲上ニ逃帰り
数千居側ニ言ヲ納シテ伝奉ノ藩帰り挽回セシトスル
ノ間アリ勅主意合志者ニ命メ之ヲ向キテ久多慶し
左而し任命ニテ又ハ[illegible]防ヲ図レ薄醜等ハ大ニ之
ヲ憂ヒ其間激ノ奉命ヲ動メ別紙ノ如ク云フ
一今年三月四日薄醜等ハ家老中ノ名義ニテ音貴
リ藩[illegible]ニ至し時事ヲ割論シテ藩論ノ基本
ヲ藩[illegible]ニ至し公布セシコトヲ要ス且大ニ公武ノ和会海
内静謐以テ尊攘ノ事トスル[illegible]ヲ天幕

為メ国家ノ大計リ図ルヲ主シハ幕府ノ向キニ拘尼セス
公論ノ持神リ勇ムカシコトヲ欲シ藩論ノ基ヲリ藩
ヲ公布シテ以テ一藩人心ノ一定スルヲ主シ蓋シ
博愛ハ退職者ヲ訓戒シ所キ藩ノ人心ノ一定セシム
ルヲ主リ藩侍ノ形勢ハ不得止モノヤリ此ノ為セシモ伝
幕府ハ陰密山絶ヘ仰ノ為ノ対ニテ之レリ岐拒シ汾激
ヲ浮リテ以ヲセス雨後世子ノ病停ニ付ノ暫時ヲ其事ハ
公布セス後ニ内示スルニ止ムヲ得ス此ヲ両
意ノ拮抗ハ益ス熱ノ列シ博愛等ニ大ニ藩主ノ
意ヲ失フニ至レリ

一今年三月 さて 山中成大夫博愛ヲ邸ニ来リテ秘密ス成
大夫ハ大坂鴻池ニ陸居シテ風ノ勤王ノ意深リ久シク

長藩ニ下リ事リ藩ノ蹤ヲ博愛ニ来リテ又長事ノ秘
密ス博愛ハ成大夫ヲ接見シテ密秘セシコトハ文封表
ノ間ノ如キ名ヲ君側ヲ発而秘セシトニフ

一今年四月 日 薩藩国事掛大参事有馬ヲ博
愛ヲ密秘ス蓋シ其事ハ薩藩ハ薩世子ハ
西国ヲ主シテ何事ヲ為ヲ為ヤラシトスルコトヲ紹介セシヲ依テ
博愛ハ矢野相模ト協議シ四月ハ即チ大参事ヲ
拒リシ博愛ハ進陽シ時事ノ異変ス

一今年六月 相模ハ大参事ヲ帰リ伝言ス蓋シ其事ハ
シ博愛ハ薩世子ヲ西秘セラレシ事ヲ依テ
世子ハ太宰府ノ旅館ヲ訪ヒシコトヲ勧告シ博
愛ハ相模ト共ニ世子ヲ行ヲ慫慂セシモ国下ヲ博愛

等ヲ上セし藩御屋敷布ノ件ニ而後藩中ニテ世子
ノ儲御ノ訪ハ人夢者ノ嫌疑大ニナラサルベシトノ反
對論ニ遠キうし迄ハ世子ハ行ヲ留サヤラしサリし博
殿ハ又暇嘆セしトニつ
一仝八日博殿及家老一同藩主ニ進物シテ藩邸
ヲ発布ノ件ニ付ノ進御ニ布アリ
仝十四日博殿及家老一同藩主ニ進物シテ前
御ノ宮ヲ又
一仝十九日博殿ハ此ヨリ先キ對州藩ニ内証ヲ図ル
主ノ家老平田左江ヲ以テ依頼セしコトアリ依テ博
殿ハ右旧藩ニ対シテ其事ヲ申ス筆談シテ
中村到尾崎物ヲ命ジ森勘作ヲ事使トシテ渡海

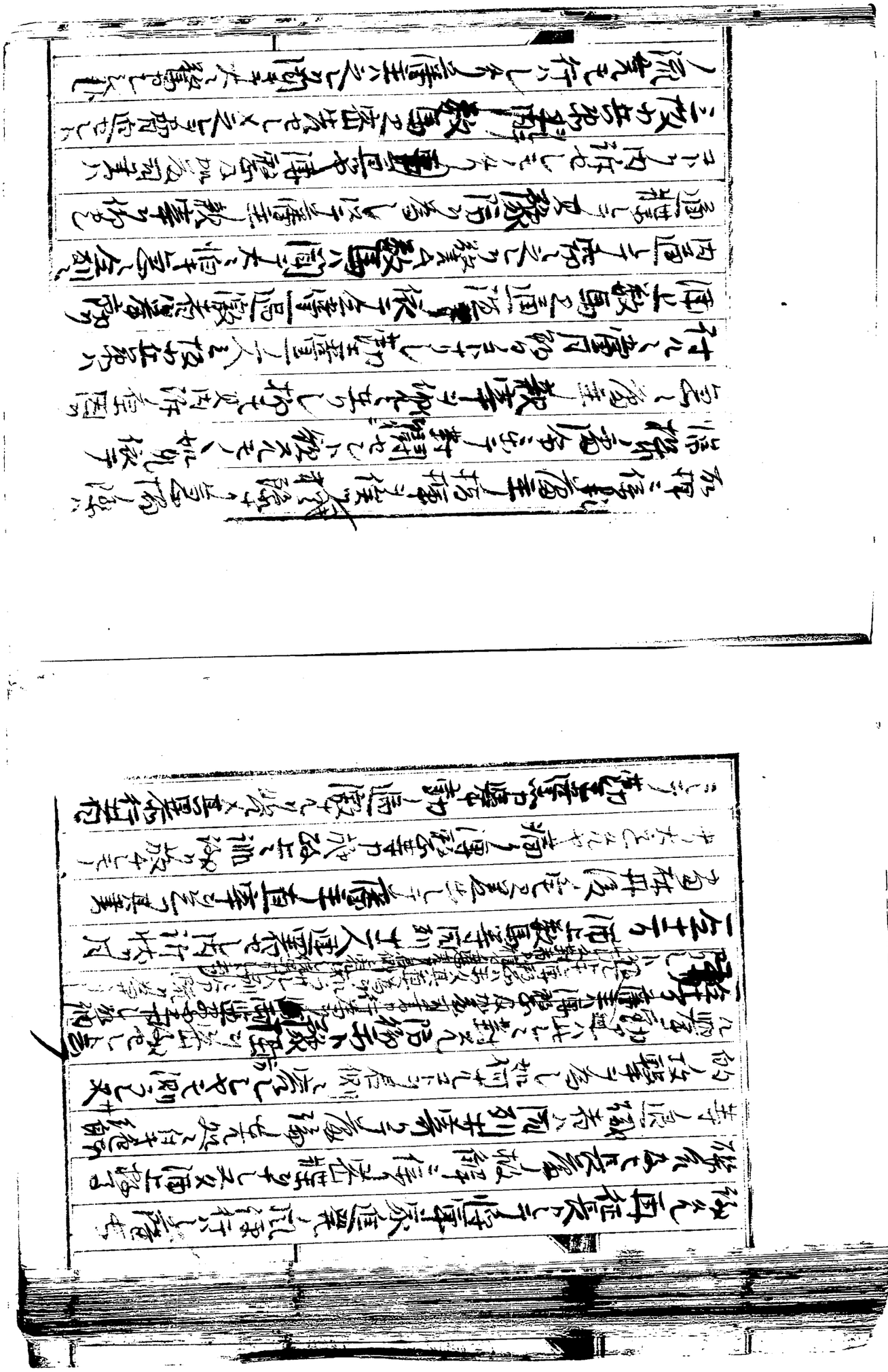
セし

一仝十二日薩藩例用人島田嘉右衛太宰者ヲ来ル
博殿ハ之ヲ引接シ夜半ニ密ニ流ノ交ヲ到ル
又事ヲ此ヨリ先キ月形洗蔵ハ事ヲ觸し諸人意
對シ禁ヲセラル嘉右衛ハ西御例ヲ引キテ速ニ洗蔵ヲ
赦免セラルしコトヲ御先し且ツ五卿保護ノ件ニ付
秘密ノ交ヲしト盃し此時筆者大目附阪東但馬守
海岸視察ヲ命ジ自ラ兵庫ニ赴テ五卿ノ護
衛ラしトスルトノ風説行ハル博殿ハ薩藩ト協力シ五卿
ヲ保護シテ其警防ノ協力ヲしトニつ
一仝晦日曾而ヲ清ヲ来シ藩主ノ住庇ニテ危難ノ
免しし薩藩為井宮内卿井上馬守加良陶二市

和州内手柴門ハ此程京師ニ上リ申ス藩ニ懐フノ主情ニ
近侍家ノ親翰ノ爾ラシ来リテ藩主ニ説ヲ要ム
為シ此ヲ失キ京師ノ事情ニ関シテハ博酌等ヲ執
ル所ノ執ト藩主ノ右高ハ猶特キ紙ハ又世シ為兵部カ
二字一揆家ノ執ヲ高ケテ君側ニ秘通スル所ニ
故ニ博酌ハ此ヲ深ク怪ミ居リ来ル十四日平ニ復ス
藩主ノ意モ信ジ難シ為ニ京師ノ村山下総内ノ人
下ヲシテ藩主ニ親翰ヲ京師ノ事情ヲ先ニ知ラシメ
シム依テ後井宮内ハ下ヲシテ博酌ハ直ニ応ル
内ニ接シテ長下ヲリ密ニ秘ル安ニテ藩主ニ
長州見リ伝ケセシモ藩主ハ偽ツ病ヲ称シ五月朔日
世子代リテ福見ス[illegible]ニ京師ノ親翰藩

主ニ福見ノ上ナラテハ[illegible]難シ福見ス[illegible]待スニハ京
師ニ持返リ返上スヘシ上ニ依テ博酌ハ藩主ノ病体ニ偽リ
長ニ手紙ヲ宣ス又長ノ翌ニ万藩主ハ病体ニ応ニ内ヲ過キテ福
見ス宮内ハ即チ近来家ノ親翰ヲ[illegible]ル事
状ノ存スルヲ[illegible]博酌ハ大意兵部ヲ呼ニ
右ノ通ヲ馬ヲ為ス代上京セシメレトモ[illegible]ル事
主ノ堅下ニ上セリ

一ヶ月九月九日夜勅使宣下ノ派伊勢ノ神三度ノ兵
和泉守平岡田稔頭山想之助等未郎ヲ博酌之
ヒリ坐室ニ近キ人ヲ屏ケテ密談夜半ニ及ヒ盖シ其



渾發等モ亦タ之レヲ聞テ彼等カ陰険陥擠セント
欲スルノ忍シキヲ一叱シ先ニ御藩主ヨリ從前ヲ以テ擢
シテ申立別ニ分疏ハ為サヽリシ
一仝十四日渾發ハ采邑下坐郡ニ於テ采地巡視トシテ
出張シ附属兵ヲ集メ兵列ヲ調練シ偶セテ矢野
竹ノ要塞ヲ視察シ仝十六日帰福スルヤ蓋シ渾發
カ主ハ太宰府ヨリ五卿ヲ一危急ノ際ハ之レヲ采
邑ニ於テ采ヨリ迎ヘ保護セントスルコトヲ欲シ又隣国ヲ
為セシモノナリシモ彼ノ佃之致馬等カ陥所与己シ
渾發カ勤勉ハ愈ス藩主ヲ差リ毀シトミ

~~陰ハ之レヨリ采邑ニ於テ迎ヘ保護セシコトヲ欲シテ其隙~~
~~因リテセシトシテ彼等ノ勤ハ伊丹等カ知ル所~~
リ陰ニ衷ニ藩主ヨリ陥レ讒ヲ謀セシナリ 家老
一仝年五月十九日 渾發カ仝志タル加藤司書ハ前日ヨリシテ
退職ス蓋シ司書ハ五卿ヲ迎ヘテ黒リ藩 渾發及
矢野相模等ト謀議シ其志ヲ同フシ事ヲ為サントスル者陰
五卿ヲ太宰府ニ押送ノ幕命ハ幕吏隈原カ齎シ来
リ兵威ヲ以テ五卿ヲ請取リ徒ラニ任スルコト再征長トシテ将
軍家追ヨリ乱暴ニ係リ高揚セシ過激ハ益シテ軽
躁偏激ノ挙動ヲ起シ遂ニ幕府ノ嫌忌スル所ト
ナリ佐幕派ハ之レヲ視テ藩ヲ危フスルモノナリト論シ深
訓ヲ藩主ノ意ニ悖リ遂ニ其レ各ヒシナリ渾發

ロ頭書し旅ん義兄家ノ婢ヲ而又兄トし事ヲテ法ヲ
密婚り間し博殿ハ痛り憂ヒテ之ヲ医療セ甚タ能ハ
ハしサルノミナラス亡モ而又其嫌忌ニ連累セシ
保キ博殿無事ノ時ニ寺ハス
其余リ待ツ出ヒトモ藩主ハ之ヲ問ハサリ
一全年十月ホ日 幸吉多国寺早速知ロ丘左衛門ヲ引籠ノ為メ大心穏
ヲリテ博殿ノ病ヲ而ヒ博殿ヲ引籠ノ為メ大心穏
カナラサルハ急シ出務セしコトヲ御先ス
一全年十月ホ日 御主意ノ風尾崎出左衛門ヲ代出し
亦又同部兵庫門（四番頭）ハ親戚連部武兵衛
藩山ノ伴ヒ来リテ而又其出務ヲ御先ス
一全年十月ホ日 林丹後矢野相模大意ニ因幡ハ歩揃ヒテ

博殿ノ病ヲ而ヒ藩主ノ親書ヲ爾シテ力メテ出務セし
コトヲ促し無ク親書ヲ大ニ元書ヲ事ニ係リテハ
ひしテ世ヲ隔ニ元ヲ事ヲ而ヒ
モ従来通リ相心得見ル人物ハ而又協和ス
カ見ル人物ハ而又協和ス早ク出勤スヘシト云フ
藩主ノ意ヲ風激し明日ヨリ病ヲ力メテ出務スヘキ教令
しカ急ホ云フ事ヲ聴し
一全年十月ホ日 富田伝ニ馬役トシテ随従セし真友
美吉八反田侯役蔵代ハ中田太宰者ヲ以テ嚮し
矢野相模ヲ御ニ来リ先ケテ江戸幕吏阪東但馬守ヲ大
兵ヲ以テ大坂ニ在リ五藩ヲ合シ力ヲ以テ随従
士ニ於テハ阪ヲ死リ以テ戦闘準備ヲ共ニ

外に所々大学者八郎馬場大右衛門ナラス土卿花宮ノ侍従
藩ヲ引揚ケ慶島表ハ離り離ケラレト欲スレモノ如し
依テ本藩ノ毒牙ヨリ毒レト欲スレトアリ●相模ハ間ニ大と
驚キ直ち博多ヲ郷ニ帰シ本ノ之レリ遂ニ博多ハ此為ニ
常備兵力ノ低シ限リハ幕兵ノ推却シテ土佐ノ侵略
若シ万一ノ仮令ハ之レリ陸奥ノ藩ハ敗シ者ウセシ事モ幸ニ来
邑ニ左ニ不ハ矢●竹ノ要害ニモアレハ多ク奉シテ他ニテ
侵略者ニ入ヘシトテ右ノ方竹ノ両名ハ其事ノ会ヘ
速戦ニ及ヘシ清御前ハ本藩ニ相談シテ安心アラセラルヘキ
侍ヲシメ博多ハ直ち出船シテ屋主ヲ捉ヘ人ヘシ密謀
ヨリ上セ其ハ防御手ヲ戒メシガ幕吏ハ之レリ聞キテ●疑易
セシ力来ウサリシ独シ上モ●此事力株シ幕府ノ嫌疑ヲ

不ト十ヶ博多モ亦タ退縮仕セラシ幕王ノ藩藩ハ為
メニ困難シテ全ク不ハ為リ奇福ニ安心ノ為ヘリ
左角丸ヲ右ヲ 御主臣ノ錦表ハ森安平 位置ハ矢ノ
博多ヲカ寝室ニ於テ家ノ安ヲ即チ幕吏ヲ者ヘ
是ハ言御和ノ者ヲ幕吏ハ同ニ博多ハ代表ニ市作ノ用
左角丸●右ヲ 用人ハ三馬主ヲ直ニ役大意兵部
交代トシテ大鳴ハ代ニ搭シ出船ス新任宮都用役中村到モ
用伴ス蓋シ大意兵部ハ一意伍幕藩ノ藩ト称リ二使ノ為
家ノ内意ノ秘ニ藩主ハ内ニ在セシトスル為メ博多ノ者力
執々ハ藩ノ主ハ代ニ代ハ用意ハ益々ハ
至ル限リ長シ●内々ノ近衛家ノ歌書ヲ感ニシテ大使
命ヲ拝セシモ亦一大意兵部ノ呼下シ代ノ正執者ト交代

セシメシコトヲ患先元ミ来リシ[redacted]而後傳蔵ハ同列ト日夜
密議ヲ凝ラシ藩主ハ五覺ヲ遅シ幸シテ其徳
許カ得テ兵部ヲ急ニ帰サシメ乗シ主馬[redacted]テ
[redacted]交代トシテ上京セシメシナリ然レモ兵部ハ辺テ之
命シ帯刀シテ急ニ帰国セス二階ヲ相交代會[redacted]
諸藩（備前藩トハ保リ）密ニ召サレ間キテ内先ス依テ
傳蔵ハ益ス藩邸ニ矢野相模ヲ託シ隆ニ仍リ幸ニ
一全（十月）[redacted]藩黒田嘉右衛門ノ命ニシテ上京
ノ路次ニテ五郎中律ニ仲待リ相模共ミ先嘉シテ五
郷太宰府守衛且ツ福岡帰後周旋仲ミ協從ス
一全（十月）[illegible]福岡内膳家老ニ上ル益シ加藤司書ノ
代員トシテ傳蔵等ニヨリ推薦セシナリ

一全（十一月八日）[redacted]左京藩為井[illegible]内村山下總ヲ木村仲
ヨリ傳蔵及矢野相模ハ既ニ死ス必ス秘ニ到着ス是ハ
請中ニ言フ不知ル大音兵部速ニ下国シ吉田主馬入
替ニラスシテハ諸事運ヒ難キ旨状ヲ内先ス
一全（四日）大音因幡牟議表ヲ呈出ス傳蔵ハ若トシテ
立花弾正（黒田山城正議後ノ名）ニ従議セシメタルコトヲ
一全（十二月）[redacted]議論ス
各番頭ハ[redacted]浦上數馬等ト同列ニ併セシテ直訴セシハ
宣ミ傳蔵等ノ訴ヲ上ミ誹謗ニ察シシモナリシモ藩主ハ
深慮ニヨリ其事ヲ全ク浮說ニ帰セシメシコトナレハ安心スヘシトテ
林丹後[illegible]大机ヲ聞ミ合ス 傳蔵等ト相謀リ内
議セシ[illegible]丹後等主ハ浦上數馬外同列及傳蔵相謀

又代家老中り工席ニ召シテ他仕ヘ[illegible]セラル依テ博整ハ近
来過[illegible]者[illegible]書法ヲ悔ラス侵ス君側ニ[illegible]ス藩侯
ヲ擾乱セシトヘ[illegible]ノ不得[illegible]ノ命シ主君ノ親ヲ同シテ
敵言ヲ[illegible]退席スル藩主ハ長[illegible]ト子[illegible]ノ間ニ
敵国ニ変ヲシシ三度ハ兵ヲ[illegible]ノ藩ヲ[illegible]ノ年ニ
シテ法セラル博整ハ[illegible]相援ハ[illegible]ノ[illegible]ノ不同シ之レリ不
問ニ揚レンコトヲ進言ス依テ藩主ハ右ノ[illegible]ヲ
法アリシモ[illegible]博整等カ意ヲ[illegible]ノ不同ヲ
ト進言ス依テ宝田大和ハ中兵衛藩侯ノコトハ明白ニシテ
打豫セラレシコトヲ進言スルモ世子ハ[illegible]ス[illegible]行スベシ
トシテ法アリシモ藩主ハ[illegible]ヲ[illegible]ルヲ[illegible]ハ[illegible]ニ[illegible]行リ
見合スベシトシテ法ヲ[illegible]退散ス

一仝二日同会[illegible]山[illegible]ヲ作博整ハ坐室ニ来テ事
ヲ[illegible]ス博整ハ[illegible]軒仮[illegible]ノ[illegible]ヲ[illegible]ノ[illegible]ヲ
賛ス宝田大和ヲ[illegible]ノ同ニ[illegible]ス[illegible]
[illegible]林安平ハ林[illegible]後ノ邸ニ[illegible]テ[illegible]ノ[illegible]ヲ[illegible]
其ノ仝ニヲ[illegible]

一仝三日大意内幡[illegible]ノ藩兵ハ防[illegible]三度
小兵衛藩侯身セシ[illegible]セラル依テ博整ハ[illegible]ヲ小兵衛ニ
藩侯身セシメラレハ[illegible]ノ数国モ亦タ同一ノ[illegible]アルヘキトシ
進言ス然レトモ数国ノ[illegible]置ヲ[illegible]ノ[illegible]
一仝四日[illegible]三度ハ小兵衛藩侯[illegible]ハ宝田大和ハ[illegible]
ノ[illegible]動ハ不同ニ揚ケ博整等快ストシテ[illegible]
仝[illegible]日博整ハ[illegible]

余事ノ発シ事ノ
韓到来ス其実申ニ云フ所ノ長文ノ秘密
ナカラモ帰ロウ人ノ色ヲ人ニ問フ一方家ニ立入リ陰険事
ヲ為シ如何ナル野心ヲ有リ藩主ノ内ニ生セシヤモ測ラレス
其主ニアルベキカリ之ニ生ス博多ハ之レヲ藩ニテ長ク兵
部ノ[illegible]ヲ[illegible]嘆ノ為ニ同ニ於テ博多
始メ一列ハ藩主ニ向ヒ立花詳軒後藤
ヲ勇ノ[illegible]研丹後ヲ[illegible]藩主ハ之レヲ
サリシ蓋シ此時国上数日等ノ[illegible]花ハ巧ニ[illegible]ニテ藩主
ヲ毀ヲ宣ホシ能ハ詳軒ヲ行為ニ及ヒ[illegible]
一ニハ博多ニ向ヒ特ニ藩主ニ向ヒ立花詳軒
後藤ニトリ藩ヒ陸而ニ見書リ[illegible]

尊慮ニ悖リ退職擯斥セラレシ再後其慎ヲ[illegible]
財政困難シ除セハ捨別ヲ以テ陰居ノ儘後藤セラレ
ニト一時ノ同様ニ向尊慮ヲ伺ヒシ藩ニ有シ抑也再
征長ノ事旅ヲ発セラレ[illegible]何故ノ再付ナルヤ其為ニテ生
ル処ヲ知ル能ハサルモ[illegible]千太ヲ交ニ[illegible]ヲ[illegible]
乱発ヲ兵ヲ解ケス果テハ如何ナル兵乱ニ及フスキハ
測ラシサルベシ況ヤ信ヲ年ノ事候庭ニ秋穂モ寄カル
ハシ[illegible]以不易易時勢ヲ[illegible]ノ内[illegible]
ノ為スヘキ山ニ回下ノ意[illegible]ヲ詳軒
財務シ熟ニ達セシハ実ニ主公ノ知召スヲ[illegible]ノ再度ニ
見ノ[illegible]ヲ[illegible]ノ時都北ノ
尊慮ヲ[illegible]ヲ詳軒後藤セラレ[illegible]

剛[illegible]命令シテ[illegible]ヲシテ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ

捨ケ嶽ヨリ清水ヲ伺ヒ出ヲ迎ヘ[illegible]ヲ
出帆ヲ高麗ニ抑テハ益々高陽ヲ[illegible]
ノ変リ先ケ清帆ノ心ヲ安ンセシメシ[illegible]
一左ハ[illegible]藩主ハ博多等ニ[illegible]
[illegible]博多等ヲ[illegible]
ノ嫌疑リ惹ク[illegible]
[illegible]家ノ親書ハ大高兵部ヨリ再度上ヲセシ[illegible]
博多ニ[illegible]ヲ推薦[illegible]
ヲ持帰リシモノ[illegible]
一左ハ藩主ハ親書ヲ発シテ痛リ勤王意ノ行為ヲ譴責ス
博多ニハ最後ノ手段トシテ[illegible]
ハ直ニ家老
[illegible]ヲ川氏部、国上教馬、

都左近、吉田大炊、野村康馬、大高兵部ハ[illegible]
[illegible]ノ遠隔ヲ[illegible]
直渇シテ之ヲ[illegible]
藩主ノ策ヲ待ツ[illegible]藩主ノ気色ヲ窺フ[illegible]
建部武兵、衣非紀伊、[illegible]
[illegible]身ヲ余セラル
一左ハ博多ハ来邑ニ左ヲ木ニ降ケテ[illegible]待策[illegible]
居リ
一左ハ西ハ夜嗣子黒田大和ハ急使ヲ駆セ博多ヲ来邑ニ
ケシハ却テ藩主ノ意ニ背クヲト大ニナラス迚ト帰邸スヘキヲ
迚告ス博多ハ即夜発シテ帰邸ニ向フ
一左ハ五日朝博多ハ[illegible]帰邸シ直ニ病気引入ル

推ケ高ト[illegible]
出帰リ屬[illegible]
ノ変リ先ケ清卿ノ心ヲ安セシメシ[illegible]
一仝十八日藩主ハ博愛等ニ示スニ陳及来ル家ノ親書
ヲ以テ[illegible]博愛等カ[illegible]ノ後果ハ過激ニ渉リ[illegible]
ノ嫌疑リ惹クコト大ナラス且兵隊撫ヲ勧先ニ[illegible]
ニ帰家ノ親書ハ大高兵部ヲシテ再度上京セシメ[illegible]
ト博愛等ハ推薦[illegible]即チ兵部
ヲ持帰リシモ[illegible]リ博愛相接ハ恐怖シテ[illegible]
一仝廿日藩主ハ親書ヲ発シテ痛リ勤王堂ノ行為ヲ譴責ス
博愛[illegible]ハ最後ノ手段トシテ[illegible]家老
中達署ノ上更書ヲ[illegible]ヤシメカ川氏部、国上教馬、

都左近、吉田大炊、野村東馬、大高兵部、久野一角、山[illegible]
[illegible]ノ退職[illegible]ノ利ヲ[illegible]藩主[illegible]
直渕ヲシテ之ヲ[illegible]直ニ退出シ自邸ニ蟄居シテ
藩主ノ待ツ益ス藩主ノ気色ヲ毀フ又[illegible]
建部武[illegible]衣非[illegible]
僅身ヲ余セラル
一仝廿日博愛ハ米邑ニ吉木ニ避ケテ恐怖余[illegible]
居リ
一仝廿四日夜嗣子黒田大和ハ急使ヲ駆セ博愛ノ米邑ニ避
ケシハ却而藩主ノ意ニ背クトナラス速ニ帰邸スヘキヲ
通告ス博愛ハ即夜発シテ帰邸ニ向フ
一仝廿五日朝博愛ハ[illegible]帰邸ニ直ニ病気引入ル

屋ノ薄磨帰邸ニハ昨夜喜多岡雷平ヲ自宅ニ於テ殺害セラレシヨシ聞リ薄磨ハ天ヲ仰テ共歎シ藩ノ雷平ヲ遺難ヲ惜シトシ云フ蓋シ雷平ハ薄磨ニカ味ニ信頼シテ事ヲ任セリ彼ノ立花静軒ノ役職及国上数馬等ヲ内訴媒ハ雷平ハ薄磨ノ意ヲ奉シテ奔走シテ其事ヲ弁シ島又対者ニ対シ又其他抜ヲ其作秘ノ細情ヲ知ラシメ偏ハ区区ニ薄磨ノ為ニ謀リ自己ノ利慾ヲ図ルモノト見做シ遂ニ其禍ニ遭フ此ノ変事ヲ薄磨等ヲ行為ハ無ク藩主ノ意忘得編シ遂ニ節王正勤ノ為藩ハ全ク滅ヲ止ムニ至レリ

一文政六巳酉薄磨ハ退隠ノ願書ヲ上ル

一文政七申年薄磨ハ願ヲ以テ退隠大和家督ヲ譲シ○名ヲ時之丞ト改メ藩主ノ許諾ヲ得テ来邑ニ左木村ニ移住

岡是又世ヨリ先キ大意兵部役職ヲ以テ国上数馬等ニ示又国務ヲ掌シ国上数馬ハ本文役職ヲ就カスト雖モ数馬ハ再職セシ（ハ勤王豊前ニ後ヲ）内密ニ藩政ノ権ヲ握リ薄磨ハ閑ニ高ハ為ノ徒ノ或ハ出閉セラレ、ヲ生シ

一文政十年福岡ヨリ長ヲ出ス歩ヲ時心ハ不審ノ事アリ福岡屋敷ニ於テ徒ノ藩ヲ偵ス時心ハ即夜旅住ヲ整ヘ直ニ福岡表ニ帰リ福岡大之町ナル屋敷ニ逗留セラル

一文政十年ヨリ時心ハ二百年来行世之業ハ被秀引藩主ノ勅意ニ戻リ藩主ヲ不悔所行多ク藩体裁モ相拘リ所属ニ至ル迄ニ付依シ厳科ニ処ス別格之家節旦ヲ同姓大和忠節ニ被免類外ノ恩恵ヲ以テ秘號

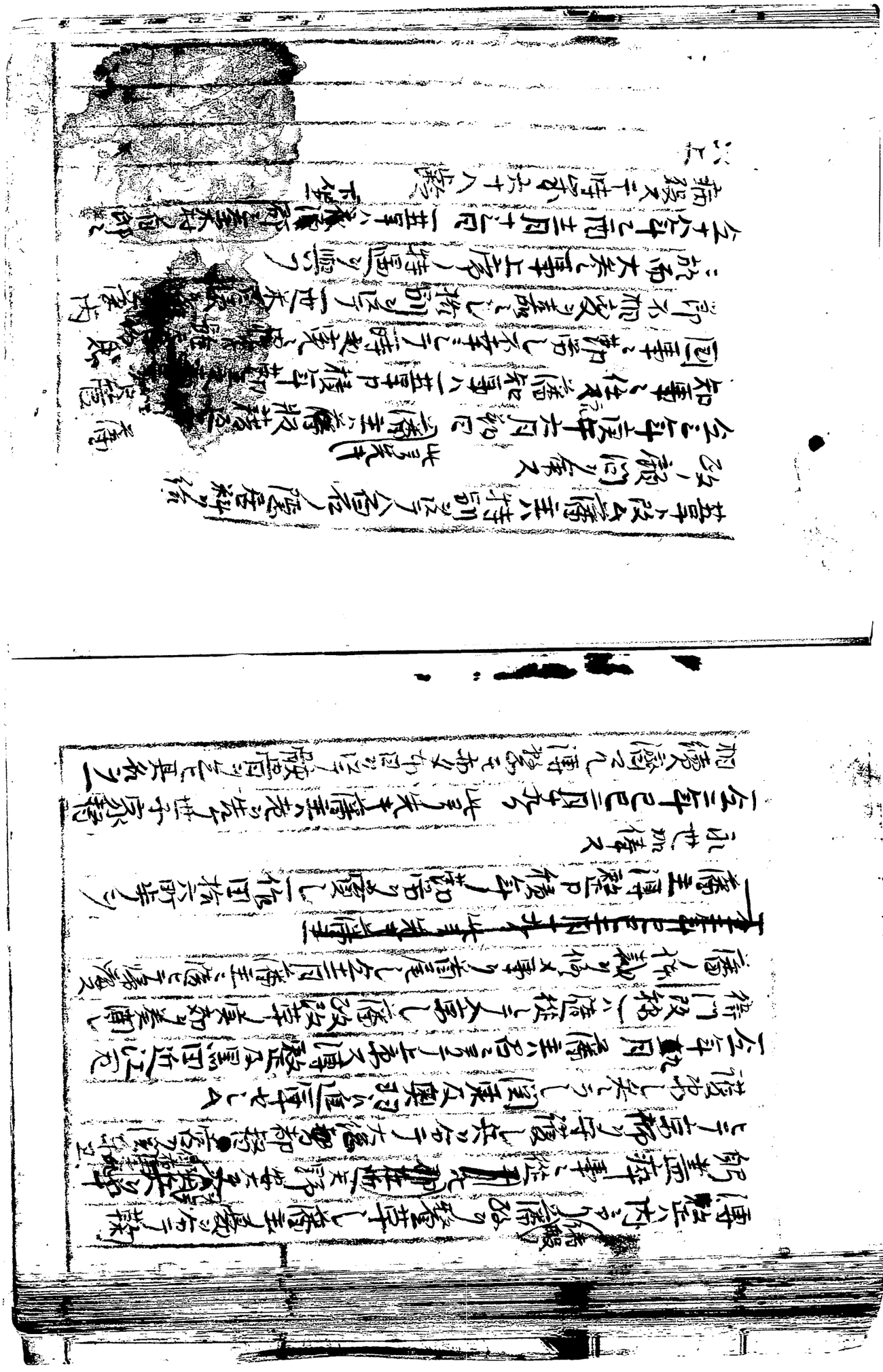
及流罪ヲ虎ヒ従来ト異ニ遠下屋敷ニ於テ蟄居スヘシトノ
厳命ヲ受ケ此日暁心ノ全志ヲ加茂川ニ書状
郡武彦ハ衣服箱泥ニ斬殺五六郎ハ自裁ヲ命セラレ
日形浅蔵以下十四名ハ死刑ニ高シ尾崎勘左衛門本林
安平蔵代十兵衛ハ切腹其代数十人ハ遠国流罪ヲ
命セラル暁心血ヲ注ク[illegible]暁心ハ特別ヲ以テ免罪ヲ蒙ル

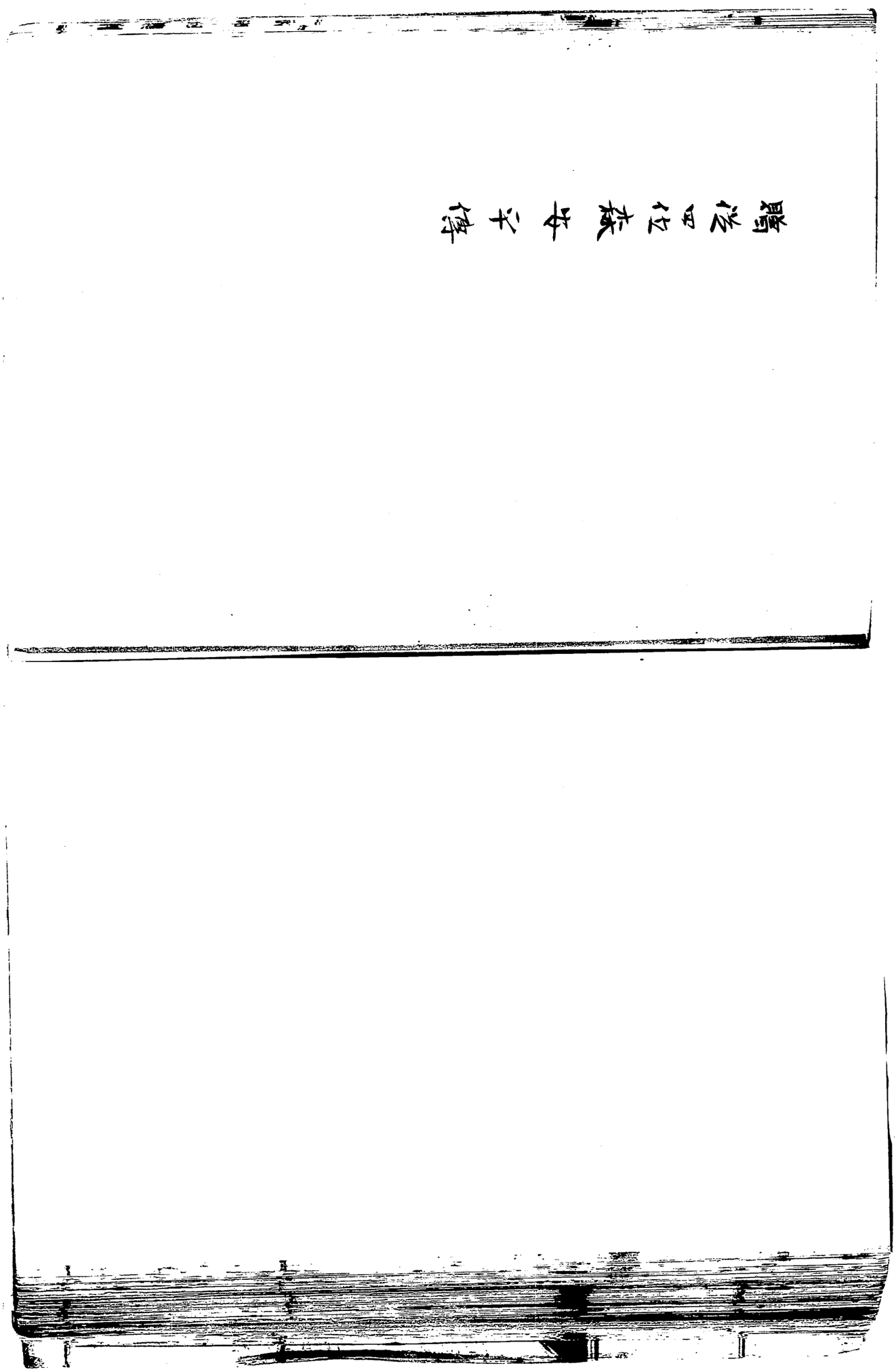
一慶應三年十月十七日 暁心ハ特別ヲ以テ免罪ヲ蒙ル
蓋シ暁心数年間此間中ニ於テ暁心ノ留而盡セシ
陸長ノ係ル其ニ五郎ノ侍従ハ嘗々良ニ其ニ次リ奏シ
此月五郎ハ役命帰洛大事ニ接シ旅館ヲ
発シ同出度微帰洛ノ命ニ就ハ[illegible]ニ悩シ陳公ハ前
嘗シ旅ニ於テ薩世子ニ出奮シ[illegible]等ノ全志ノ此間ヲ
暁心

解カレコトヲ勧告セラレシト云フ於此暁心及中村到早川養
敬ノ三名ハ右日ニテ先ツ免罪セラル其代ノ全志ハ翌二年戊
辰二月ニ於テ免罪セラレ蟄居役職ヲ辞ヘリ

一明治元年戊辰正月五日 暁心ハ陽居カラモ藩廳ヘ出
仕スヘキノ特旨ヲ賜シ名字格式共最前ノ通タルヘキ旨ヲ
仰ケ出ケリ

一仝年二月三十八日 暁心 博整ハ役職シテ播摩ト称不朝
其藩ノ者シ上藩ノ陳情ニ赴キ之花静軒モ亦タ役
職シ左右門ハ稲又浦上数国以下ノ者ノ退職シ蟄居
ノ厳命ヲ受ケ博整陳ニ役職シ高朝ニ[illegible]
遵奉シ為ノ全志者ノ此間ノ解キ之ヲ要路ニ役職
セシメ左右門ハ中村到等ト朝廷ノ命尾ノ御卫





贈從四位森安平

福岡縣筑紫郡住吉村　森安平　字壽吉　久

森安平名は信度字は道援静長堂春溪と号す幼名は平太郎
といへり文政十一年筑前那珂郡春吉村に産る父は福岡藩士
壽安平信慶と云て庫居宣長翁の高足青柳種麿の門
人にして國書に通せしく性質直毅にして文
毋に仕へて孝なり朋友の交誼篤し文武を好み槍術劍道の技
に長し其奥義を極めたり繕書を能し最も篆刻の
妙技有たり嘉永二年六月家名を嗣き世祿十五石を受たり
而して數政の秘書員となりたること久しかりしが辞せり
幕末鎖港攘夷の訴訟紛々として四方に勃興するに當り
幕吏に勅命を奉ずるに及て正義の士と要子事柔の所
置多く宮武自づから阻隔せり慶応元年八月十八日歿

に長藩の士卒禁門守衛を罷めしたる時同藩士うえ
性實美卿外六人の紐絆を奉じて所藩割據の魁を
成せり公武之を悪む事甚し諸藩は互に相疑ひ天下
將に乱れんとするの状態となれり藩主黒田長溥之を
憂へて世子長知を上京せしめ幕府をして鎖港攘夷の
叡慮を奉し宸襟を安んし奉らしむ且長藩に諭し
恭順を守らしむ公武合体寛典の所置あらん事を周旋
せしめん事を企図せり世子首途に臨み諸士を集し
祖先の祠前に於て共に神酒を飲み尊攘の意を遵奉
すべき誓約を固くし同年九月廿六日発途せらる此時有
名の士を擇び数十人扈従せしめらるるに信度も其一人なり
長防を経過せし頃同郷の親友中村無二曩に脱藩して

防州に在しうせるの上京を欲せざる旨を疑白しけるに無二は
命して先達て上京せし藩長の和解を謀らしめんとす此時
信度及伊藤茂次郎と共に無二に諭すに足らざる命せる事を
有志等の悪心事甚し長州に到て捕縛し難けれい京師に廣
まるべしとの密謀を企てや故に上京を止めて人心肯せずして上
りて周旋せるさるべし過激なる歩を多くして捕へて本藩に下し
獄に投ぜしめたり信度是を聞き同志の事長者なる戸川
佐左衛門正章に無二の忠志かく處せらるるは無道の事なり
主君の為に忠節を盡せば必禍身に及ぶと思へたる以後に
何事も傍観すべしと云故ちしに正章之を聞て他者が意
と者とい違ひたれば今語るとも聞入まじと思へば若い者の意
に任せらるべしに其后再び正章の宅に至り自身が見仕

是善かれさうし無二人の為に忠と為るべきに非ずと前日の過言を謝しければ正章に其節を折し事の違ひなく齎に奥の志を祈すべき一器量と感ぜり又手世子の京邸内し又在京の別庭と面晤して國事を相謀り朝廷に建言する事前後数回に至り然に此頃一般の風聞といふべく抵要の地にある有司も怠惰にして故様に警り蒙肆に遊ぶ者有りければ信度切歯して彼畫前の賜酒に既に醒しやと嘲言し且謁見を乞ひしに世子門見しなかりしを深く恨みて其忠志を賞し自身の意見とし謀り開かせしむる元治元年大将軍家茂公入洛せらしければ世子も数回謁見し親自さしむる既に幕府勅命を奉し横濱鎖港も変議し仕向を乞し仕向逢長藩梅悟と謀すべしとの勅を受らんとする國事四月

京に発し姫路に到らしに本藩にて要職に在し牧市内と告面大郎中原出れが斬殺し且中村無二獄に繋ぎて既に死したるこれ長藩の為す所と流言さるの殺和有たれば桂者顔色を失ひ長防を避けて海路より厚國有こを安全なりして明石に於て船を雇傭せんとす此時新政黒田山城増熊云へらく今度長州鎮撫の勅命を受け其後又幕に面晤し説諭せんと雖京有しに流言に依りて説得し給はずに天幕に對して何の詞のある如く代藩の誹謗を受けなば本藩の瑕瑾と如何せんと論ぜしに若側の輩長防を経過せしめて万一主君の身に災禍あらば如何せるやと増熊其言を聞て何とし云難しさらば衆議の如く船行有べし此者一人運を天に任せ陸行して主君に代り長藩に説加へと治此議に変せんと子

此時信度及万代安之亟庇崎迭造之人推して其坐ふへて長
州洋騰と聞き、まゝ其憂吾と不和此地より船行して浮
國し給ふと聞くかく俄ふ長州を避けしなば勅命と空く
しかも怪怖の汚名を天下に蒙し給ん事深恨なれば自分
等ふへ之命となり此地より走舸して彼の藩ふへ事情を探
り一人金中に名舊を迎へて鞍和すべし其報を聞き
まゝ陸行し給へべしと云しふ山城爲が忠孝感ずるふ餘
ゆゝ雖も長州ふへくば禍を懸ゝめん測り難しとしふ
自分等鹿従して國を出る日を遠へ期せざるし自家へ
を置たり命を失ふ事為るを嘆ずるを速を脱去すべ
しと為へければ世ふ斷然陸行ふ決せしめたり信度生寺直
ちふ其坐を襲し防州を西航を辛しを招賢閣を掌る佐木

男也間士なるべしと疑ひを信を許さゞるを臨機の辯解し
ければ翌日諸藩の妻客を同坐を列ねしめたり茲ふ於て藩情
を探りに我世を為すべき意なれば其旨告しふせま
長州ふへくば都驛を毛利世ふ會語し差なく帰城せ
しなり信度ふ後来の者なれども殊ふ之條卿の有顧を受け
揮毫の物を與へしめたり又錦小路頼徳朝臣を慕し時
衆信度を推し辯を先して進貢せしむ後長藩の使者ふ
推へしめて帰藩したり其後也州を使し之條卿ふ謁見せ事
有又浅香茂德と共を京塔の間を探索し也藩士楚剛を迎の妻
を聞き急使して帰藩す元治元年征長の命ふつし日主命
を受けて長藩を入り也府ふ訪くを有しを待して依頼し勅
制を與へらしたり翌慶應元年藩論變して懸疑を受け

初めハ自宅ニ葬し他の交通を断ち因位祝詞を奉守をしめうしたる
此時身後を除和せしもやゝ密ニ去ハ木托し竪二寸横一寸五歩
の墨石を求めしめ之を般若心経全文を彫刻せり其精巧ハ
皆驚美す終ニ獄人舎ニ下さし因年十月廿六日因志相謀り姦
計を廻らし上を悼ざる罪有らて自責の命を伝へて臀脂
せしむ時ニ三十八歳城下世尊院庄屋主宗安養院ニ葬る臨終
に一首の和歌を誦し家ニ贈る其詞ハ云ク　故郷ハかくなるこ
と言路しら傳我かへるさとけふも待ん
信度者ハ深ク信けし黄て文久ニ病牀ニ在し時看護至ら
さるなし又在世中因志の士藩政を乱ル或ハ藩侯ニ依頼し或ハ
因依して私利を謀言すさしとも其ハ無ク病文を男子ハ
さん事を憂り自身ハ行ひと異ハして主家の香火を永ク和

満ニ帰て藩主墓参の日親しく忠誠せし事ハ有たり又終ら
て後ハ故ハ人ニ連署して寺の建行を謀り或ハ京師ニ屋敷ニ特
遣ス所國有て富國強兵を謀らしめ建白せし事ハ多ク
り又文政の墓所ハ法華経八軸を浄書し経筒ニ納め深く埋め置
なり其者文を男の事かくの如し死後ニ子ハ家ハ族ハ久保氏の
二男久ニ綱ニ主て原徳を與へらしたり後藩議正ニ帰し信度
が嫡名を隆き旌忠祠（今千代の松原ニ有る護国社）ニ祭り其家ニ祭
資ニ与へる其文ニ曰ク墨宇勤王の志篤く方向確乎として
邦家ニ心を盡せしニ在り一時寃抵ニ罹り忠志と
抱けざりしを追悼し永世毎年祭祀の料ニ白銀二十枚と與
ニ年明治廿五年十一月八日特旨を以て従四位を贈り給へり

新野保履歴書

新野保

一父新野宙三郎
宙三郎ハ石塚文精ノ二男ニテ弓組新野
四助ノ養子トナル
一母柴田千ヨ
千ヨハ和藤内匠ノ家来宗田弥蔵ノ四女
ニテ新野家ニ嫁ス
一保ハ天保六乙未年正月十四日ニ生ル幼名岩吉
郎後十助ト唱ヘ又十兵衛ト改メ更ニ保ト
改名ス
一弘化四年十一月父宙三郎退隠家督相

續ヒ御足軽ニ組入ニ命 食禄拾弐石三人
扶持ヲ世襲ス
一嘉永三年十月御側筒ニテ召直
一嘉永三年ヨリ安政五年迄九ヶ年間ニ長崎
御越座御供ニテ十七度出府ス
一嘉永四年三月長崎奉行水野筑後守
御領内通行ニ付出張ニ精勤セシ旨ヲ
賞青銅若干ヲ給セラル
一嘉永四年七月高野流砲術目録師範
小嶺武平ヲヨリ相傳ス
一嘉永七年四月江戸御出府御送り遣
御供ヲ命出府ス

一同年五月安倍立剣術目録印状師範
吉留幸太夫ヨリ相傳ス
一安政四年三月神當流抜刀術免許皆傳
又宙三郎ヨリ相傳ス
一同年十月日置流竹林流射術目録師範
首藤五一右衛門ヨリ相傳ス
一安政五年七月小笠原流射礼目録師範
加藤又右衛門ヨリ相傳ス
一安政六年二月江戸表ヘ詰方ヲ命出府
シ江府滞在三ヶ年
一同年五月小笠原流射礼傳祖舊幕府御箭元
小笠原平兵衛氏ノ門ニ入師家加藤又左衛門

ノ命ヲ受事理ヲ研究ス

一安政六年十二月於江戸表ニ御屋敷廻リ被
命右役精勤セシ旨ヲ以テ青銅若干支給セ
ラル

一文久二年十月御上京御供ニ命出府ス

一同三年三月小笠原流射礼及犬追物ノ事
理故實氏免許師範加藤司書ヨリ相傳ス

一慶應元年五月進藤登与丹添薩州ニ被
指越

一同年六月不審ノ次第有之旨ヲ以テ召籠ニ命

同年八月廿八日ヨリ於宿所ニ蟄居ニ命

一同年六月衣類制度改役ニ命

前後

一同年十月行曲ノ者、致同氣心得方不宜不將ノ次
第タル旨ヲ以テ遠島蟄居ニ命
但福岡并木屋内ニテ蟄居ス

一同年十二月十九日前記蟄居ニ付退隱跡家督ノ
儀ハ弟文兵衛ニ相續ニ命

一同二年八月御城内水ノ手ヘ轉宅ニ命

一明治元年二月朔日天下無罪ノ域ニ可被為成
聖慮ニヨリ全國ヘ大赦ニ行前記咎ニ免蟄居被
指免

一同年三月一代側筒ニ召出三人扶持米拾五俵
支給セラル

一同年五月文武引立受持手付頭取半礼ニ

被命

一同年十一月御用有之薩州ヨリ指越

一同二年正月御詮議ヲ以テ功米拾弐石三人

扶持ヲ支給セラル

一同年同月文武引立受持ヶ傳役中直礼ニ

被命

一同三年正月郡市浦監察ノ号ニ相立右役

被命

一同年三月一代直礼ニ付命

一同年同月司民局少属ニ付任

一同三年五月小笠原流射礼及大追物ノ事理故

實氏皆傳師家加藤聖武ヨリ相傳ス

一同年五月監察局少属ニ付任

一同年六月累年勤王之志厚ク國家ニ心力ヲ

盡シ不幸一時之寃枉ニ罹ト雖モ其志不相撓

近奇特ノ至ナル旨ヲ以テ永世拾弐石三人扶持

被支給

一同三年八月賢礼事件詮議掛兼務ニ付命

右精勤セシ旨ヲ以テ金子若干ニ付支給

一同年十月藩改廳權大属ニ付任

一同年同月安倍立剣術免許皆傳師筑軒吉

留厚ヨリ相傳ス

一同年十月本官ヲ以テ學校掛ニ付命

一同年同月豊後國日田表紛擾ニ付伐者少

参事ヲ付添同所ヘ出張ヲ命

一同四年六月武館轉移ニ付職務勉精セシ
旨ヲ以テ金子若干ヲ支給

一同年九月藩学校ヘ寸志献金セシ旨ヲ賞

一同年十月庶務掛權大属ヘ轉任ヲ命

一同年十一月本官ヲ以テ工掛ヲ命

一同年同月庶務掛兼務ヲ命

一同年十二月更ニ權大属ニヲ任祖税課工掛ヲ
命

一同五年七月免本官吏ニ少属ニヲ任

一同六年二月依御指令士族編入ヲ作付

一同年六月工事月俸下賜セラル

一同七年三月依願ニ免本官

一同年四月御笠郡筑紫村ヘ轉居ス

一同年十一月第五大学区三十四番中学区取締ヲ命

一同九年三月第十二大区調所一級出仕ヲ命

一同年五月第十二大区副区長ヲ命

一同年十二月第八大区々長ヲ命

一同十年六月学校資トシテ金拾円寄付セシ旨ヲ
賞木杯壱個下賜セラル

一同年十一月依願ニ免職務

一同年十二月第八大区三小区戸長ヲ命

一同年七月先般騒擾之際兵殻ニ四惟リ一時穴居
迫リ者ヘ金七円指出候旨ヲ以テ賞

一同十一年八月学校資トシテ金拾円寄付セシ上日
ニ賞状杯吉個下賜セラル
一同年十二月工座下座夜須郡書記ニ命拾
三等相当月俸ニ支給
一同十二年一月十二等相当月俸ニ支給
一同年十二月九州地方騒擾ニ際シ盡力セシ上日
ニ賞金子若干ニ支給
一同十三年六月依願ニ免本官
但満吉ケ年以上奉職ニ付金子ニ支給
一同十七年七月御笠郡流紫村外八ケ村戸長ニ命
一同十九年十二月依願ニ免本官
一同二十二年四月御笠郡筑紫村々長当撰ス

一同二十三年八月病氣ニヨリ村長ヲ辞ス
一同二十三年十月戸主退隠ニ養嗣子保典相
續セシム
一同三十年八月十七日病歿年六十三
右之通復也
明治三十九年三月

俄に長く陸奥に隠れ無きありて、世家に疵がなく
新孤の事思へば口惜しくて、実に歯を噛むとやらん、有之
藩祖君公より是迄度々家に至て裏切に成て、世先祖
に対し済まぬ事と存上へ忠臣い山形死やら牢にぬぐむ心
やらしたに事なれば、いんま世家が亡びようと主君
どうでいんま藩を長く頭を上てきめ付るぞやらくと
おもつば口惜くて、たまらず仙台屋が我前を東門を怨
よと云こに孤が心おがするこ孤れ今早く世間が笑の
種と思居り立ち城物(墓山城)指出おもの事を云ふ
申し是万事は責任あらばまぐ筆紙にあるべし
レキ傳とのこと故命事なり云々

右慶應二年六月朝日ノ西箭方ノ(新八郎ニ対ス者)

此頃迄、幕府の秘策、征長論を勧力する恐しき賢明なる長州藩の人吉起りしなれば、彼幕の人吉起りしなれば、時世を達観とられた文勝文が如きは、ずう賢明なる公の時世を達観とられた文勝文が如きは、新八郎に新たに二百石を賜ひ、永世録五十俵を下賜せられしに、恐懼に堪へざる所なり

一、茨山、廣島元年の頃、山口嶋に流罪に處せられ、廣島三年、主の四年始めこの頃召還せられ隠居仰せ付永世録五十俵を賜ひ、勤王の勲功を賞せらる

一、明治十一年　死去ス　福岡県下一居住

茨山五男三郎五郎記す

明治三十九年八月十二日

同、記す、先年贈位ありし大神（神宮）伊岐、逆氏、姫海、石茨山、留学居役大神宰右衛門、悴、子新八郎の山陰主ありし

右大神伊岐氏茨山の指図を受け大に国事に盡瘁ありし

又昨年位階を賜はりし長谷川氏も文久四年二月〃〃留学居役吾相、茨山の股肱ありて国事に奔走ありし

そもそも暗雲に乗じ来りしこの歌一首よりして進ず

都にいさみて出る男子のこころざしを見よ

此歌に来る国とは、我宰の口より出る色香の世辞と

為べき勤王家の説、宰府の落胆、是も家老、民衆

迷いすべし、極内ふこと自分を指行て、切切に云へども

倒の其を命ずの過ぎるやうなんと思い後、歌三首

と添て渡す　述懐

捨てても捨てられぬ心にこもる君の心の風

ひとり寝の夢にまぎれぬ古くとおもへば大和魂

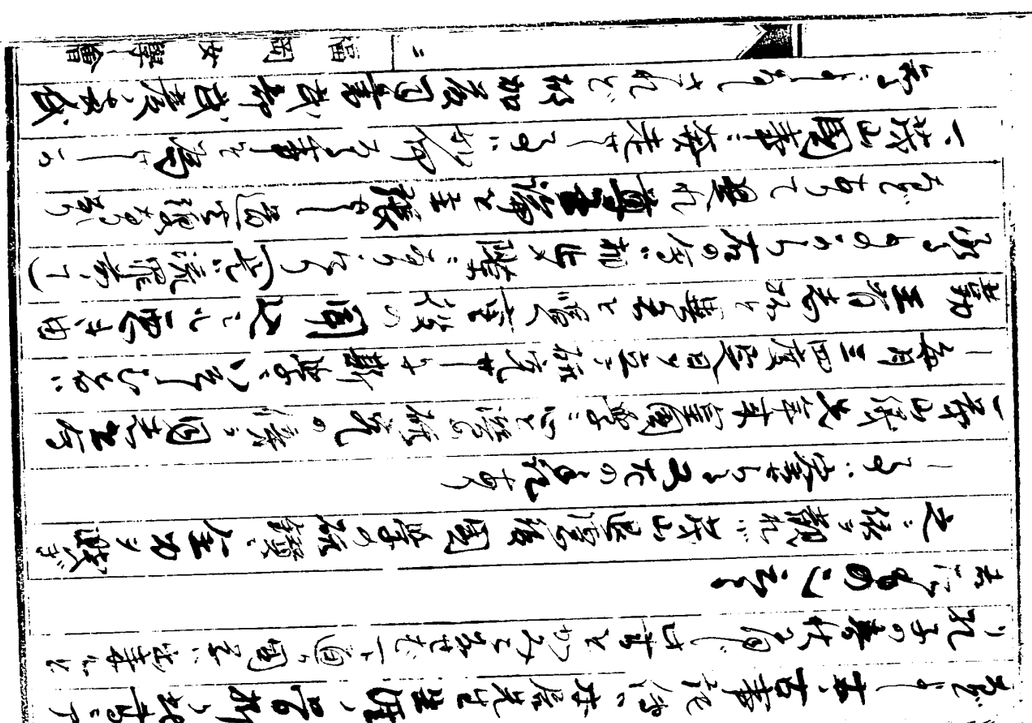
うれしくもかなしくもあり世を捨て心あらば弱任せ

又小生島からの手紙（北項藩論絶對的佐幕論に

て今日の考へ如何にあらずや　幕府の勢力盛なりし時

一、長州が五月廿五日（慶應二年）に（慶應三年）日支新さの中に強い征伐有之よし　松ケ崎に出張の人々　幕府方たるべし　きっと一往見物　人数繰出報の事々　幕府方たるべし　薩州の意白い誠に至当の事と　とせしたけりなるべし　薩州の時に西ケ浦より船掛り　西宮より水夫三十人福岡に出しに　孫や　事由なり　先日も多数の人数出る　なんの舊之進（新八郎が弟）黒崎と言なるべし（中略）近来の間　循環盛なれば　幕府の指図なたらば　先ず日も多へ踏込なるべし　舊之進なれば　皆殺しに遇ひ　人数大に損ずる　此度の戦　死と極めたる　中に　負るる思ひもよらず　上薩州　薩州すぐに　出張　薩州　思ひ〳〵に　徒党して　幕府と　一方　一方　当藩

負て人間が深まると　引き　気性の　荒い魂　ぐんと
ゆ　年の　年　人魂　のり　来て　事　妻飯　高所の　森
めつたやたらに　宮　気　狩　百人　一言　聞　知　知
天智天皇　あき　里　一吹の　住　宿　恨　我　里　もも　のけつて
於伝　来　迫　頭　本　れば　島人の　衣ほす　山
人麿　あ　峰の　山の　麓の　宮の　中　山
猿丸　小倉山　里外　向　姉　ぶ　何の　世
長屋　京　西　ら　花　春　洋　遠　人
浮丸　宮　この　仕　帰　春　ぬし　春の　島山
西照　天神　凡　宇　こ　せ　以　け　乙女　ます　て　暫　とぶん
ぶ　た　武士の　苦　思　ぶ　ま　伊　の　乱　そ　の　一　国　と　思　て
表孝　君　の　う　春　も　れ　て　明　て　京　む　こ　ま　で　宮　に　入　た



67736
昭4. 9. 20

680
工
6

故三浦茂山墓碑

一三浦茂山ハ姓ハ河合茂山と稱し諱ハ勝文と云ヲ文政四年十月福岡荒戸町ニ生ル

一天保三年正月京都ヲ僅キ八百石ヲ領シ文化ニ於テ五時文政十年

一天保ヲ年十月十九才ニシテ御使番役ヲ命セラル

一弘化二年四月廿五才ノ時病氣ノ爲メ職務ヲ免セラル

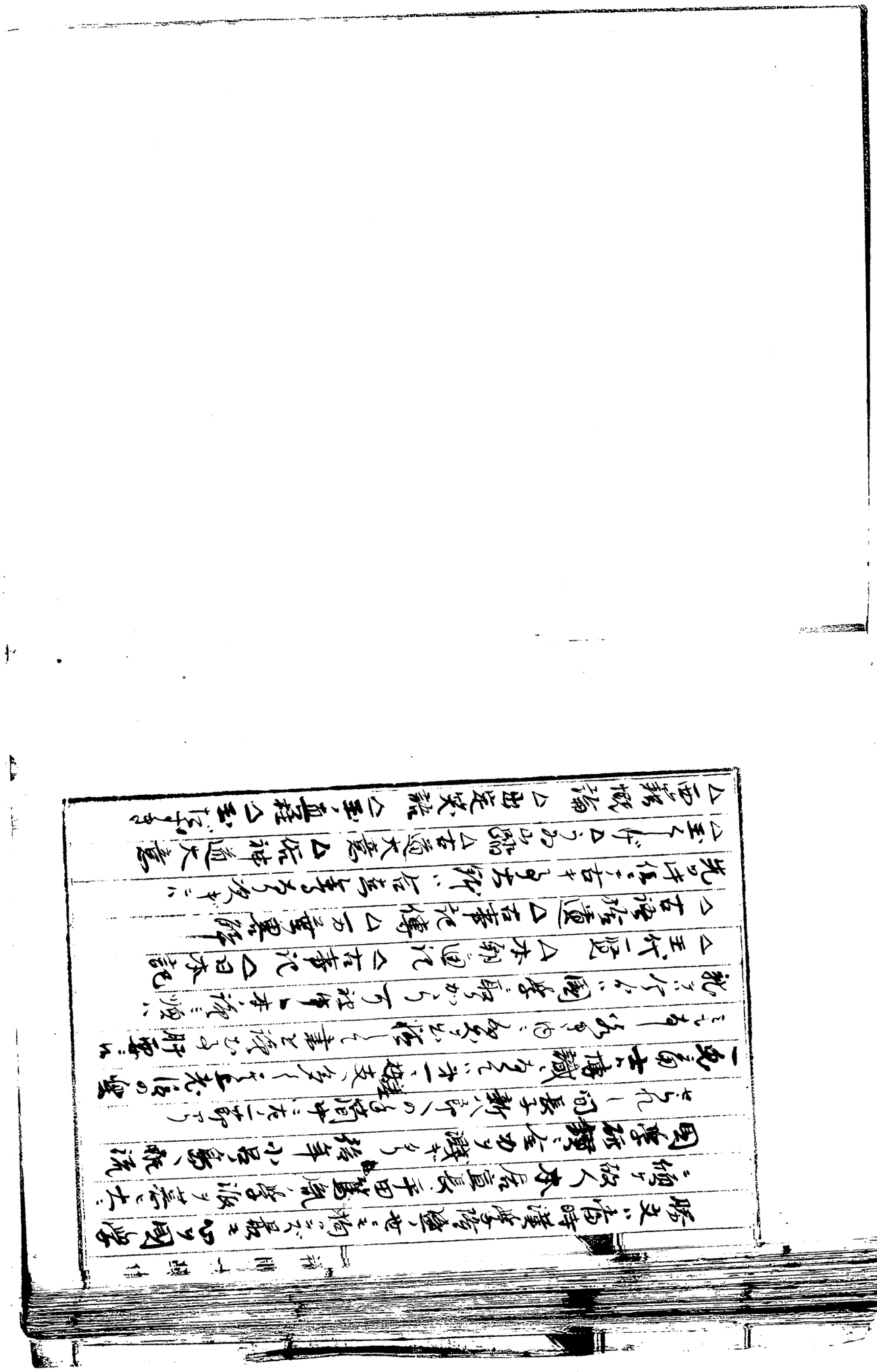
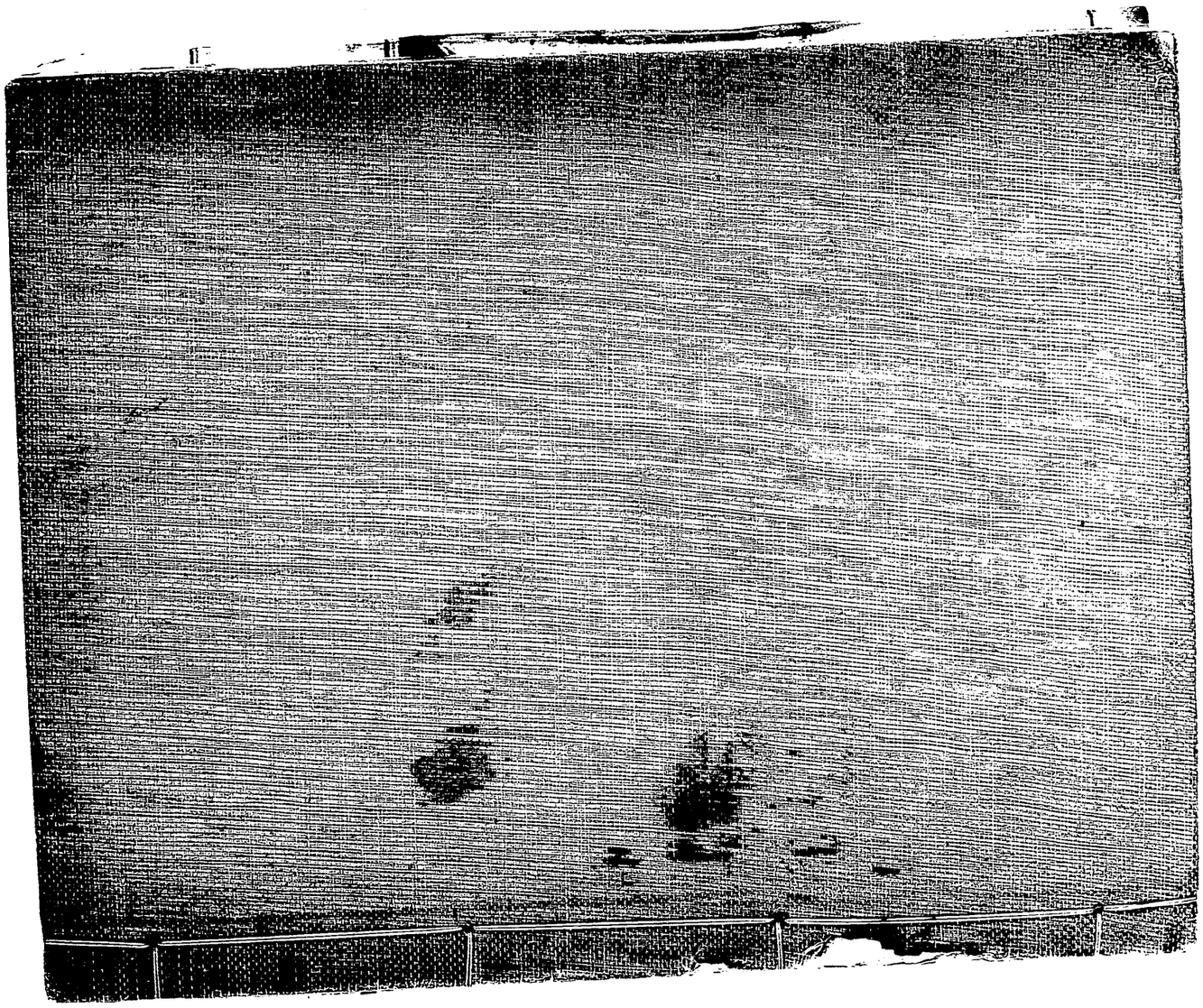
但シ此間江戸(幕府)長崎、長州、防州、豊後等ニ度々御使番ニ遣ハサル

一嘉永二年六月廿八才ニシテ隱居(病氣ノ爲)ニ願ヒ

ヤリ長男河合新八郎ニ(今ノ從六位三浦砂)家祿八百石ヲ賜ル

五郎白ハ以下ハ隱居ノ身ニテ別ニ記スベキヲナシ

とハ兄オセめばの親密の間柄にて其の屋敷ハ左門氏ハと一田黒田山城守の邸宅隣と疑し居たるまゝ同住居れり

一小呂島配流中ノ日記ハ二三と巻ぐれバ百人一首作り替ヘノ序

貴之が言さまに言とめすそうまく詠んで見すれが角ハ世と人せたに免でん者りしそ到歌なる廣戸侍でも美しんせと人せたに孤ほやりくと笑ひけるハ是ハ中ニ品オの姓名式が出ル如きなんならん信じやハ親玉が又云ハ世ハ華麗と嘲ける言げりくと本く性の奇しやつぞう奇だらうコリヤ面白ィ島ヤ出めが奇と帝ならば方そそ口こそけハ衣屋で底ルるまらこつちく任セロゴつこんーよ舎出ヨ